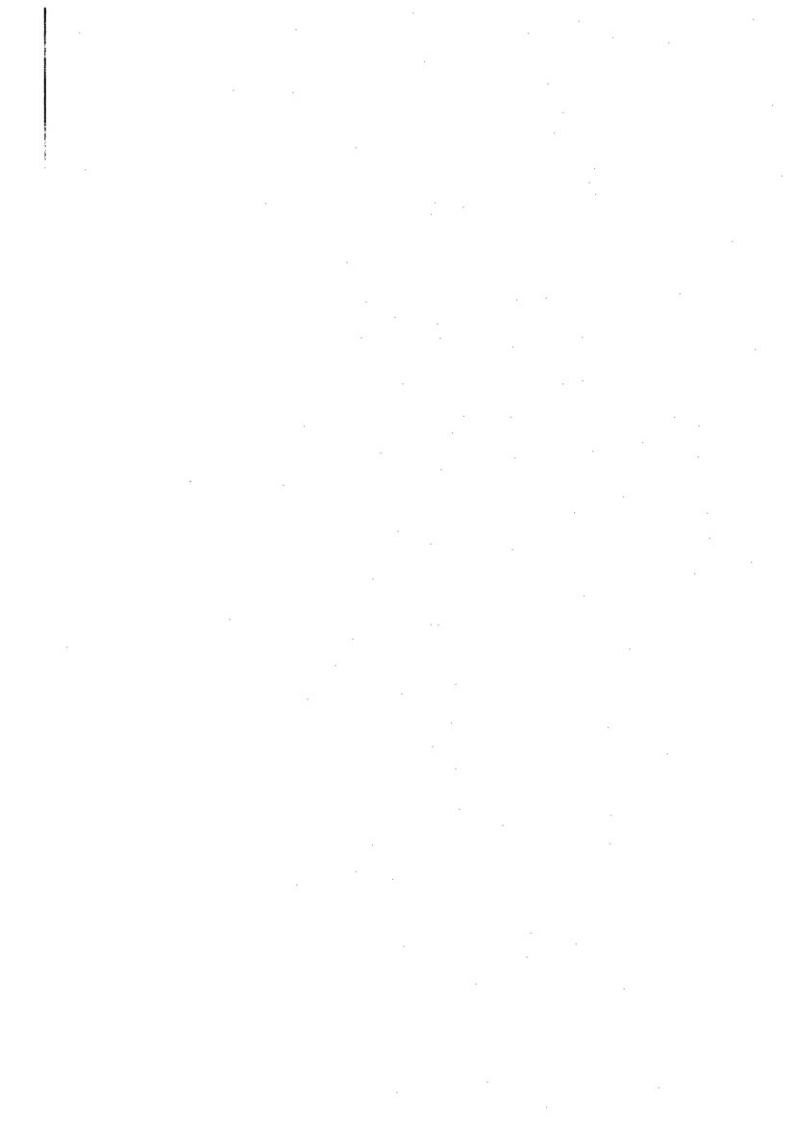


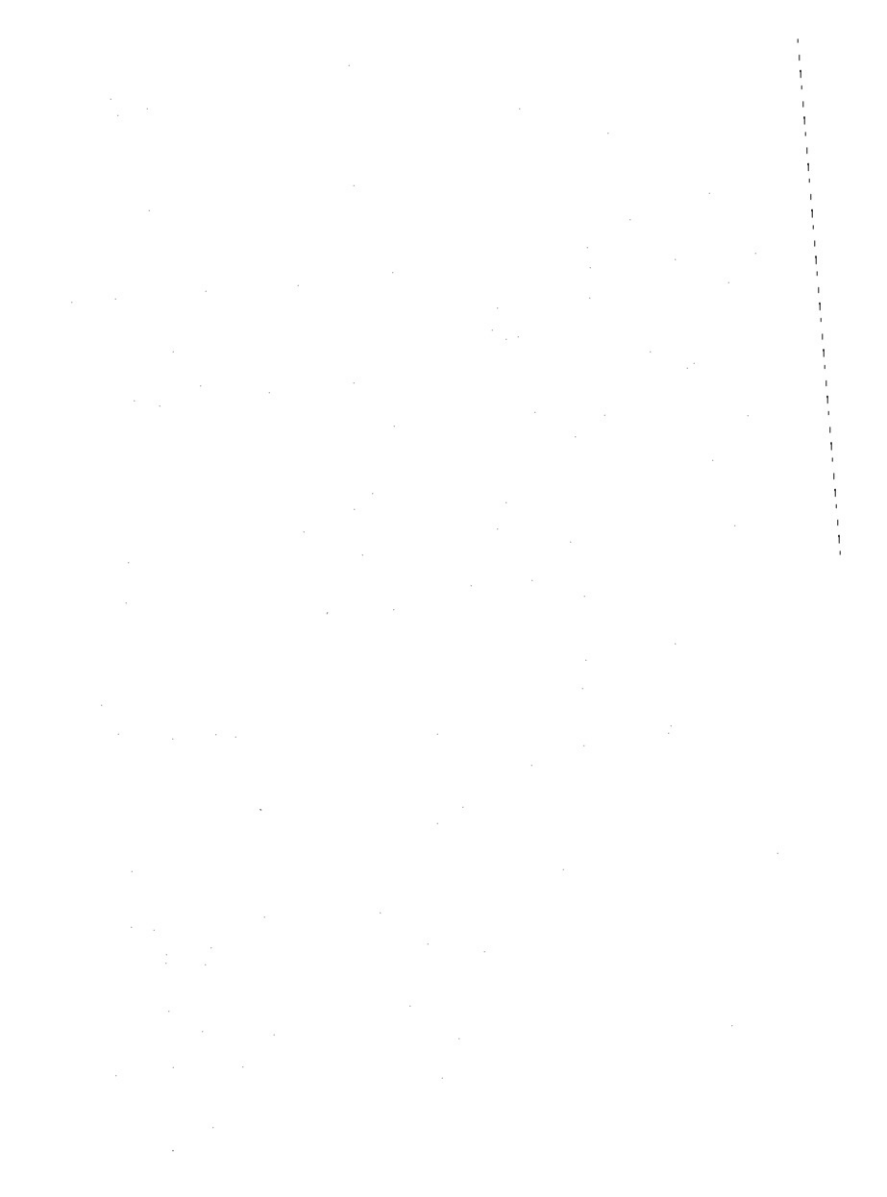
つち はし なが さわ
土橋横穴群・長沢遺跡

発掘調査報告書

1991

掛川市教育委員会





つち はし なが さわ
土橋横穴群・長沢遺跡

発掘調査報告書

1991

掛川市教育委員会

序

原野谷川流域には郷土の先人の遺跡が数多く残されています。現在の生活を考えるとき、古えの事跡を軽視することはできません。現在の豊かな社会をささえる基盤には先人の蓄積した苦勞があり、その果実を今我々が享受しているといえます。

一片の土器を手にするとき、千年、二千年の時を経て。これを使用した先人の息吹が伝わってきて、胸に迫るものがあります。この土器を使った人や家族はどんな暮らしだったのか、四季を通じてムラの生活はどんなだっただろうか等様々な想像が尽きません。

文化は破壊することはたやすいけれど、創造することは大変な努力と苦勞が必要です。今に生きる私達には、先人への感謝と歴史の継承が求められていると考えます。

このたび、静岡県総合教育センター（仮称）建設にともない、用地内の埋蔵文化財を掛川市教育委員会が発掘調査を行い、その報告書を刊行する運びとなりました。

調査結果によりますと、横穴の宝庫といわれる掛川市域における原野谷川沿いの横穴群は、この地域の古墳時代後期の遺構として貴重なものであり、また弥生時代の墳墓等の発見もあり、大きな成果をあげました。

この調査に対し、当初より深いご理解とご協力を頂いた静岡県と地元の方々へ厚くお礼申し上げます。この報告書が今後の埋蔵文化財への理解、郷土史の資料の一助となれば幸いです。

平成3年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 西ヶ谷免志雄

例 言

1. 本書は、平成2年10月20日から平成3年3月31日まで実施した静岡県掛川市細谷字土橋及び下垂木字長沢に所在する土橋横穴群と長沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、「県総合教育センター建設用地内埋蔵文化財発掘調査業務」として、静岡県知事を委託者、掛川市長を受託者とし、掛川市教育委員会を調査主体として実施した。
3. 現地の発掘調査は掛川市教育委員会の戸塚和美が担当し、現地調査では市内在住の大熊茂広君、また整理作業では浜松市在住の井村広巳君の協力を得ている。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。
大熊茂広・竹下英夫・山田繁治・戸塚英雄・青島信二・深田勝治・深田好徳・鈴木義男・安間積・木村治郎・松井肇・吉川仁・水口長治・鈴木辰江・鳥居鈴江・長谷川幸子・伊藤和子・鈴木はつ子・松井田鶴子・榛葉たみ江・原田てい子・中村すま子・石川きみよ・井野鈴江・松井しか・吉川幸子・吉川利子・平尾民子・戸塚春代・山崎よね・平尾なみ子・竹下千代・山崎さと・藤本末子・山崎民子・向井多賀子・榛葉豊子・井村広巳
5. 現地調査ならびに本書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を得ている。
吉岡伸夫氏・松井一明氏・鈴木敏則氏・佐藤由紀男氏・篠原修二氏・加藤理文氏（順不同）
6. 本書の編集・執筆は戸塚和美が行った。なお、遺物の実測・トレースは掛川市教育委員会の前田庄一が担当し、井村広巳がこれを補佐した。遺物の写真撮影は掛川市教育委員会の松本一男が担当し、戸塚和美がこれを補佐した。
7. 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷免志雄・社会教育課長安達啓・社会教育課専門官岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁北を示す。(1991年1月現在)
2. 本書で使用した遺構名称は下記の意味である。
SF：土壌 SR：道状遺構 SD：溝状遺構
3. 本書で使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。ちなみに土橋横穴群では、調査開始当初3号横穴の墓前域（墓道）を別の横穴と誤認し2号横穴と命名したが、その後同横穴であることが判明、そのため2号横穴は欠番となっている。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

序

例 言

凡 例

I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	3
1) 地理的環境	3
2) 歴史的環境	5
II 土橋横穴群の調査	9
1. 遺 構	9
1) 横 穴	9
2) 道状遺構・溝状遺構	34
3) 土 壙	37
2. 遺 物	39
1) 土 器	39
2) 鉄 製 品	49
3) 装 身 具	54
III 長沢遺跡の調査	58
1. 遺 構	58
2. 遺 物	61
IV ま と め	62
1. 土橋横穴群について	62
2. 長沢遺跡について	65
3. まとめ	65

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	1
第2図	遺跡の周辺地形図	4
第3図	土橋横穴群遺構全体図	7
第4図	第1号横穴遺物出土状況実測図	9
第5図	第1号横穴実測図	10
第6図	第3号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図	12
第7図	第3号横穴実測図(1)	13
第8図	第3号横穴実測図(2)	14
第9図	第4号横穴実測図	16
第10図	第4号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図	17
第11図	第5号横穴実測図	19
第12図	第5号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図	20
第13図	第6号横穴実測図(1)	22
第14図	第6号横穴実測図(2)	23
第15図	第7号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図	24
第16図	第7号横穴実測図	25
第17図	第7号横穴奥壁部横穴実測図	26
第18図	第8号横穴遺物出土状況実測図	27
第19図	第8号横穴実測図	28
第20図	第8号横穴墓前城実測図(1)	29
第21図	第8号横穴墓前城実測図(2)	31
第22図	第9号横穴実測図	33
第23図	SR01・SD01実測図(1)	35
第24図	SR01・SD01実測図(2)	37
第25図	SF01実測図	38
第26図	出土土器実測図(1)	43
第27図	出土土器実測図(2)	44
第28図	出土土器実測図(3)	45
第29図	出土土器実測図(4)	46
第30図	出土土器実測図(5)	47
第31図	出土土器実測図(6)	48
第32図	出土鉄製品実測図(1)	50
第33図	出土鉄製品実測図(2)	51
第34図	出土鉄製品実測図(3)	52
第35図	出土鉄製品実測図(4)	53
第36図	出土装身具実測図(1)	56

第37図	出土装身具実測図(2)	57
第38図	長沢遺跡グリッド配置図	58
第39図	長沢遺跡全体図	59
第40図	S F 0 1実測図	60
第41図	出土土器実測図	61

挿表目次

第1表	第3号横穴出土装身具計測表	54
第2表	第4号横穴出土装身具計測表	54
第3表	第5号横穴出土磁石計測表	54
第4表	第7号横穴出土装身具計測表	54
第5表	第8号横穴出土装身具計測表	55

図版目次

図版1	上: 調査前全景 下: 土橋横穴群全景
図版2	上: 第1号横穴礎床・遺物出土状況(西より) 下: 第3号横穴全景
図版3	上: 第3号横穴閉塞状況(墓道より) 下: 第3号横穴閉塞・遺物出土状況(玄室より)
図版4	上: 第3号横穴遺物出土状況 下: 第4号横穴全景
図版5	上: 第4号横穴閉塞状況(墓道より) 下: 第4号横穴閉塞状況(玄室より)
図版6	上: 第4号横穴遺物出土状況 下: 第5号横穴閉塞状況(墓道より)
図版7	上: 第5号横穴全景 下: 第6・9・7号横穴全景
図版8	上: 第6号横穴遺物出土状況 下: 第6号横穴遺物出土状況
図版9	上: 第7号横穴棺台・奥横穴全景 下: 第9号横穴礎床・遺物出土状況
図版10	上: 第8号横穴全景 下: 第8号横穴遺物出土状況

- 図版11 上 長沢遺跡全景（北より）
下 SF01全景（東より）
- 図版12 上 伐採風景
中 重機作業風景
下 作業風景
- 図版13 上 第3号横穴墓道
下 第3号横穴玄門～墓道（玄室より）
- 図版14 上 第4号横穴墓道
下 第4号横穴玄門～墓道（玄室より）
- 図版15 上 第5号横穴棺座内遺物出土状況
中 第5号横穴玄室内遺物出土状況
下 第5号横穴大刀出土状況
- 図版16 上 第8号横穴全景
中 第8号横穴玄門～羨道（玄室より）
下 第8号横穴遺物出土状況（東より）
- 図版17 上 第6号横穴玄室全景
中 第7号横穴奥壁部横穴
下 第9号横穴棺台
- 図版18 上 第5号横穴奥壁
中 第5号横穴左側壁工具痕
下 第5号横穴右側壁工具痕
- 図版19 上 SR01・SD01全景（東より）
下 SR01・SD01全景（西より）
- 図版20 出土土器（1）
- 図版21 出土土器（2）
- 図版22 出土土器（3）
- 図版23 出土土器（4）
- 図版24 出土土器（5）
- 図版25 出土土器（6）
- 図版26 出土土器（7）
- 図版27 出土土器（8）
- 図版28 上 出土土器（9）
下 出土鉄製品（1）
- 図版29 出土鉄製品（2）
- 図版30 出土鉄製品（3）
- 図版31 出土装身具（1）
- 図版32 上 出土装身具（2）
下 長沢遺跡出土土器



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

遺跡地名

1. 土橋横穴群 2. 長福寺古墳群 3. 宮坂横穴群 4. 古戦横穴群 5. 楠ヶ谷横穴群 6. 海塚古墳群 7. 小高古墳 8. 石ヶ谷古墳群 9. 美人ヶ谷古墳群 10. 平塚古墳 11. 天段古墳群
12. 塚佐ヶ谷横穴群 13. 堂前横穴群 14. 十五ヶ谷横穴群 15. 別所横穴群 16. 峯横穴群 17. 鰯原横穴群 18. 岩谷横穴群 19. 梅ヶ谷横穴群 20. 西谷田横穴群 21. 三十八坪横穴群A群 22. 山麓山横穴 23. 宇洞ヶ谷横穴 24. 岡津横穴群A群 25. 岡津横穴群B群 26. 本村横穴群A群
27. 本村横穴群B群 28. 上山古墳群 29. 大谷代横穴群 30. 新田・南坪横穴群 31. 長沢遺跡
32. 金鍔原遺跡 33. 山下遺跡 34. 原川遺跡 35. 梅橋北遺跡 36. 領家遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

静岡県では、近年の社会変化に伴い生涯学習の体系への移行や国際化、情報化が進む中で、新たな教育問題に対応するため教員の資質向上などを旨とした総合教育施設建設構想が打ち出された。

基本構想によれば、『県総合教育センター（仮称）』として、教職員研修の他に教育界の情報化への対応、生涯学習の推進を三本柱とするもので、県教育界の中核機関となる施設の建設を目的とするものである。

その建設候補地として、掛川・袋井・磐田市をはじめとする県中西部五市が挙げられたが、主要幹線に比較的近い交通の利便性、県中西部に位置すること、そして基本構想でかけられた諸機能を果たすべく施設や屋外環境が十分整備できる広範囲の用地確保が可能であること等の理由から掛川市の富部・細谷地区を建設予定地とすることが平成元年12月1日に決定した。

今回の県総合教育センター建設用地は、9万㎡にも及ぶもので、その中には数カ所の埋蔵文化財の存在が予想されていた。平成2年度に入りその対応と処置について、静岡県教育委員会（生涯学習室）と掛川市教育委員会とで協議がもたれた。事業計画によると、用地の有効利用、周辺地（家代土地区画整理用地等）との整合性等の観点から、その建設に際しては、これらの埋蔵文化財の破壊は免れないものと考えられた。その結果、発掘調査による記録保存に万全を期すこととなったわけであるが、当時、掛川市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査事業は、多数の公共・民間開発事業に伴う緊急調査によって忙殺状態にあり、平成2年度内の調査計画に新たに組み込むことは困難と考えられていた。そのため仮に、掛川市教育委員会が調査を行う場合には、平成3年度事業に組み込むこととして、調査開始時期の調整を要請した。しかし、建設事業計画では、平成7年度に開所を目指していることから、少なくとも発掘調査は、平成2年度内に完了させなければならないという時間的に予断を許すものではなかった。その後、一旦は掛川市教育委員会が調査を行う方向に落ち着くかにもみえたが、実際には極めて困難な状況にあったため、再度調査体制については振り出しに戻り、静岡県埋蔵文化財調査研究所への委託も検討された。調査体制、調査期間について何回かの協議、調整を重ね紆余曲折の末、掛川市教育委員会が受託することとなった。

今回の発掘調査事業は、静岡県と掛川市教育委員会とで交わされた「県総合教育センター建設用地内埋蔵文化財発掘調査事業委託契約」締結をもとに記録保存を目的として行われた。

2. 調査の方法と経過

今回の施設建設用地の面積は9万㎡にも及ぶもので、用地内には土橋横穴群をはじめ数カ所に埋蔵文化財の存在が予想されていた。

土橋横穴群は、既開口の横穴が1基確認されていたため、周辺にも複数の横穴が存在することは、確実視されていた。現状は急斜地で植林木、雑木が多数あるため、それらの伐採から始めた。引続き、重機による表土除去と横穴の存在確認を行った。その結果、斜面上部においては地山（凝灰岩質砂岩）がかなり広範囲にわたって崩落しており、この崩落土の下に天井部が落盤した横穴が、いくつか存在することがわかった。作業の迅速化、安全面等を考慮し、横穴が確認できる部分まで重機を使用し、

確認後人力による精査作業、そして各横穴の調査に入った。

土橋横穴群以外の調査としては、当初存在が予想された古墳3カ所、集落跡と考えられる緩斜面について、トレンチによる確認調査を行った。その結果、その多くは遺跡とは認め難いものであったが、長沢遺跡において、遺構・遺物を検出したため引き続き本調査を行うこととした。

横穴の実測は、横穴の奥壁中央と玄門中央を結ぶラインを主軸とし、50cm方眼を設定して行った。土橋横穴群の平坦部と長沢遺跡については、それぞれの地形に合わせて5m方眼のグリッドを設定して行った。

現地での図面作成は、横穴は10分の1、その他の遺構は10分の1と20分の1縮尺を併用した。

写真撮影には、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを用いた。

調査の経過は以下の通りである。

土橋横穴群

平成2年10月20～31日	調査区内の雑木伐採
11月1～9日	横穴以外の古墳等のトレンチによる確認作業
11月13～17日	重機による山斜面、平坦部の表土除去作業 横穴確認作業
11月18～	1～9号横穴・平坦部の遺状遺構等の掘削、実測作業
平成3年 1月14日	横穴群全体位置図作成
1月16～22日	横穴群全体の完掘精査、写真撮影
1月23～26日	各横穴玄室内覆土の水洗い 現地撤収作業

長沢遺跡

平成2年12月28～	
平成3年 1月8日	人力による表土除去作業
1月9～10日	遺構掘削、遺物取り上げ、実測作業
1月11～14日	調査区の写真撮影、全体測量

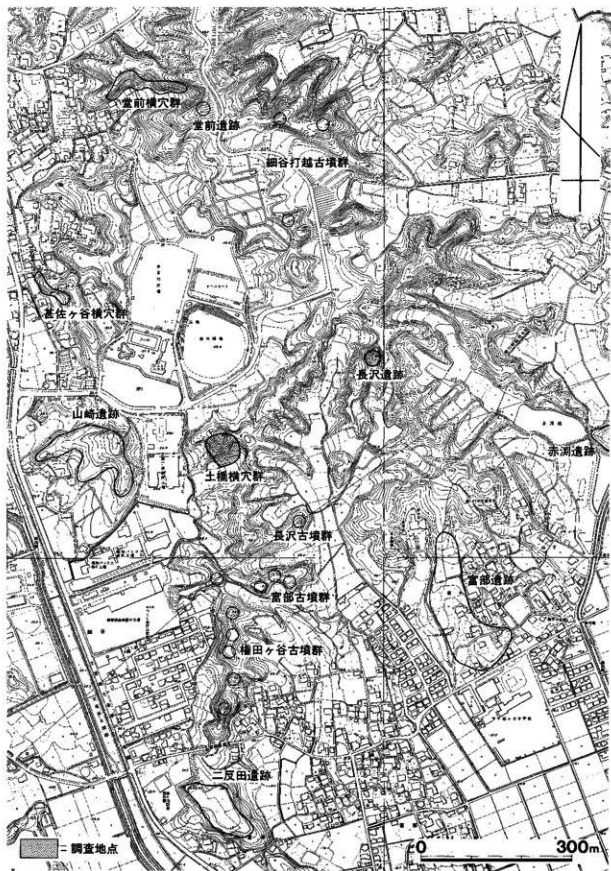
3. 遺跡をめぐる環境

1) 地理的環境

掛川市は、原野谷川、逆川をはじめとする中小河川により形成された沖積平野がいくつも広がっている。その沖積平野の端は、枝状に開析された小さな谷が無数に、しかも複雑に入り込んでいる。これらの開析谷の山斜面に、当該地域の古墳時代後期の特徴である横穴が数多く構築されている。

今回報告する土橋横穴群は、原野谷川の左岸丘陵の開析谷に位置する。

この丘陵の微地形を観てみると、原野谷川と垂木川によって形成された沖積平野に張り出す細い舌状の丘陵で、東西ともに開析谷が発達しているため尾根は非常にやせており、その尾根が無数に枝状に広がった複雑な地形を呈している。この丘陵裾には微高地が形成されており、そこに弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が立地し、尾根上には古墳時代中後期に形成された古墳群が分布す



第2図 遺跡の周辺地形図

ると考えられている。

今回報告するもう一つの遺跡、長沢遺跡はこのような奥深い山並の尾根上に位置する。

2) 歴史的環境

長沢遺跡をめぐる歴史的環境として、原野谷川流域を中心に弥生時代中期の遺跡を概観してみたい。原野谷川流域の河岸段丘は、中流域においてよく発達しており、この段丘上に弥生時代の遺跡が多数分布する。

弥生時代中期に成立する遺跡は、吉岡原・高田原においてはその存在は確認されているが、いずれも表採資料によるもので、現在までのところ該期の調査例がなく遺跡の性格等については不明な点が多い。

一方、各和原では金鉢原・山下遺跡などが、弥生時代中期に成立する。昭和56年に調査された金鉢原遺跡では、中期前葉に属する土器が出土しており、中期初頭の成立と考えられている。昭和58年に調査された山下遺跡からは、中期前葉（丸子式）あるいは中葉（嶺田式）の土器を伴う方形周溝墓群が発掘された。中遠地方に出現する最も初期段階の方形周溝墓群として注目されている。

沖積地に目を移すと、沖積地の自然堤防上に原川・領家・梅橋北遺跡等の中期成立遺跡がみられる。昭和57～61年に調査された原川遺跡では、弥生時代中期前葉（丸子式）の土器棺墓6基と該期の掘立柱建物跡8棟が発掘された。当地域における中期初頭段階での水稲耕作開始の指標の一つと考えられる。

次に土橋横穴群をめぐる歴史的環境として、市内の横穴を中心に後期古墳の分布を概観してみたい。掛川市域の後期古墳には、横穴と横穴式石室墳がある。

現在までに確認されている横穴式石室墳は、長福寺古墳群、海塚古墳群、小高古墳（独立丘陵上に単独で築かれる）、美人ヶ谷古墳群、石ヶ谷古墳群、天段古墳群、上山古墳群等がある。これらの横穴式石室墳から成る群集墳の造営時期は、遠江の他の群集墳同様6世紀後半～末葉に築造が開始され、7世紀後半頃まで続くと考えられる。

掛川市は、周辺の小笠郡同様横穴の密集地帯である。その数は、現在確認されているものだけでも300基程であるが、近年の開発ラッシュによる発掘調査が拍車をかけ、当然のことながら年々増加の傾向にある。

今回報告する土橋横穴群は、原野谷川流域に位置する。原野谷川上流域には、宮坂横穴群、古戦横穴群、楠ヶ谷横穴群が存在しており、垂木川中流域の飛鳥地区、逆川左岸の曾我地区と並ぶ横穴の密集地帯である。特に楠ヶ谷横穴群は、5支群から成ると考えられる大横穴群で、昭和63年の調査では1支谷の2/3程の範囲に38基が確認された。土取りによって破壊されたものを含めると1支谷だけでも50基を下らない横穴が存在していたと考えられ、顕著な群集性を示す横穴群であることが判明した。昭和53年に調査された宮坂横穴群は17基から成る横穴群で、この横穴群の北約0.9kmには横穴式石室墳の長福寺古墳群が存在する。いずれも造営時期は6世紀中～後半と考えられており、注目すべきは長福寺1号墳がやや先行するか、もしくは併行関係にあるということである。かつて、この点より看取される両者の関係について、石室墳から横穴への墓制の転換が想定された。

原野谷川をさらに下った岡津原台地の南端部に岡津横穴群A・B群があり、昭和41・42年の調査では、A群8基、B群16基から成る群構造が明らかになった。

垂木川中流域の飛鳥地区には扇原横穴群、岩谷横穴群等の密集度の高い大横穴群が分布し、家代地区には十五ヶ谷横穴群、別所横穴群、峯横穴群等の比較的規模の小さな横穴群が存在する。この別所

横穴群の北約0.6kmの丘陵上には天段古墳群が存在する。別所横穴群は昭和57年に横穴1基が調査され、天段古墳は昭和63年に2基の横穴式石室墳が調査された。造営時期にはややひろきがあるものの比較的近接した横穴群と横穴式石室墳は、先の長福寺古墳群と宮坂横穴群同様当該地域の墓制相違の要因を考へる上で注目すべき存在となった。

逆川の支流である倉真川中流域には、三十八坪横穴群A群、西谷田横穴群、梅ヶ谷横穴群が存在する。三十八坪横穴群A群は、昭和62年に調査が行われ4基の横穴が確認された。4基は、いずれもドーム形で、分布からみると現在のところ市内域のドーム形横穴の北限とされている。

倉真川と逆川の合流域には、環頭大刀・変形神獸鏡・馬具・鉄製品をはじめとする豊富な副葬品を有し、単独の立地を特徴とする宇洞ヶ谷横穴、山麓山横穴が存在する。特に宇洞ヶ谷横穴は規模・内容ともに前方後円墳の被葬者と比べ何ら遜色がないことから、和田岡古墳群に直接連なる当地方の首長墓ではないかと推測されている。

逆川左岸の小笠山北麓から市街地南西部の曽我地区には本村横穴群A・B群、丈山横穴群、大谷代横穴群、新田・南坪横穴群等が密集する顕著な分布様態を示す地域といえる。本村横穴群A・B群は、昭和41年に調査が行われ、A群8基、B群7基の横穴群で構成されていた。同一丘陵上には時期的に横穴に先行する木棺直葬墳が分布しており、同族内での墓制変換を表すものと考えられている。大谷代横穴群は4群150基以上から成る大横穴群で、昭和56年に静岡県内横穴群分布調査の一環として、詳細分布とA群9基（内略測7基）、B群1基が調査された。長さ4m程の長大な狭道を有すものや造り付けの石棺有すもの等形態的にバラエティーをもつ横穴群である。新田・南坪横穴群は、昭和62年に調査が行われ、新田4基、南坪19基が確認された。その内南坪横穴群の10号墓は、形態的にも他と異なるものであるが、火葬骨を納めた壘形土器が出土しており、8世紀前半の所産とされ墓制転換の一端を明示するものと言えよう。

〔参考文献〕

- (1) 平野吾郎 他 『遠江の横穴群』本文編 静岡県教育委員会 1983
- (2) 向坂鋼二 他 『掛川市宇洞ヶ谷横穴群発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1970
- (3) 平野和男 他 『掛川市岡津横穴群 (A) 発掘調査概報』 静岡県教育委員会 1966
- (4) 平野和男 他 『掛川市岡津横穴群 (B) 発掘調査概報』 静岡県教育委員会 1967
- (5) 向坂鋼二 他 『掛川市本村横穴群・本村古墳 (1号・2号) 発掘調査概報』 静岡県教育委員会 1966
- (6) 吉岡伸夫 『第5章 古墳時代』『掛川市遺跡分布調査報告1』 掛川市教育委員会 1984
- (7) 平野吾郎 『原野谷川流域の古墳群』『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版会 1980
- (8) 松本一男 他 『三十八坪横穴群A群』 掛川市教育委員会 1988
- (9) 前田庄一 『天段古墳・東沢遺跡』 掛川市教育委員会 1989
- (10) 平野吾郎・鈴木基之 『原川遺跡1』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988
- (11) 松本一男・前田庄一 他 『山下遺跡』 掛川市教育委員会・袋井市教育委員会 1984
- (12) 岩井克允 『金跡遺跡』 掛川市教育委員会 1982
- (13) 松本一男 他 『梅橋北遺跡』 掛川市教育委員会 1985
- (14) 平野吾郎・佐藤正知 他 『梅橋北遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988



第3図 土橋横穴群遺構全体図

II 土橋横穴群の調査

今回の調査では、横穴8基、土壇1基、道状遺構1基、溝状遺構1基を検出した。横穴は、天井部が陥没しているものが多く、遺構としての遺存状態は、決して良いものではなかった。しかし、この天井陥没による横穴の埋没は、副製品類の盗掘・攪乱という被害を防ぐ結果となり、総体に遺物の遺存状況は良好であった。

出土遺物は、すべて横穴出土の副葬品で、須恵器・土師器・鉄製品・装身具等がある。

以下、今回の調査におけるこれらの成果を遺構、遺物の順に項目に分けて説明していく。

1. 遺 構

1) 横 穴

第1号横穴 (第4・5図)

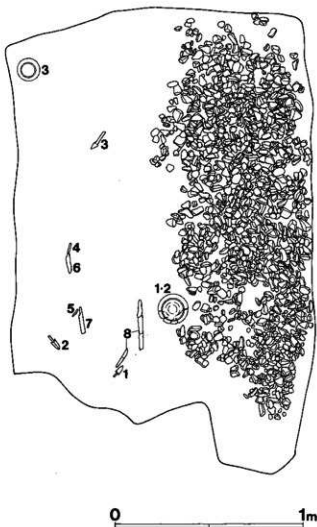
第1号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、本横穴群の中では、ほぼ中央、レベルからみても最上位の標高52mに占地する。

完全に埋没していたもので、その堆積は現況斜面から確認面まで2~3mを測った。本横穴群の中でも最も埋没状況の著しいもので、天井部はおろか玄室前端部以上を流失していることから、崩落規模の大きさが窺われる。

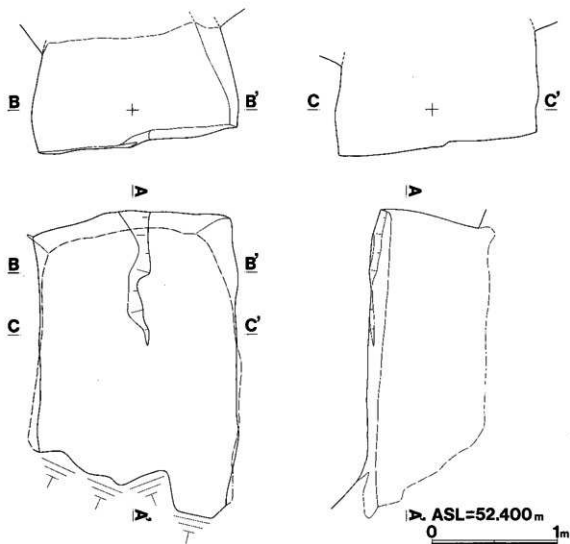
主軸方位は、N-27°-Wを測る。奥壁から玄室の遺存最前端部まで幅はほぼ同じで、玄室についてみればほぼ長方形であることから、全体形は妻入り形態を呈すものと考えられる。

玄室前端部以上を流失しているため、羨導部、閉塞については不明である。

玄室は、平面長方形を呈し、遺存長で2.47m、幅は奥壁際にて1.58m、遺存最前端部でもほぼ同値の1.55mを測る。玄室中央部から右壁部にかけて、棺座部分に敷設されたと思われる礫床が確認された。礫床の範囲は、玄室前端部では一部流失している可能性もあるが、遺存長で2.17m、最大幅0.87mを測る。礫は径2~5cmを割り、総体的に小形であるが、二重に敷設されている部分も



第4図 第1号横穴遺物出土状況実測図



第5図 第1号横穴実測図

ある。

床面は、奥壁際を最高位として開口部へ向かって緩やかに傾斜している。玄室中央部の奥壁際から1.1mの部分には7cm程の段差があるが、開口部にいきしだい明瞭なものではなく右壁際から左壁際への傾斜にかわる。この段差は、礫床範囲とほぼ一致することから棺座を形成するかのように見えるが、これは床面が粘板層と砂岩層から成る斜めの互層部分に形成されたことに起因している。軟質の砂岩層を除去し、硬質な粘板層を床面としているためである。

奥壁は、天井部同様上部が崩落しており床面から80cm程が遺存する。奥壁はその立ち上がりからアーチ形を呈すものと考えられる。

内部の各壁は、上部は完全に崩落しており、遺存した部分も地山(砂岩層)の性質上、剥離がほぼ全体に認められるが、一部で幅8~10cm程の弧状の整形痕がかすかに確認できる。

出土遺物は、玄室中央部床面直上において、須惠器環が蓋(1)と身(2)がセットで出土した。奥壁と左側壁とのコーナーにおいて、床面より20cm程浮いた状態で須惠器短頸壺(3)が出土した。

鉄製品は、玄室中央から左側壁にかけて、鎌(1・2)、刀子(3~6)、鹿角装刀子(7・8)が散在的に検出された。

第3号横穴（第6～8回）

第3号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、標高48mを測る。東隣に位置する第4号横穴とは、形態、規模が異なるもののレベル、主軸がほぼ同じであること、墓前城の形態が類似している点からこの2基から成る単位群が想定できる。

ほぼ埋没していたが、剥落した天井と横穴の埋没土の間には20cm程の隙間があり、そこを3号横穴とした。全長が長い幅の狭い墓前城を別横穴と誤認し2号横穴と命名したが、その後同横穴であることが判明、そのため2号横穴は欠番となってしまった。

墓前城から狭道にかけての左側壁と、奥壁から左側壁のコーナーの2カ所に攪乱跡が確認されたが、遺物の出土状況より盗掘による攪乱は受けていないと考えられる。左側壁コーナー部の攪乱跡は地山をトンネル状に掘り抜いた横穴（以下、トンネル）が約6m離れた5号横穴にまで達しており、その規模は、本横穴側の入り口はやや広いものの平均では幅40cm、高さ50cmを測るもので、子供でも屈まなければ通ることができないほど狭いものである。5号横穴の閉塞施設がほぼ完存していることから本横穴側から掘削されたことは明白である。トンネルの規模は人が通ることのできる必要最小限のスペースであるが、掘削土の搬出という労力を考えたとき、このトンネル掘削時の玄室内状況は天井崩壊等による本格的な土砂流入前であったと考えられる。5号横穴同様盗掘による攪乱が考え難いことから何の目的で掘られたのか大きな疑問が残る。ちなみにこのトンネルの掘削の時期を考えるうえで看取すべきものとして、玄室の玄門付近より11世紀に比定できる灰軸陶器碗の出土があげられる。人骨はおろか火化跡等の何らかの再利用の目的を確認させるに十分な痕跡はなかったが、本横穴の再利用の目的は人間の埋葬が積極的な一考であろう。いずれにしてもここで注目すべきことは、この灰軸陶器碗の出土状態が横穴に副葬された土器群とはレベル差にして2cm程であることから横穴再利用の際には副葬品のいくつかは目にしていただと考えられるが、それら副葬品類は何ら攪乱されていないことである。墓前城から狭道にかけての攪乱は、墓前城のある西斜面より掘削されている。掘削面とほぼ同じレベルで流入土上層より17世紀頃の所産と考えられる内耳鍋と焼土塊が出土していることから掘削もこの時期と考えられる。

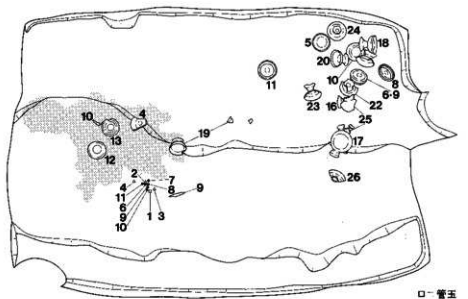
主軸方位は、N-35°-Wを測る。玄室の平面形は、両袖を有する妻入り形態であるが、狭道は玄室中央よりやや右にずれて設けられており、規模も小さい。

閉塞施設は、上部の一部を攪乱により欠損しているが、遺存状況は比較的良好で床面より60cm程の高さで、玄門より1.4m程の範囲にて確認された。基本的には狭道幅に合わせるように床面より長径40cm程の根石を充填し隙間に10～20cm程の河原石を詰め、さらにその上に根石と同じ大きさの石を積み重ねている。根石と床面との間には5cm程の砂質粘土層が確認されている。

狭道は、両脇床面より60cm程の部分に雑状のテラスが設けられており、全長1m、最大幅0.48mを測る。床面では玄門から10cm程の部分と、羨門部に高さ10cm程の段差がある。

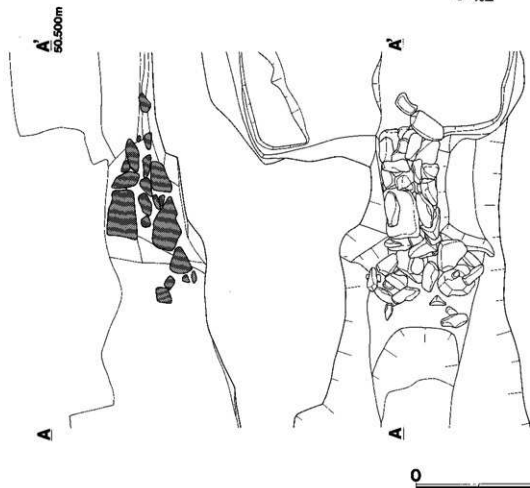
玄室は、全長3.48m、最大幅2.28mを測り、平面形は長方形を呈す。奥壁より約2m、幅1.4m程の範囲で礎床が確認されたが、散在的に密に敷設されてはいない。礎の径は3cm程で総体に小型である。

床面は、奥壁際を最高位として玄門に向かって緩やかに傾斜している。左側壁際から右側壁に向かって3段にわたって段差が認められ、左から5cmと7cmを測るが、厳密には平坦な段傾斜でなくそれぞれの段は右側壁から左側壁に向かって傾斜している。これは床面が、地山の粘板層と砂岩層から成る互層部分に形成されたことに起因している。粘板層は硬質であるが、砂岩層はもろく掘削が容易であるため床面掘削時には砂岩層が除去され、粘板層を床面としている。少なくとも本横穴計画当初より、棺台を意識して造作したものではないようである。両側壁際には排水溝が確認され、幅7cm、深さ6

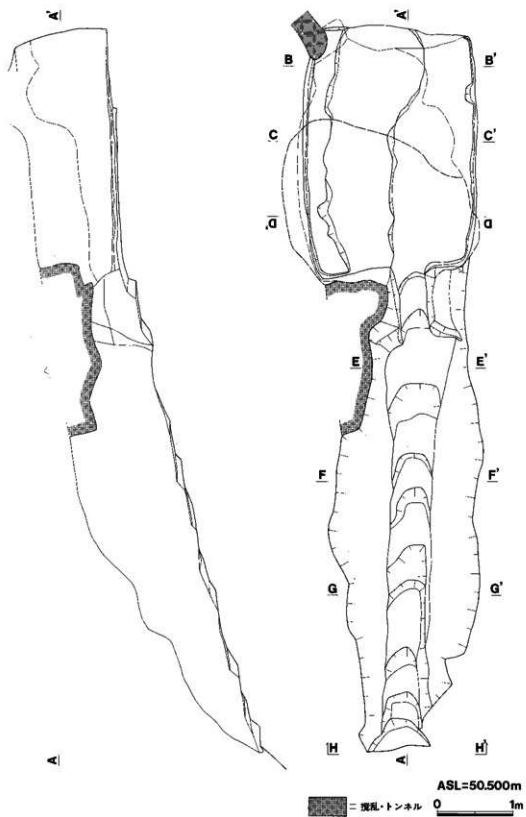


■ = 磨床範圍

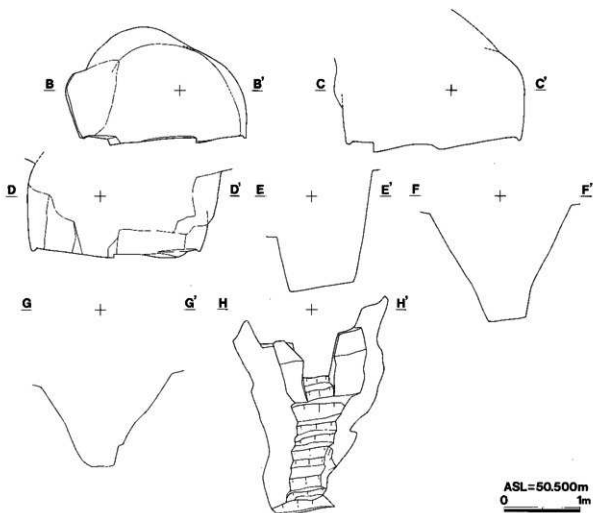
- = 管玉
- △ = 切子玉
- = 丸玉



第6圖 第3号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図



第7図 第3号横穴実測図(1)



第8図 第3号横穴実測図(2)

cmを測る。

奥壁は、アーチ形を呈し、床面よりやや内湾気味に天井に至るもので、高さ1.23mを測る。天井は、奥壁から玄門にかけては完全に崩落している。側壁も天井同様上部は崩落しており、床面より0.3~1m程が遺存する。遺存した部分でも壁面の状態は悪く、整形痕は確認できなかった。

墓前域は、全長5.44m、上部最大幅1.98m、床面最大幅(羨門)0.9m、平均では0.5mを測る。側壁は最も高い部分で床面より1.37mを測る。平面形は縦長の方形で、断面形は縦長の逆台形を呈す。全長が長く幅が狭小なこの形態は、墓前域と言うよりはむしろ墓道と言う表現のほうが適切かもしれない。床面は、最前端に向かって8段程の段差をもって傾斜しており、その比高差は1.46mを測る。この段差も玄室内の床面同様、地山の粘板層と砂岩層から成る互層部分にあたるため、床面掘削時には砂岩層を除去し、粘板層を平坦として階段状に仕上げている。掘削当初より計画されたものか否かは不明であるが、いずれにせよ互層をうまく利用した結果によるものである。

出土遺物は、前記のように遺構に攪乱跡は認められたものの、盗掘及び攪乱による影響を受けておらず遺存状況は良好であった。土器は、その多くが玄室右袖部よりまとまって検出された。いずれも床面よりやや浮いた状態で出土している。土師器高坏(22・24)、須惠器坏身(10)は転倒、それ以外

の土師器高坏（18・20・21・23）も横転していた。天井崩落土の遺物への影響は十分考慮しなければならないが、ほぼ原位置を保っていると考えられ、追葬時に一括して整理された結果によるものである。なお、須恵器坏蓋（6）と坏身（9）はセットで出土している。須恵器冠（16）は口縁部を人為的に敲打されている。

墓前城からは須恵器坏蓋（7）と坏身（14）が、床面より2～3cm程浮いた状態で出土している。玄室内出土土器を追葬時の一括整理によるものと想定すると、墓前城出土の土器は墓前祭祀にかかわるものであろうか。

鉄製品は、礎床上とその周辺より刀子（9・10）が出土している。

装身具は、礎床路からまとまって出土しており、その出土状況よりはほぼ原位置を保っているものと考えられる。最終追葬時に棺内に副葬されたものであろう。

第4号横穴（第9～10図）

第4号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、標高48mを測る。西隣に位置する第3号横穴とて単位群を構成するものと考えられる。第3号横穴同様、完全に埋没しておりその崩落土の厚さは3mにも達するものであった。

主軸方位は、N-40°-Wを測る。玄室の平面形はややびつな楕円形を呈し、短い羨道から墓道と呼ぶべき3mにも及ぶ墓前城へとつながる。断面形はドーム形を呈す。

閉塞施設は、上部がやや乱れていたもののほぼ完存していた。床面より62cmの高さで、羨道から墓前城にかけての1.38mの範囲で確認された。長径で20cm前後の河原石を裾が広がるように積んでおり、基本的には小口積みで隙間にやや小さめの河原石を詰めている。羨道の河原石は、ほぼ床直であったが、羨道から墓前城にかけての部分では河原石と床面との間には3cm程の砂質粘土が確認された。

羨道は、非常に短く全長で43cm、幅は玄門で60cm、開口部では28cmを測る。墓前城との境では6cmの段差を有す。

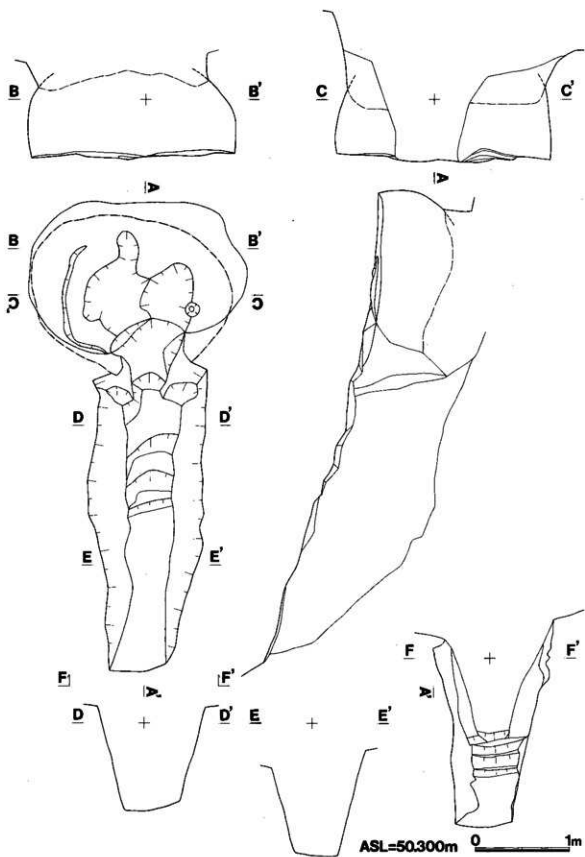
玄室は、全長1.24m、最大幅1.75mを測り、平面形は楕円形を呈す。

床面には、奥壁より1.2m、幅2.1mの範囲で礎床が確認された。礎は二重ないし三重に敷設されており、上部には6、7cm大の礎、中層から下層にかけては2、3cm大の礎を多量に用いている。下層では、礎と共に粘性の強い灰褐色粘土が3～6cm程の厚さで確認された。礎と粘土でかなり入念に貼床を作っている。

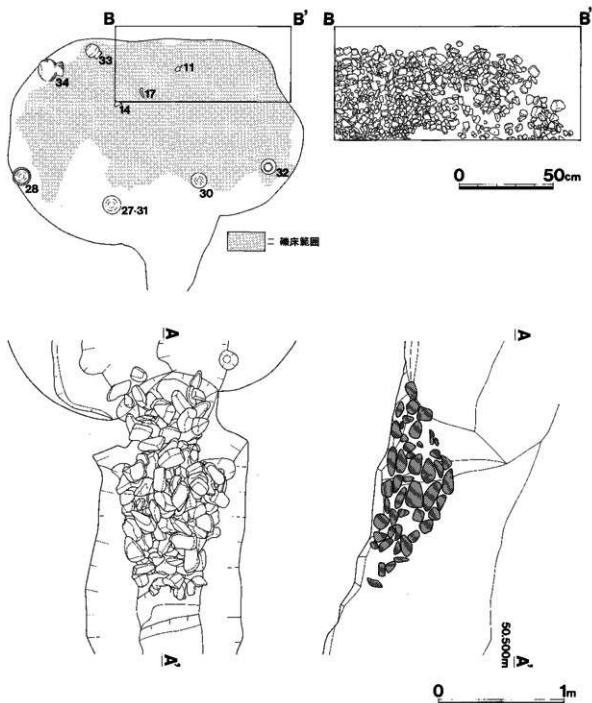
床面は、奥壁際を最高位として玄門に向かって緩やかに傾斜している。玄室中央から羨道にかけて深さ4cm程の不定形な掘り込みが確認された。これは横穴掘削時の掘り方で、この掘り方部分にさきの小型礎と灰褐色粘土が著しく確認された。

奥壁は、玄室平面形が楕円形を呈すことから側壁との境がなく、断面形はドーム形を呈す。床面より内湾気味に天井に至るもので、現存高54cmを測る。側壁も奥壁同様内湾して天井に至るものであるが、天井は完全に崩落しており、50～60cm程が遺存するだけである。遺存した部分でも壁面の状態は悪く、整形痕は確認できなかった。

墓前城は、全長3.22m、上部最大幅1.25m、床面最大幅63cm、平均では50cmを測る。側壁は、最も高い部分では床面より1.10mを測る。平面形は縦長の長方形を呈し、断面形は縦長の逆台形を呈す。規模は3号横穴に比べやや劣るものの形態的には類似するもので、3号横穴同様、墓道という表現のほうが悪切かもしれない。床面は、最前端に向かって3段の段をもって傾斜しており、その比高差は92cmを測る。3号横穴同様、粘板層と砂岩層との互層部分を利用し、階段状に掘削している。本横穴の場合互層が墓前城中位にあるため段差もそこだけに造られている。



第9图 第4号横穴突洞图



第10図 第4号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図

出土遺物は、完存する閉塞施設の状況からも盗掘等による攪乱は受けていない。土器は、礫床部分の開口部寄りと奥壁際から検出された。須恵器短頸壺 (33)、土師器短頸壺 (34) は横転、須恵器坏蓋 (30) は転倒、須恵器坏蓋 (27) と坏身 (31) はセットで出土した。須恵器短頸壺 (32) は口縁部を人為的に敲打されている。須恵器短頸壺 (33) は礫床面よりやや浮いて出土しているが、その他のものは礫床面のほぼ直上からの出土である。横転して出土した土器については、天井崩落土の影響も考慮しなければならないが、いずれも原位置を保っていると考えられる。

鉄製品は、鎌 (11)、刀子 (14・17) が玄室床中央部から奥壁際にかけて出土している。

装身具は、須恵器短頸壺 (32) の胎より土玉 (82~86) 10個程がまとまって出土している。

第5号横穴（第11・12図）

第5号横穴は、本横穴群の西斜面に位置し、標高48mを測る。他の横穴がすべて南斜面に占地するのに対し、本横穴は単位群を構成することなく単独で西斜面に占地する。丘陵の南斜面崩落時に墓前域の一部も崩壊しており、埋没していたが、閉塞施設をはじめ本横穴群では唯一天井部の崩落を免れた横穴で遺構の遺存状態は良好であった。本横穴の調査開始当初は、閉塞施設の遺存状況が比較的良好であったため、未開口横穴と考えられていたが、奥壁右コーナーには3号横穴から掘られたトンネル状の横穴（以下、トンネル）が達していた。盗掘の可能性は全くないとは言いつても、その出土状況から盗掘による著しい攪乱は考え難い。しかし、遺存していた遺物のいくつかは少なからず侵入時の影響（原位置を移動）を考慮すべきであろう。

主軸方位は、N-55°-Wを測る。玄室の平面形はややいびつな方形で、羨道は玄室左側壁に寄っているため平面的には右袖のみの片袖妻入り形態を呈す。

閉塞施設は、上部の一部が墓前域に流出しているが、遺存状況は比較的良好で床面より高さ0.58m、玄門から墓前域にかけての1.6m程の範囲にて確認された。長径25cm程の河原石を裾が広がるように積んでいる。羨道では特に小口状にまかれた様子が確認できる。羨道に積まれた河原石はほぼ床直上であったが、羨門と墓前域との段差部分では河原石と床面の間に12cm程の砂質粘土が確認された。

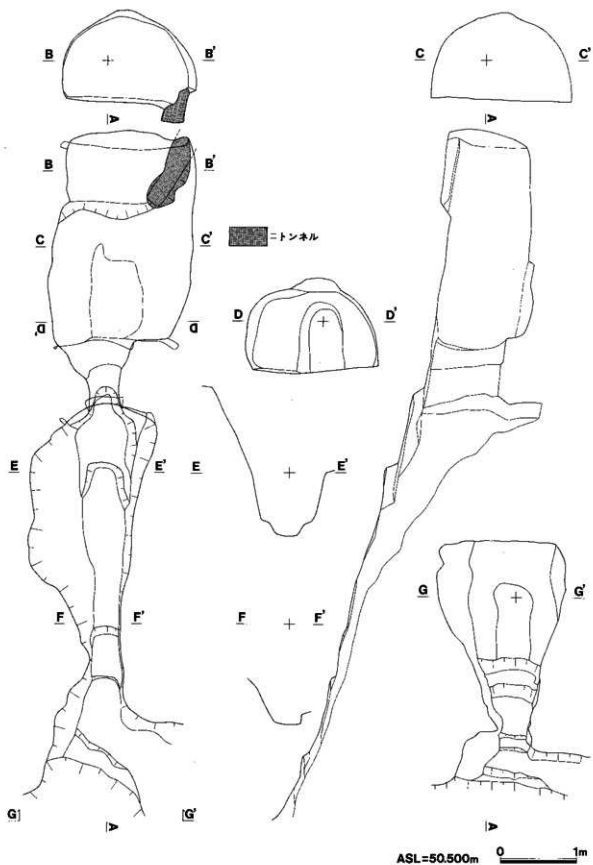
羨道は、玄室左側壁寄りに設けられており、全長0.98m、玄門幅1.03m、羨門幅0.44mを測る。天井はアーチ形で床面からの高さは0.98mを測り、玄室の天井とは14cm程の段差によって明瞭に区画している。羨道の中程から玄門にかけてはラッパ状に広がっており、その境には明瞭な稜線をもつ。

玄室は、全長2.81m、最大幅1.87mを測り、平面形はいびつな長方形を呈す。玄室奥壁際には、全長1.61m、最大幅1.25m、深さ0.15cmを測る方形の掘り込みが設けられている。棺座に相当するものと考えられる。その形状にはかなり不自然さがあるが、侵入時の攪乱によるものと考えられる。そこで攪乱される前の棺座の形状と規模を復元してみよう。棺座の奥壁際と左側壁際は、玄室の下場と一致しているが、棺座の右側壁際はトンネルによって攪乱されているものの、そのトンネルも横穴の壁際にまでは達していないことから、本来、この棺座は玄室の右側壁際からは離れて構築されていたことがわかる。奥壁際のトンネルの位置より30cm程離れていたと考えられる。棺座の開口部側の立ち上がり（上場）も侵入時に不定形に攪乱されたもので、本来は下場と平行に走る直線が想定できる。以上の検証より全長約1.4m、幅約1m、深さ0.15m（床面は攪乱されていない）を測る奥壁と左側壁に付いた長方形の棺座であったと推定される。

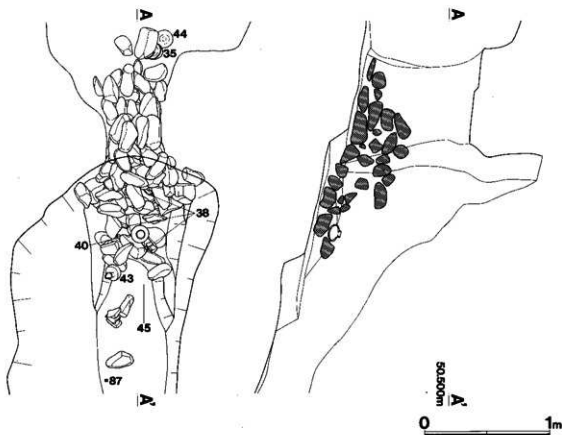
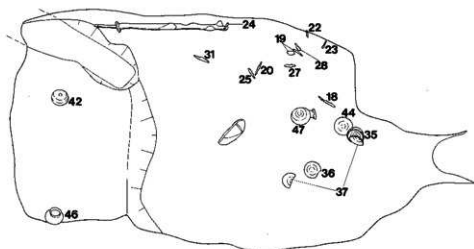
床面は、棺座の開口部側の立ち上がりを最高位として開口部に向かって緩やかに傾斜している。棺座の床面も玄室と平行する傾斜がみられる。玄門付近では、さらに側壁際から羨道に向かう傾斜も認められる。

奥壁は、アーチ形を呈し、棺座床面よりやや内湾気味に天井に至るもので、高さ1.16mを測る。天井は、玄室中央に最高位があるが、床面とほぼ平行して玄門に至る。右袖の前壁は床面幅で50cmを測り、玄室側に内湾して天井に至る。

内部各壁の工具痕は、未開口であったため非常に良好な状態で旧状を留めていた。玄室両側壁の奥半部では、左上から右下にかけて（開口部から奥へ向かって下がる）幅8～12cm程の整形痕が遺存する。その痕跡よりすれば、先端が弧状を呈した鍬先状工具を使って仕上げが施されたと考えられる。一部には、整形前の粗掘り段階の幅4.5cmを測る手斧状工具の痕跡が確認できる。玄室両側壁の中央から玄門部にかけては、上から下にかけて幅8～12cm程の整形痕が溝状に遺存するが、一部では更にその稜を消すように幅2cm程の整形を加え平滑に整えている。右側壁の床面より40cm程の部分では、玄門か



第11図 第5号横穴実測図



第12図 第5号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図

ら奥壁へ横方向の鍬先状工具の打ち込み痕が確認できる。奥壁では、ほぼその中央を境にアーチ形の稜線に沿って幅4.5cmの手斧状工具の痕跡が確認できる。天井部では、玄門付近を除いて奥壁に向かう斜方向の幅12cmの鍬先状工具痕が確認できる。

墓前城は、全長4.67m、上部最大幅1.55m、床面最大幅0.64mを測る。側壁は、最も高い部分で床面より1.98mを測る。左側壁の遺存状態は良好であるが、右側壁は丘陵南斜面崩落の際に流失している。平面形は斜面を掘り込んでいるためややいびつであるが、縦長の方形を呈しており斜面幅（玄門より3.5m付近）はハの字状に広がる。断面形はV字に近い逆台形を呈す。平面・断面形より3・4号

横穴同様、墓道という表現の方が適切かもしれない。羨門より3.5m付近のハの字状に広がった部分こそが墓前域としての機能を果たした空間とも考えられる。床面は、最前端に向かって5段の段をもって傾斜しており、その比高差は1.71mを測る。3・4号横穴同様、粘板層と砂岩層との互層部分を利用して階段状に掘削している。

玄室内の出土遺物は、その出土位置より大きく3群に分けられる。まず1群は玄門付近より出土している須恵器群で、坏蓋(36)、短頸壺(44)、捉瓶(47)は転倒・横転している。坏蓋(37)は閉塞石の転落の際に破砕したものである。2群は右袖部から側壁にかけて出土している鉄製品で、いずれも鐵(18~31)の完形品もしくはその破片である。大刀(55)は右側壁際より床面直上で出土している。3群は棺座内より出土している土器で、土師器壺(46)は左側壁際より出土、須恵器短頸壺蓋(42)は転倒している。大刀を除いてはすべて床面より2~3cm程浮いた状態で出土している。

墓前域の閉塞施設からは、須恵器坏身(38)、須恵器坏蓋(39~41)、須恵器長頸壺(43)、須恵器短頸壺(45)が出土している。短頸壺(45)は、閉塞石の間に置かれた状態で出土しているが、須恵器坏はいずれも破片で閉塞石の隙間より出土している。長頸壺(43)は床面より60cm程浮いた状態で出土しているが、本来短頸壺(45)同様、閉塞石の上に置かれていたのかもしれない。砥石(87)は床面直上の出土である。

第6号横穴(第13・14図)

第6号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、標高46mを測る。東隣には7・9号横穴が存在し、本横穴を含めたこの3基はほぼ等間隔で並列して配置されている。しかし開口部のレベルでは7・9号横穴の2基がほぼ一致しているのに対し、本横穴はこの2基より1m下位に開口する。また横穴の内部構造において、7・9号横穴は玄室に形状・規模ともに類似する棺台を設けているのに対し、本横穴の棺台は7・9号横穴のものとは異なる。これらの点を勘案すれば本横穴は、7・9号横穴とは区別することも可能であろうが、本横穴を含めたこの3基を平面的に観れば、同じ単位群として扱えることが妥当だと思う。

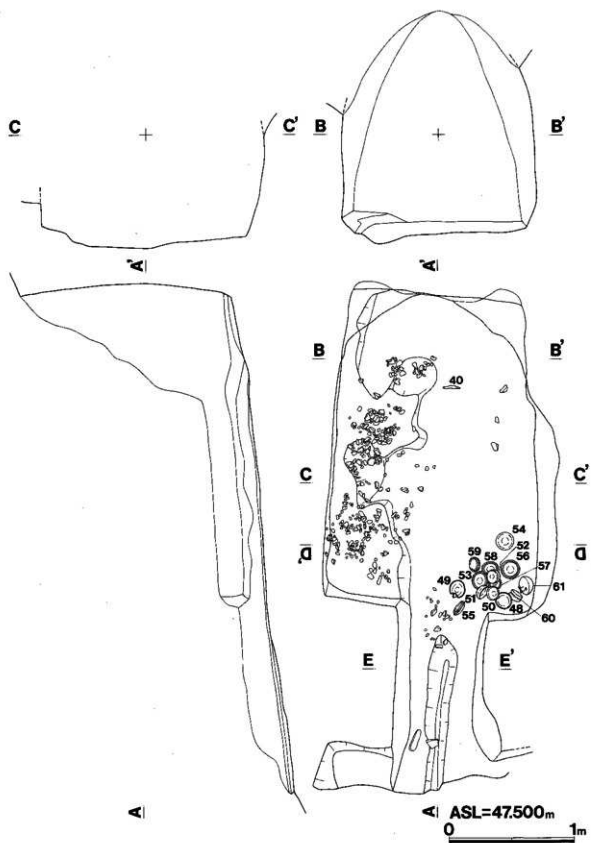
完全埋没の横穴で崩落土の堆積も非常に厚く、遺構としての遺存状況は悪い。玄室の天井は完全に崩落、奥壁を除いて側壁もほとんど崩落していた。調査開始当初、閉塞施設が検出されなかったため盗掘による攪乱は必至と考えられていた。ところが、玄室左袖部より須恵器がまとめて出土しており、遺構とは逆に遺物の遺存状況は良好であった。

主軸方位は、N-15°-Wを測る。玄室の平面形は、方形で両袖を有する妻入り形態である。

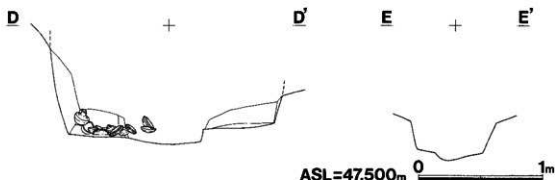
閉塞施設は、それに関連するものとして羨道部にて河原石が2つ検出されたのみで、その旧状は窺い得なかった。盗掘時に撤去された可能性もあるが、遺物の遺存状況から判断すれば盗掘をうけることなく崩落時に横穴前端部とともに流出したのと考えられる。

羨道は、玄室のやや右側壁寄りに設けられており、全長1.15m、玄門幅0.65m、羨門幅0.73mを測る。羨道の床面ほぼ中央には、平均幅15cm、深さ5cm程の排水溝が確認された。

玄室は、全長2.51m、最大幅1.63mを測り、平面形は長方形を呈す。奥壁幅に比べ玄門部の両袖幅の方が20cm程広がっている。左側壁際、幅約0.6m、長さ約1.8mの範囲で礫が確認された。礫の径は2~3cm程で総体に小型で、その出土状況は散在的で床面より2cm程浮いた状態で出土している。この礫の確認された範囲の床面は、不定形ではあるが10cm程の段差を有す高壇が設けられている。その規模は最大長2.43m、最大幅0.78mを測り、その数値からみれば玄室左袖部とほぼ一致する。礫床の存在も含めて棺台に相当する部分と考えられるが、3・7号横穴の床面にみられる段差同様、粘板層と砂岩層の互層部分に造られたことに起因するものであろう。また、礫床が床面より浮いた状態で



第13图 第6号横穴墓测图(1)



第14図 第6号横穴実測図(2)

検出されたことについては、閉塞施設が確認されなかったため盗掘等の侵入による擾乱の可能性は全くないとは断言できないが、出土土器より少なくとも1回の追葬が行われたことが確認されており、さらに下記に示すこれらの土器の出土状況を勘案すれば、盗掘はなかったと解釈する方が妥当であろう。盗掘による擾乱がなかったとすると、追葬の際に土を混ぜて礫床が敷設されたとも考えられる。

奥壁は、尖頭形を呈し、床面より内湾気味に天井に至るもので、高さ1.71mを測る。天井は、完全に崩落していた。側壁も天井同様上部は崩落しており、床面から平均30cm程が遺存するのみであった。遺存した部分でも壁面の風化が著しく、整形痕は確認できなかった。

墓前域は、羨門より袖状に張り出すものであるが、その前端及び右袖部は流出している。遺存長0.34m、遺存幅1.68mを測る。遺存していた右袖部は羨道の床面より5cm程高くなっている。

出土遺物は、玄室右袖部より須恵器がまとめて検出された。その多くは重ねられており、横転、転倒が確認された。いずれも床面よりやや浮いた状態で出土しているが、ほぼ原位置を保っているものと考えられ、追葬時の一括整理によるものと想定される。

第7号横穴(第15~17図)

第7号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、標高47mを測る。並列する6・9号横穴とは、開口部のレベル、主軸が近似値を示すことからこの3基から成る単位群が想定できる。

並列する6・9号横穴同様、完全埋没の横穴で崩落土の堆積は非常に厚く、遺構の遺存状態は悪い。天井は完全に陥没、奥壁、側壁も上半部は崩落もしくは剥落していた。閉塞施設の一部は遺存したものの遺物の遺存状態より後世に擾乱をうけていることは明白で、奥壁にはその際に構築されたと考えられる小規模な横穴が存在する。

主軸方位は、N-12°-Wを測る。玄室の平面形は、方形で両袖を有す妻入り形態である。

閉塞施設は、基底部の一段が遺存したのみで、上部は侵入時に撤去されている。遺存したのは玄門部の長さ1m、幅0.8mの範囲で、長径25cm程の河原石が使用されている。

羨道は、玄室のほぼ中央に設けられているが、右袖部は明瞭な前壁によって羨道と玄室の区別が明確であるのに対し、左袖部は明瞭な前壁を造り出さずに羨道の左側壁に続いている。規模はその前端部は流失しているが、遺存長1.18m、玄門幅1.17m、前端幅0.7mを測る。開口部に向かって幅がやや狭小する。

玄室は、全長4.03m、最大幅2.46mを測り、平面形は長方形を呈す。玄室奥には奥壁に接して造り付けの石棺が設けられている。

石棺の規模は、外法で全長2.26m、最大幅0.98m、内法で2.23m、最大幅0.78mを測り、上縁からの深さは0.14mを測る。石棺の床面と玄室の床面とは30cm程高低差を有す。石棺の平面形は長方形を

呈し、玄門側には柵状の堤が設けられているが、右側壁には接しておらず7cm程の隙間が設けられている。棺内の床面が開口部側に傾斜していることから排水を考慮したものと考えられる。石棺左側壁周辺には長径2～10cm程の礫が散在的に検出された。攪乱によることは明白で、元々は石棺床面に敷設されていたものである。礫に混じって人骨片も出土している。

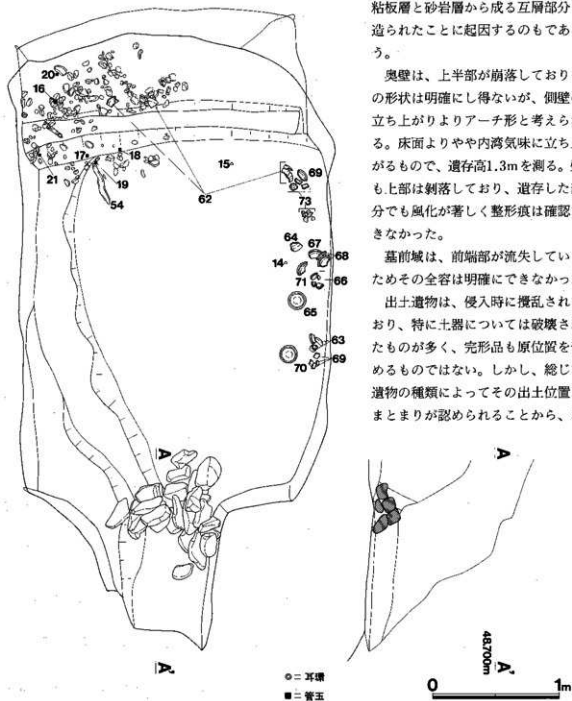
床面は、石棺際から開口部に向かって緩やかに傾斜している。左側壁には不定形な2段の段差が認められ、左から4cm、10cmを測るが、それぞれの段は平坦ではなく左側壁際から玄室の中央に向かって傾斜している。また右側壁際からもこの段差裾に向う傾斜が認められる。この段差は3・6号横穴

の床面にみられるもの同様、床面が粘板層と砂岩層から成る互層部分に造られたことに起因するものであろう。

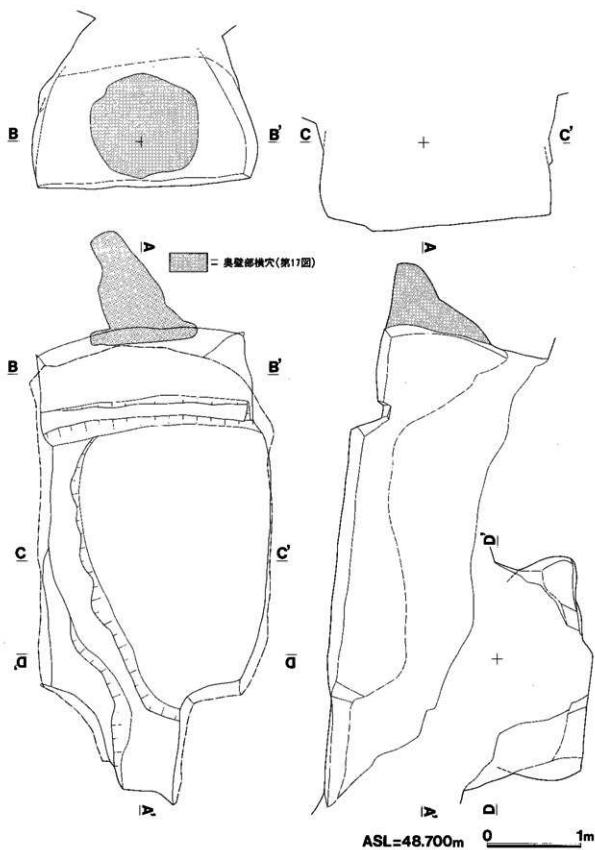
奥壁は、上半部が崩落しておりその形状は明確にし得ないが、側壁の立ち上がりよりアーチ形と考えられる。床面よりやや内湾気味に立ち上がるもので、遺存高1.3mを測る。壁も上部は剝落しており、遺存した部分でも風化が著しく整形痕は確認できなかった。

墓前域は、前端部が流失しているためその全容は明確にできなかった。

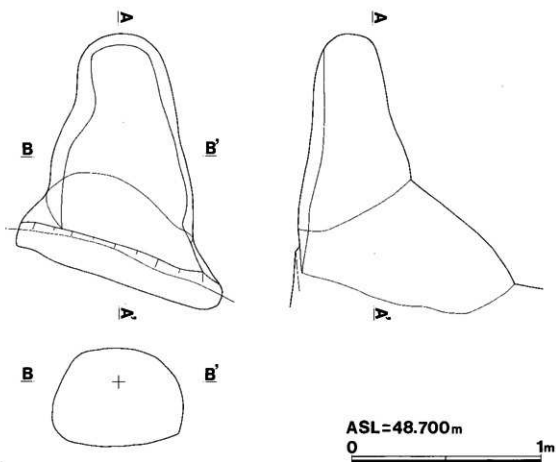
出土遺物は、侵入時に攪乱されており、特に土器については破壊されたものが多く、完形品も原位置を留めるものではない。しかし、総じて遺物の種類によってその出土位置にまとまりが認められることから、お



第15図 第7号横穴遺物出土状況実測図・閉塞状況実測図



第16图 第7号横穴实测图



第17図 第7号横穴奥壁部横穴実測図

およその原位置は推定できる。須恵器環 (62~72)、須恵器鉢 (73)、土師器環 (74) はいずれも床面より10~20cm程浮いた状態で出土しており、右側壁寄りにそのままとまりがみられる。

装身具は、管玉 (17~21)、ガラス小玉 (14・15) が石棺内及びその周辺から出土している。耳環 (14・15) は、玄室中央やや右側壁寄りから出土している。

鉄製品は、小刀 (54) が装身具同様石棺周辺より出土している。さて、遺物の原位置の推定であるが、土器類は右袖部から右側壁脇に一括して置かれていたものであろう。装身具、鉄製品は最終追葬時に石棺内に副葬されていたと考えられる。

前記のように奥壁には、後世に造られた横穴が1基検出されている。横穴の平面形は、いびつな台形を呈し、その規模は全長1.19m、最大幅 (開口部) 0.77mを測る。開口部は、7号横穴の奥壁を長さ1.15mを測る円形状に掘削しているが、開口部から奥へ0.5m程の部分までは、高さ、幅ともに狭小する。特に高さは0.63mと急激に低くなる。正面からは、ラップ状に開口して見える。その狭小する部分には稜が認められ、開口部と横穴の本体部とを区別するものと考えられる。横穴本体部は、さらに高さ、幅を徐々に狭め内湾しながら床面にいたる。断面形は、ドーム形を呈しているが、床面はやや内湾しているため楕円形に近い。床面は最奥部から開口部に向かって緩やかに傾斜している。

検出時には多量の土が充満しており、開口部には長さ20cm程の河原石が数個検出された。この河原石は7号横穴の閉塞石を用いていると考えられ、その内のいくつかは浮いた状態で出土している。当初より無造作に投げ入れられたものか、閉塞石として積まれていたものが後に攪乱されたものかは明

確にできなかった。

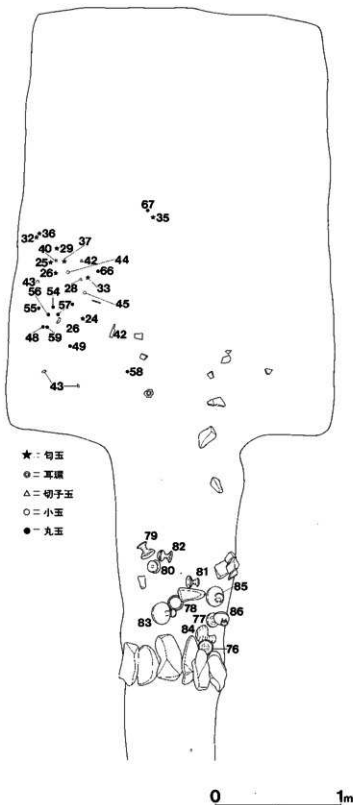
出土遺物は、開口部の河原石に混じって山茶碗小皿(75)が1点検出された。

この横穴の性格は、横穴再利用による所産であるが、開口部の河原石の出土状態に疑問は残るものの、横穴という形態を勘案すれば、人間の埋葬を目的としたものであると考えられる。出土した山茶碗小皿が13世紀に比定できるものであることから再利用の時期もこのころと考えられる。

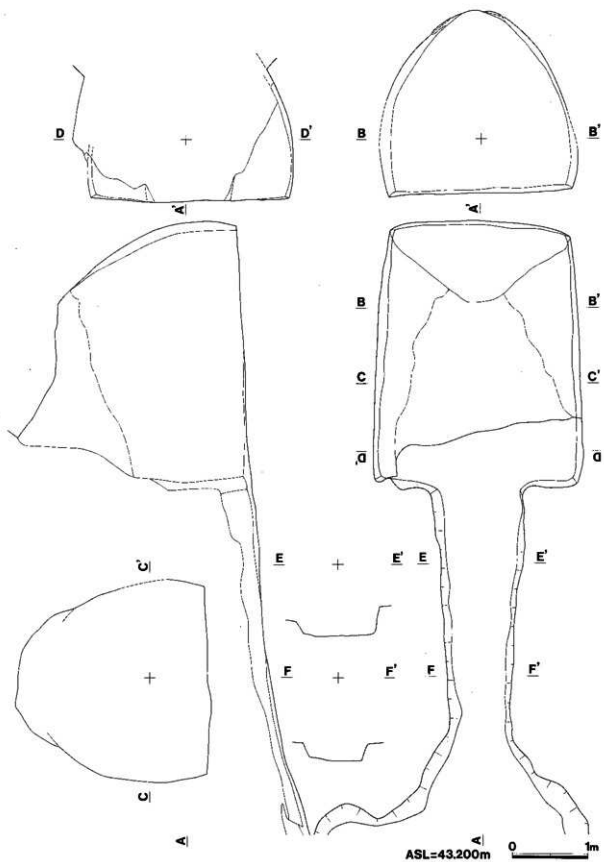
第8号横穴(第18~21図)

第8号横穴は、本横穴群の南斜面裾に位置し、標高42mを測る。本横穴群の中では、東端にあたりレベル的には他の横穴のほとんどが丘陵中腹以上(標高46~48m付近)に占地するのに対し、本横穴は唯一丘陵斜面の裾に造られている。そのため単位群を構成することなく単独で立地する。また本横穴群においては、唯一墓前域と呼べる遺構を兼ね備えた横穴である。これは、丘陵斜面の裾という立地にも深く係わるものであろうが、本横穴群にあっては特異なものと言える。

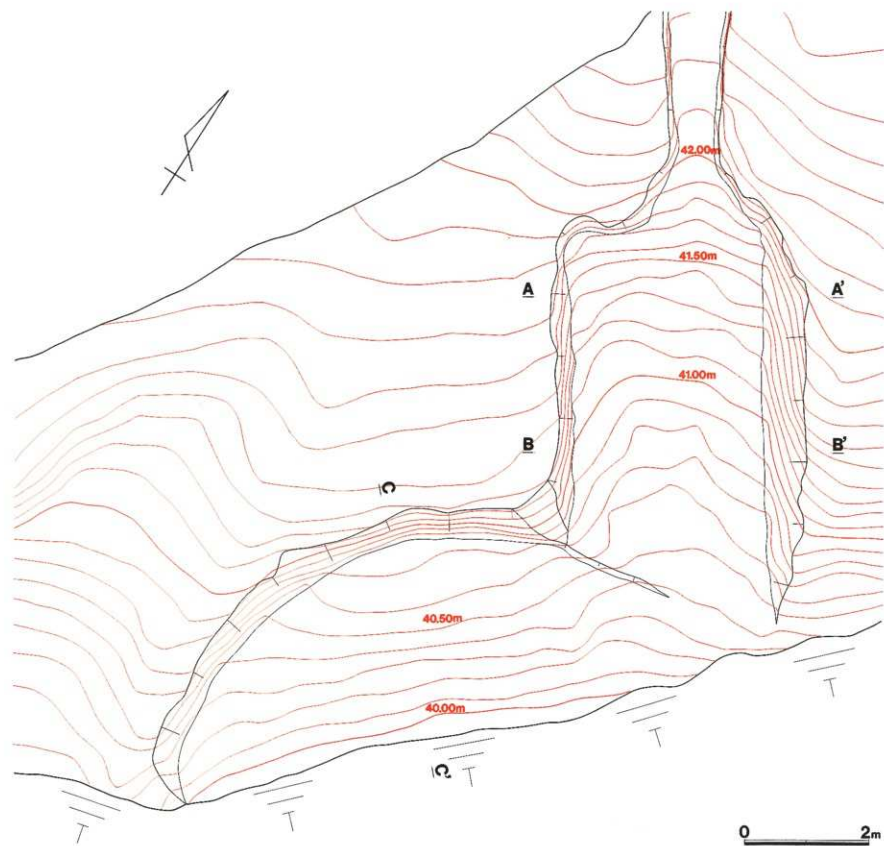
本横穴は、既開口横穴で地元の人々の話では、戦前より戦後間もない頃まで農作業小屋として使われていたが、その後は放置されゴミ捨て場同然の扱いを受けていたと言うことである。近年では、畑地から植林による杉林に変わったものの、ほとんど人跡はなかったようである。開口していたのは玄室部で、羨道部の天井及び側壁は崩落、遺存した部分も埋没していた。玄室内には、かなりの量の陶器片が、流入した土砂に混じっ



第18図 第8号横穴遺物出土状況実測図



第19图 第1号横穴实测图



第20图 第8号横穴墓前坡尖测图(1)

て堆積していた。調査開始当初は、完全に盗掘、攪乱された横穴であろうと考えられていたが、流入土砂及び陶器片撤去後、横穴の床面とは明らかに異なる硬化面が検出され、更にその硬化面下より横穴に伴う遺物の出土をみた。つまり、この硬化面は、農作業小屋として使われていた際の床面で、それより下の横穴床面までの約20cmは攪乱されていなかったのである。

主軸方位は、N-33°-Wを測る。玄室の平面形は、方形で両袖を有す妻入り形態である。断面形は、尖頭形を呈す。

閉塞施設は、羨道部の玄門から2m程のところに基部の一部として、長径30~40cm程の河原石6個が遺存するのみであった。遺存した閉塞石の玄門側では、閉塞石に連なって須恵器が出土していることから、遺存していたのは最も玄門寄りの部分であると考えられる。

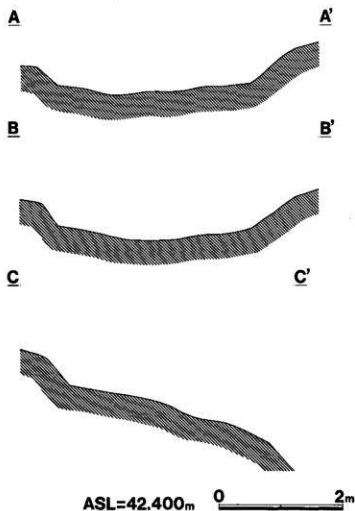
羨道は、玄室のほぼ中央に設けられており、玄門より3m程の部分ま

ではやや狭小気味に延びるが、そこから墓前域にかけてはハの字状に広がる。その規模は全長4.25m、玄門幅1.1m、墓前域幅1.82mを測る。床面は、玄門部を最高位として緩やかな傾斜をもつほかは総体に平滑である。羨道の天井は完全に陥没、側壁も床面より平均で10cm程が遺存するだけである。

玄室は、全長3.54m、最大幅2.57mを測り、平面形は長方形を呈す。奥壁幅に比べ玄門部の両袖幅の方が25cm程広くなっている。床面は、奥壁際を最高位とし玄門に向かって緩やかに傾斜している。総体に平滑で、棺台・排水溝等の施設は確認されなかった。

奥壁は、尖頭形を呈し、床面より内湾して天井に至るもので、高さ2.43mを測る。天井は、奥壁の稜線を境に開口部にかけては崩落しているが、奥壁に最高位をもつものと考えられる。側壁も内湾して立ち上がるもので、床面より平均で1.8m程が遺存する。壁面は、全体に風化が著しいが、側壁では、幅10~13cmを測る弧状の整形痕が確認できる。なお、各壁には農作業小屋として使われた際に造作されたと思われる棚状の掘り込みが存在する。

出土遺物は、種類とその出土位置により大きく2群に分けられる。一つは、玄室の左側壁と前壁のコーナーより出土した勾玉・真玉・切子玉・ガラス小玉(24~38・42~81)の玉類と、耳環(39~41)装身具である。大刀(42)・刀子(43)の鉄製品もみられるが、いずれも破片である。また、人骨片(歯)が少量ながら検出されている。もう一つは、羨道部の閉塞石寄りの部分よりまとめて出土し



第21図 第1号横穴墓前域実測図(2)

ている須臾器群(76~86)で、横転・転倒・重ねが認められる。閉塞石のほとんどが撤去されていたことや鉄製品などの出土状況より、侵入による攪乱を考慮したとしてもこれらの出土位置は、原位置をそれほど著しく移動しているとは考えられない。

墓前域は、急斜面裾の平坦部に造られている。正確には比較的起伏の少ない緩斜面と言える。この平坦部は丘陵斜面裾を巡ってはいるが、平坦裾部は耕作時に削平されており遺存していたのは平均で幅9m程である。墓前域の形状には特徴がみられ、羨道のハの字状に広がった部分より連なる方形形の掘り込み部分と、更にその方形部の左側壁部より連なる半円形の掘り込み部分から成る。

方形部の規模は、全長6.76m、最大幅4.11mを測る。羨道前端部が、方形部の右側壁寄りに造られているため方形部の左側には前壁が設けられているが、右側には前壁がなく羨道前端部より右側壁につながる。側壁の立ち上がりは左側壁に比べ右側壁は緩やかで、その高さは左側壁部で35cm、右側壁部で50cmを測る。床面は、前端部に向かって傾斜しており比高差1.3mを測る。部分的にやや起伏がみられるが、前端部に向かうにしたがって中央部への傾斜が強くなる。排水を考慮したものであろう。

半円部の規模は、全長3.75m、最大幅8.75mを測る。方形部の左側壁端部より緩やかに弧を描きながら斜面の端部に達している。壁高は平均で45cmを測る。床面は、0.9mの比高差をもって斜面端部に向かって傾斜している。

方形部、半円部どちらからも遺物は検出されなかった。新旧関係も土層観察からは明確にし得なかったが、方形部に半円部の右側壁下部が遺存していることから同時期に構築されたものではないようである。また、この半円部が墓前域の一部として機能していたのか、それとも全く別の遺構かについても疑問が残る。

第9号横穴(第22図)

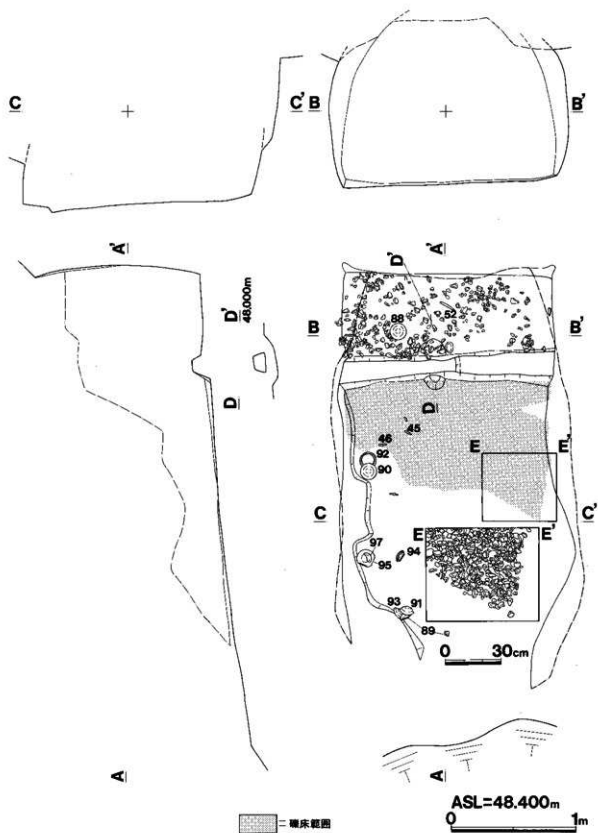
第9号横穴は、本横穴群の南斜面に位置し、標高47mを測る。東隣に並列する6・7号横穴とは、開口部のレベルと主軸の近似値からこの3基から成る単位群が想定できる。

並列する6・7号横穴同様、天井が陥没した完全埋没の横穴で、崩落土の堆積も厚く、奥壁・側壁の剝落も著しい。開口部前端は流失しており遺構としての遺存状態は非常に悪い。床面より30cm程浮いた状態(地山ブロック上)で13世紀に比定できる山茶碗が出土している。該期の横穴再利用が考えられると同時に、既にこの時期には天井・側壁の剝落が始まっていたと考えられる。遺物の出土状況より侵入による攪乱が認められる。

主軸方位は、N-6°-Wを測る。玄室の平面形は方形であるが、開口部前端が流失しているため羨道及び閉塞施設については不明である。並列する7号横穴同様、本来は両袖を有す妻入り形態を呈すものと考えられる。

玄室は、遺存する長さ3.34m、最大幅1.72mを測り、平面形は長方形を呈す。遺存する前端部は、やや狭小することから、この部分から玄室の前壁に連なるものと考えられる。なお、右側壁のやや膨らんだ部分は、後世の攪乱によるものである。玄室奥には奥壁に接して造り付けの石棺が設けられている。

石棺の規模は、外法で全長1.71m、最大幅0.93m、内法で全長1.67m、最大幅0.67mを測り、上縁からの深さは8cmを測る。石棺の床面と玄室の床面とは8cm程の高低差を有す。石棺の平面形は長方形を呈し、開口部側には柵状の堤が設けられている。この堤のほぼ中央部の床面は、長さ41cm、幅7cm、深さ7cmのトンネル状の掘り窪みが設けられている。排水を考慮したものであろう。石棺内には長径2~5cm程の礫が散在的に検出されたが、出土レベルはいずれも床面直上であった。攪乱による原位置の移動は少ないものと考えられる。



第22圖 第9号横穴実測図

床面は、石棺際から開口部に向かって緩やかに傾斜している。左側壁には不定形な6cm程の段差が認められる。この段差は3・7号横穴の床面にみられるものと同様に、床面が粘板層と砂岩層から成る互層部分に造られたことに起因するものであろう。石棺際から開口部にかけての長さ約1m、幅約1.6mの範囲で礫床が敷設されている。2～5cm程の礫が一重ないし二重に比較的密に敷設されている。

奥壁は、上部が崩落しておりその形状は明確にし得ないが、側壁の立ち上がりよりアーチ形を呈すものと考えられる。床面よりやや内湾気味に立ち上がるもので、遺存高1.3mを測る。側壁も上部は剥落しており、遺存した部分でも風化が著しく整形痕は確認できなかった。

出土遺物は、特に土器については破片が含まれることから、侵入時の攪乱を想定せざるおえない。しかし、土器の完形品については、床面直上出土であるため一概に攪乱による原位置の移動があったとも考えられない。須恵器環(89・91・93・94)はいずれも破片で床面より15cm程浮いた状態で出土している。須恵器環(88・90・92)は完形品でほぼ床面直上からの出土である。

鉄製品は、銚(44～48)の主に筧被から茎片、両頭金具(49・50)が石棺際の礫床内から出土している。小刀(51・52)は石棺内から出土している。

2) 道状遺構・溝状遺構

SR01・SD01は、調査区西側平坦部に位置する。この西側平坦部は、本横穴群の急斜面裾に半円形状に巡る正確には緩斜面と言えるものである。8号横穴墓前域が存在する東側平坦部とは、約1.2～1.7mを測る段差をもって連なっており、西側平坦部の方が低くなっている。東側平坦部同様、南側に張り出した部分は耕作時に削平されており、遺存していたのは平均幅9m程であった。斜面裾から約5mの部分から南側前端部は更に半円形状に窪んでおり、その比高差は約2mを測る。

SR01 (第23・24図)

SR01は、西側平坦部を斜面裾と同様に孤状に平行して走る道状遺構であるが、平坦部の最も高い部分の約6mの範囲では遺構が検出されなかった。この高い部分は、構築当初地山上に堆積した表土中に掘削されたためと考えられる。したがって、構築当初は孤状を呈していたと考えられる。

規模については、その全容が明確でないためここでは検出した部分のみの規模を示しておく。遺存長は、西側部分で11.2m、東側部分で10.4mを測る。最大幅は西側部分で1.76m、東側部分では1.12mを測るものであるが、相対的には東側部分の方が狭い。深さは7～25cmで、緩斜面上に立地する部分では斜面上方が深くなっている。断面形は、明瞭な底面をもたない浅い皿状を呈す。

覆土は、比較的粘性の強い暗褐色土の単層である。

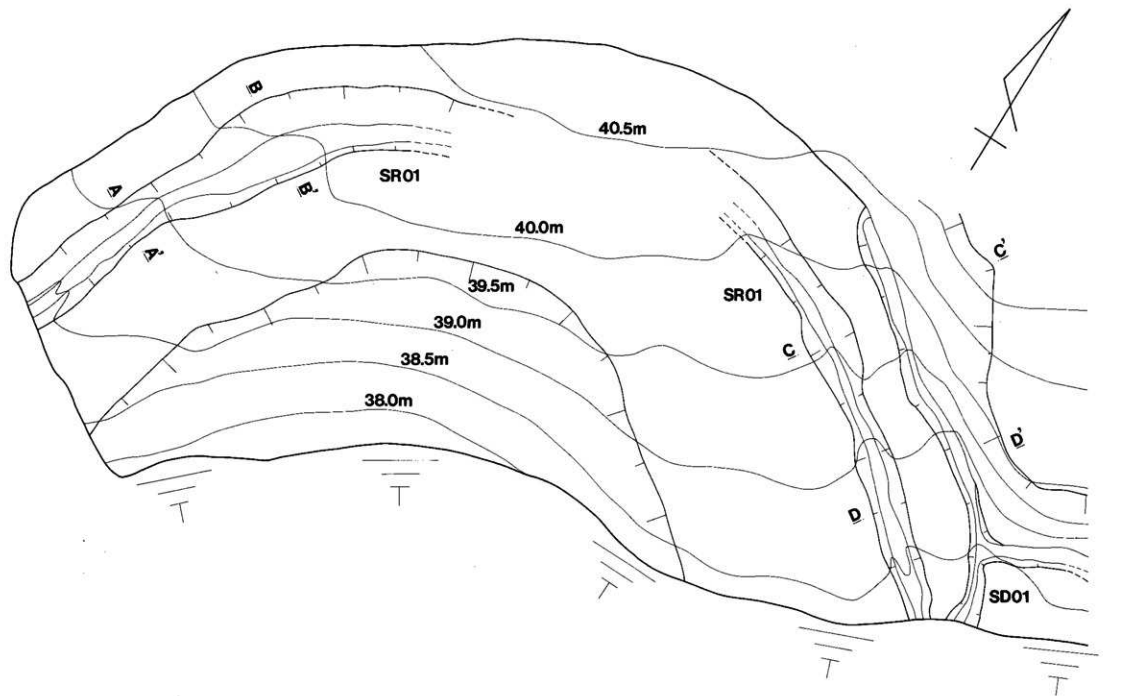
出土遺物は、覆土中より土師器の小破片が数片検出されたが、時代はおろか器種についても不明である。

遺構の性格については、道状遺構としているが、これはその形態より便宜上口称したものであって、本横穴群との関連については明確にできなかった。

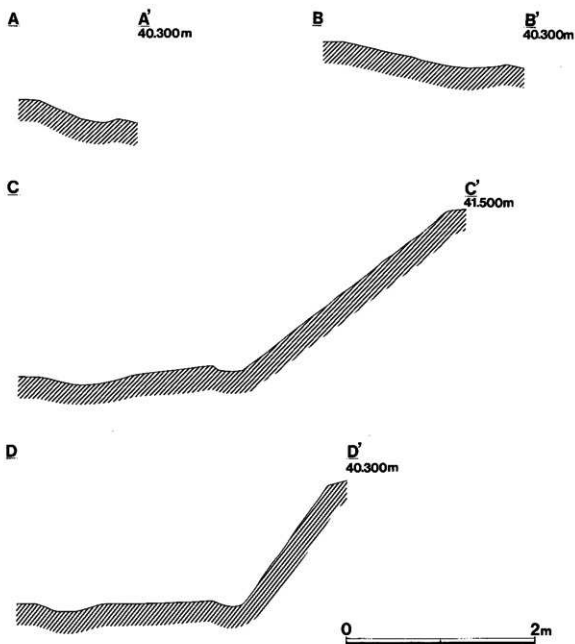
SD01 (第23・24図)

SD01は、西側平坦部に位置する溝状遺構であるが、SR01のように斜面裾に平行して走るのではなく、東側平坦部との段差部分のみに構築されており、SR01と平行して延びる溝と東側平坦部裾に延びる溝とに枝分かれする。どちらも、立地する平坦部が耕作によって削平されておりその全容は明確でない。

規模は、遺存部分で長さ9.2m、その内7.6mの部分よりT字状に枝分かれする。最大幅は0.72mを



第23图 SR01・SD01实测图(1)



第24図 SR01・SD01実測図(2)

測るが平均では0.35m程である。深さは確認面より7cmを測り、その断面形は浅い皿状を呈す。

覆土は、比較的粘性の強い暗褐色土の単層で、遺物は何も検出されなかった。

本横穴群及びSR01との関連については明確にできなかった。

3) 土 壤

SF01 (第25図)

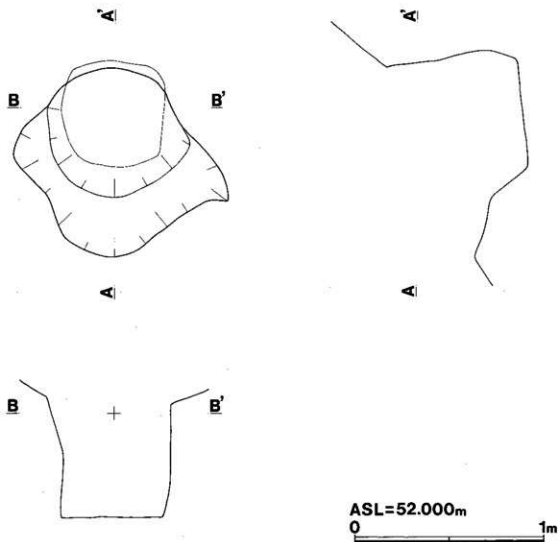
SF01は、本横穴群の西斜面の標高51mに占地する特徴的な形態の土壌である。ちょうど5号横穴の真上にあたる。

主軸方位は、N-44°-Wを測る。その形態は、. 堅穴状に掘削しているものの厳密には、斜面側の壁はオーバーハングして立ち上がるもので、構築当初は小規模ながら天井を有す横穴状の形態も加味していたものと考えられる。しかし、その天井部分は斜面崩落時に大部分を欠損したと考えられ、検出時にも天井の前端部5cm程は崩落してしまった。

開口部は、幅15~30cm程の段傾斜をもって底面に至る。開口部の規模は、長さ1.13m、幅1.17mを測るが、長さについては天井部を欠損しているため実際にはもう少し短かったものと考えられる。底面は一边55cm程の方形で、開口部に向かってやや傾斜している。底面までの深さは、開口部で28cm、奥壁（遺存部分）で70cmを測る。遺存部分での断面形は方形を呈す。

底面より5cm程浮いた状態で長径25cmを測る河原石が一つ出土した。その他には何も検出されなかったため時期は不明である。

前記のように土壌と言うよりは、むしろ横穴と言う表現の方が適切かもしれない。遺構の性格を考えると、この横穴という形態は何らかの埋葬を想定させるものであるが、本横穴群との関連については明確にできなかった。



第25図 SF01実測図

2. 遺物

今回の調査の出土遺物は、すべて横穴内出土で土器、鉄製品、装身具などがある。土器は、須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗があり、完形品が多く総じて遺存状態は良好であった。鉄製品は、大刀・刀子・鎌等がある。装身具は、勾玉・切子玉・管玉・霰玉・丸玉・ガラス小玉・耳環がある。

以下、項目別に説明していく。

1) 土器

第1号横穴出土土器 (第26図)

1は口径15.0cm、器高5.0cmを測る須恵器杯蓋である。天井部は丸味をもち、約1/2にヘラ削りが施される。肩部の稜は明瞭でなく、沈線にちかい。口縁部は内湾し、端部でやや外反する。2は口径14.75cm、最大径15.6cm、器高4.9cmを測る須恵器杯身である。底部は丸味をもち、約1/2にヘラ削りが施される。口縁部はやや内傾して立ち上がり、受部の端部は丸く作られる。1と2はセットで出土している。3は口径8.15cm、最大径12.75cm、器高10.55cmを測る須恵器短頸蓋である。体部上半に最大径を有し、肩部に2条の沈線を巡らす。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は内傾し明瞭な稜を有す。底部周辺外面のヘラ削りと内面のナデは方向が異なる。

第3号横穴出土土器 (第26・27図)

4～7は須恵器杯蓋である。4は口径13.4cm、器高4.2cmを測る。天井部と口縁部の境は不明瞭で、頂部から緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁部外面には浅い斜方向の工具痕が認められる。天井部内面には指頭及びあて具痕が確認できる。5は口径13.3cm、器高4.8cmを測り、形態は4と同じである。6は口径13.3cm、器高4.6cmを測り、形態は4とほぼ同じであるが、体部に弱い屈曲がみられる。7は他の杯蓋に較べ小振りで、口径11.3cm、器高4.4cmを測る。天井部から口縁部まで緩やかに内湾するドーム型を呈す。天井部の約2/3をヘラ削りし、頂部はヘラ削り後ナデ調整している。8～15は須恵器杯身である。8は口径13.5cm、最大径14.6cm、器高4.4cmを測る。内傾して立ち上がる低い口縁部と断面三角形の受部を有す。底部は丸底でその外面がヘラ削りされる。9は口径13.4cm、最大径14.4cm、器高4.65cmを測る。形態は8と同じであるが、底部内面に指頭痕が認められる。ちなみに6の杯身とセットで出土している。10は口径13.2cm、最大径14.4cm、器高4.55cmを測る。形態は8とほぼ同じであるが、体部のノケ目が比較的残っている。受部に蓋の破片が融着していることから、蓋と身セットで焼成されたようである。11は口径14.0cm、最大径15.2cm、器高4.1cmを測る。全体に器厚で、口縁部・受部ともに肥厚しておりシャープさに欠ける。12は口径13.5cm、最大径14.6cm、器高4.4cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部端部は丸く作られる。底部は比較的平坦であるが、外面に自然軸が認められることと、受部に蓋の破片が融着することから蓋と身を逆転させて焼成されたことがわかる。13は口径13.05cm、最大径13.9cm、器高4.15cmを測る。口縁部と受部はシャープに作られる。体部のナデは顕著で、その上部には稜が認められる。底部外面には「×」のヘラ記号がある。14は口径11.3cm、最大径12.05cm、器高4.4cmを測る。他の杯身と較べ口径が小さく、体部も丸味が強い。口縁部内面には沈線が巡る。体部上半にも2条の沈線が施され、ヘラ記号も認められる。15は推定で最大径13.9cmを測る杯身の破片であるが、焼成が悪く調整は不明である。16は体部径9.7cm、現存高14.2cmを測る須恵器甕であるが、口縁端部を欠く。大きく外反する口縁部と偏球体を呈す体部から成る。口縁上半部にはヘラ状工具による押し引き紋が施される。口縁中位と肩部にはヘラ状工具による刺突紋が施され、

その刺突紋を囲うように上下に沈線が巡る。17は口径8.35cm、最大径17.0cm、器高21.2cmを測る須恵器提瓶である。太い頸部から口縁部は外反して立ち上がる。体部外面にはカキ目調整が施される。体部側面には鈎手状の把っ手が付く。体部の偏平部側に付着物の融着が認められることから、湾曲部側を下にして焼成したことがわかる。口縁部内面には「世」のヘラ記号がある。16～24は土師器の高杯である。18は口径14.3cm、底径11.05cm、器高10.55cmを測る。杯部は浅く、脚部の器高の方が高い。脚部の裾はやや屈曲して開く。脚部内面にハケ目が認められるほかは、内外面ともにナデが施される。19は口径15.0cm、底径9.35cm、器高9.95cmを測る。杯部は深く丸みを持ち、内面の口縁部と体部との境に稜を有す。内外面ともにナデが施される。20は口径13.7cm、底径10.4cm、器高8.35cmを測る。形態は19と同じであるが、口縁部の横ナデ以外は内外面とも器面荒れが著しい。21は口径13.3cm、底径10.85cm、器高7.65cmを測る。19に較べ杯部の丸みが弱く、脚部の裾はやや屈曲する。器面荒れが著しい。22は推定で口径14.6cmを測り、杯部と脚端部を欠く。内外面ともにナデが施される。23は口径14.1cmを測る。脚部内面は板ナデが、そのほかはナデが施される。24は口縁端部と脚部を欠く。杯部は内湾して立ち上がる。内外面ともにナデが施される。25は土師器で口縁端部を欠く。口径は推定で12.1cmを測る。頸部で強く屈曲し、口縁部は外反する。肩部に最大径を有し、そこで弱く屈曲し丸底の底部に至る。口縁部は横ナデ、体部上半は縦ハケ、下半は横ハケが施される。26は反胎陶器碗で、口径14.0cm、高台径6.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部は緩く外反し端部は丸く作られ、高台は低く三角形を呈す。体部内面には沈線が巡る。体部のノタ目は顕著で、底部は糸切り未調整である。施軸は漬け掛けである。

第4号横穴出土土器 (第27図)

27は口径13.0cm、器高3.6cmを測る須恵器杯蓋である。天井頂部より緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁端部は内傾し、明瞭な稜をもつ。28は口径13.5cm、最大径14.6cm、器高3.7cmを測る須恵器杯身である。やや外反気味に内傾して立ち上がる口縁部と、断面三角形の受部を有す。29は口径13.5cm、最大径14.65cm、器高3.8cmを測る須恵器杯身である。形態、技法が28に酷似する。30は口径12.1cm、器高3.95cmを測る須恵器杯蓋である。形態は27と同じであるが、天井内面頂部にはあて具痕が認められる。31は口径13.05cm、最大径13.9cm、器高3.85cmを測る須恵器杯身である。口縁部は内傾して立ち上がり、短い受部端部は丸く作られる。32は口径9.6cm、最大径11.75cm、器高6.6cmを測る須恵器短頸壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で内傾する。体部中位に最大径を有しそこに稜状の沈線が巡る。口縁端部は人為的に敲打されている。33は口径7.1cm、最大径12.45cm、器高10.3cmを測る短頸壺である。口縁部は垂直に立ち上がり、端部でやや外反する。体部中位に最大径を有し、そこから底部に向かってすぼまる。肩部に沈線を巡らせる。体部下半は手持ちのヘラ削り後、不定方向のヘラ削りが施される。34は口径11.4cm、最大径18.15cm、器高18.3cmを測る土師器壺である。口縁部はわずかに外反して立ち上がり、偏球体の体部を呈す。口縁部外面は横ナデされ、体部外面と口縁部内面はハケ目が施される。

第5号横穴出土土器 (第28図)

35～37は須恵器杯蓋である。35は口径14.4cm、器高5cmを測る。天井頂部にへこみがあるものの緩やかに内湾して口縁部に至る。36は口径12.8cm、器高3.55cmを測る。35に比べ偏平で口縁端部は内傾し、そこに稜を有す。37は口径12.1cm、器高4.7cmを測る。天井部と口縁部の境には、浅い沈線が巡る。口縁端部は外反し、内面に明瞭な稜を有す。38は口径14.45cm、最大径15.4cm、器高4.8cmを測る須恵器杯身である。口縁部と受部は肥厚しておりシャープさに欠ける。内面は丁寧にナデられている。39・40は須恵器杯身の口縁部片である。口径は推定でそれぞれ13.0cm、12.2cmを測る。41は推定で口径14.0cm、

最大径15.0cmを測る須恵器坏身口縁部片である。42は口径12.2cm、器高4.6cmを測る須恵器短頸壺の蓋である。天井部と口縁部の境には浅い沈線が巡り、口縁端部はやや内傾する。頂部には中央が凹んだ偏平なボタン状のつまみを有す。天井部外面にはヘラ記号がある。43は口縁部を欠損する須恵器長頸壺で、頸部径4.5cm、最大径12.7cmを測る。丸底気味の底部より緩やかに丸味をもって立ち上がり、上部で屈曲しそこに肩を作る。頸部から口縁部は直線的に外反して立ち上がる。頸部上部には2条の沈線が、肩部と体部中位にも沈線が巡る。44と45は須恵器短頸壺である。44は口径7.9cm、最大径14.2cm、器高9.45cmを測る。体部上半で屈曲しそこに肩を作り、口縁部は垂直に立ち上がる。肩部には櫛状工具による刺突紋が施され、その上下に各々2条の沈線が巡る。外面には一部自然釉が認められる。45は口径7.3cm、最大径14.4cm、器高9.4cmを測る。体部中位で弱く屈曲しそこに最大径を有す。口縁部は垂直に立ち上がり、端部を丸く作る。肩部に浅い2条の沈線を巡らす。外面には一部に自然釉が認められる。46は口径9.2cm、最大径13.65cm、器高10.8cmを測る土師器壺である。口縁部は短くわずかに外反して立ち上がる。体部はしもよくれの球体を呈す。体部はやや摩滅気味であるが、ハケが施される。口縁部は内外面ともに横ナデが施される。47は口径8.9cm、最大径15.0cm、器高18.5cmを測る須恵器提瓶である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部との境で屈曲しそこに稜が巡る。体部の偏平部側にはヘラ削り・ナデが認められるが、湾曲部側には自然釉がかかるため調整はやや不明瞭である。

第6号横穴出土土器 (第28・29図)

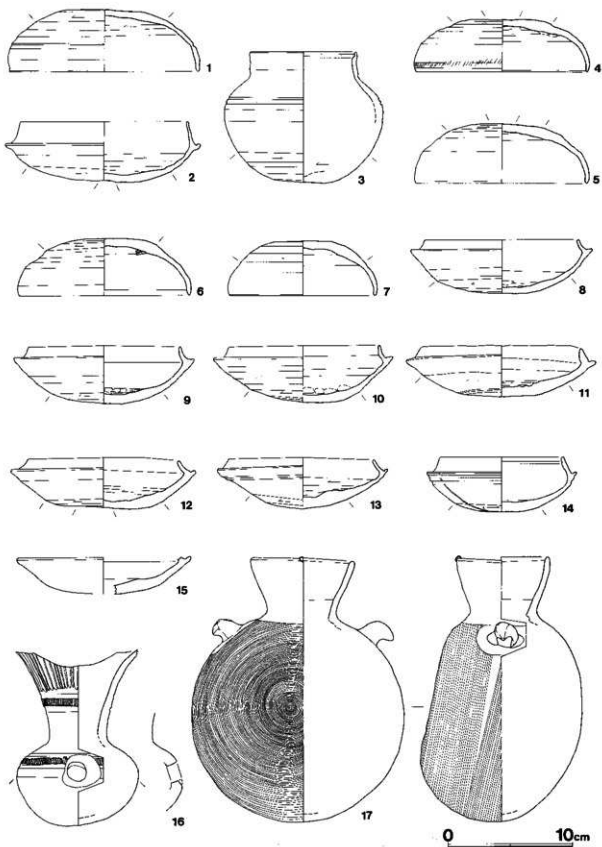
48～52は須恵器坏蓋である。48は口径13.5cm、器高4.65cmを測る。天井頂部より緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁端部外面には工具による刺突紋が施される。49は口径13.4cm、器高3.8cmを測る。48に比べ偏平で歪みがある。ヘラ削り方向と内面ノタ目方向が異なる。50は口径12.5cm、器高4.0cmを測る。天井頂部から緩やかに内湾して口縁部に至り、端部は内傾する。天井部1/2にヘラ削りされるが、頂部は未調整。51は口径11.7cm、器高4.1cmを測る。天井部と口縁部の境は稜によって明瞭に分けられる。天井部は丸く、口縁部は直下におり、その端部は内傾しそこに沈線を有す。52は口径11.2cm、器高3.75cmを測る。形態は50とほぼ同じであるが、天井頂部は未調整である。53～59は須恵器坏身である。53は口径14.05cm、最大径15.0cm、器高3.95cmを測る。口縁部はやや外反気味に内傾して立ち上がり、受部端部は丸く作られる。底部は丸底で約1/2にヘラ削りされる。54は口径13.9cm、最大径15.15cm、器高4.5cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は横に伸びる。底部は器厚で火ぶくれのみられる。ヘラ削りと内面ノタ目の方向が異なる。55は口径13.95cm、最大径14.6cm、器高4.7cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は小さく丸く作られる。底部から体部は丸味が強い。56は口径13.7cm、最大径14.5cm、器高4.75cmを測る。内傾する口縁部は端部が肥厚し、受部端部も丸く作られる。形態・技法は55に類似する。57は口径12.0cm、最大径12.5cm、器高4.15cmを測る。内傾する口縁部は端部を丸く作り、その下部に沈線を巡らす。受部は小さくつまみ出される。体部外面受部付近で沈線を巡らす。体部は内外面ともに丁寧なナデが施される。58は口径12.0cm、最大径12.8cm、器高3.9cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は小さく丸く作られる。底部はヘラ削り未調整。59は口径11.8cm、最大径12.4cm、器高4.1cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部は小さく丸く作られる。ヘラ削りの方向と内面ノタ目の方向が異なる。60は口径9.8cm、最大径10.35cm、器高6.5cmを測る須恵器短頸壺である。口径と体部最大径がほぼ同じで、口縁部は外反して開き、底部はすぼまる。体部下半がヘラ削りされる。61は口径5.0cm、最大径15.15cm、器高13.6cmを測る須恵器平瓶である。提瓶を横にしたような体部に外反して開く口頸部が付く。体部上位と下位にはカキ目調整が施され、中位には回転ヘラ削りが施される。体部側面に鈎状の把手が付く。

第7号横穴出土土器 (第29図)

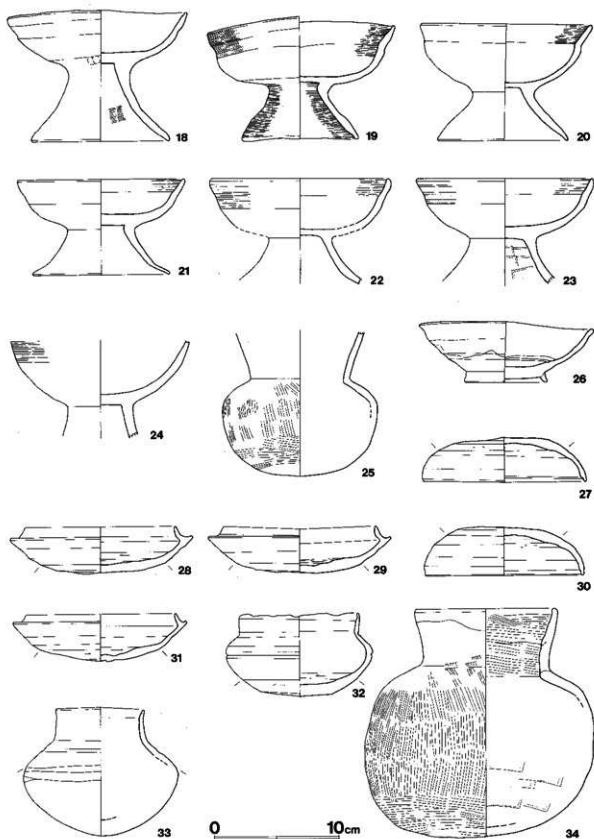
62~64は須恵器環蓋である。62は口径13.0cm、器高3.7cmを測る。天井頂部から緩やかに内湾して口縁部に至る。外面のナデは丁寧に施される。63は口径12.8cm、現存高3.55cmを測る。形態は62と同じである。64は口径12.2cm、器高4.45cmを測る。天井頂部から内湾して口縁部に至り、端部で内傾する。65~72は須恵器坏身である。65は口径14.8cm、最大径13.45cm、器高3.85cmを測る。内傾する口縁部は受部と共に肥厚しておりシャープさに欠ける。体部の1/2にヘラ削りされる。内面中央には工具痕が付く。66は推定で口径13.9cm、最大径15.4cmを測る。受部は肥厚しておりシャープさに欠ける。器形にはかなり歪みがみられ、底部中央は凹むためヘラ削り未調整である。67は口径13.2cm、最大径14.8cm、器高2.8cmを測る。全体に器厚で偏平である。底部中央は凹んでいる。68は口径13.8cm、最大径15.3cm、現存高3.75cmを測る。口縁部、受部ともに肥厚しておりシャープさに欠ける。69は口径13.4cm、最大径4.2cm、器高4.2cmを測る。内傾して立ち上がる口縁部はシャープで受部は小さい。底部周辺にヘラ削りされるが、中央部は未調整。70は口径13.0cm、最大径14.2cm、器高3.9cmを測る。口縁部の断面は三角形を呈し、受部端部は丸く作られる。底部はすばまるような丸底で約1/2にヘラ削りされる。71は口径13.05cm、最大径4.2cm、器高3.35cmを測る。口縁部の立ち上がりは低い。平底の底部にヘラ削りされるが、櫛状工具痕が格子目状に残る。72は推定で口径14.2cm、最大径15.5cmを測る。73は口径10.8cm、器高7.0cmを測る須恵器碗である。平底の底部よりやや内湾した後、口縁部まで直立気味に立ち上がる。体部中央に2条の沈線が巡る。74は口径10.7cm、器高4.3cmを測る土師器坏である。平底であるが、口縁部まで内傾して立ち上がる。内外面ともにナデられる。75は口径8.8cm、器高1.75cmを測る山茶碗小皿である。口縁部でやや外反する。底部には糸切り痕が認められる。

第8号横穴出土土器 (第30図)

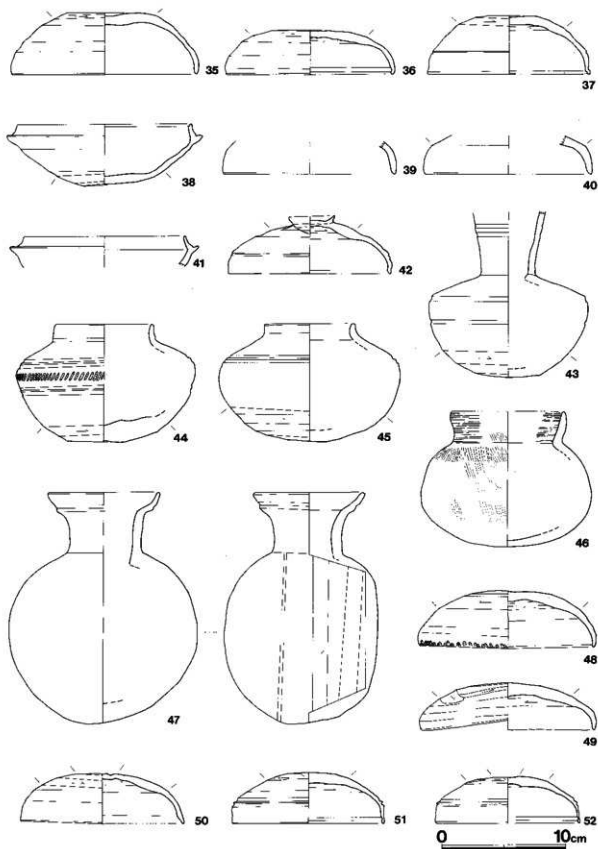
76・77は須恵器環蓋である。76は口径10.85cm、器高4.7cmを測る。半球形を呈し、口縁部と天井部の境に沈線が巡る。口縁部内面にも沈線が巡る。内外面共に丁寧にナデられる。77は口径10.7cm、器高4.0cmを測る。天井部は平坦気味でそこにヘラ削りされるが、頂部は未調整である。沈線化した稜が口縁部に施される。78は口径11.0cm、最大径12.1cm、器高4.05cmを測る。口縁部は内傾が著しく、立ち上がりも低い。受部端部は丸く作られる。底部は平底でヘラ削りされ、ヘラ記号も認められる。受部外面に蓋の破片が付着していることからセットで焼成されたようである。79~81は須恵器無蓋高坏である。79は口径12.45cm、底径9.2cm、器高10.4cmを測る。坏部は緩やかに内湾して開く。口縁部と体部との境に弱い稜を施す。底部付近にヘラ削りされ、体部にはノク目が著しく残る。脚端部を下部に屈曲させる。80は口径10.7cm、底径8.9cm、器高9.2cmを測る。坏部は半球形で、口縁部と体部との境に弱い稜を施し、口縁部は肥厚させる。脚部のナデは丁寧に、端部は下部に屈曲させてそこに稜を有す。81は口径9.7cm、底径8.1cm、器高8.8cmを測る。坏部は浅く、口縁部がやや外反して開く。口縁部と体部との境に弱い稜を施す。脚端のナデは丁寧に、端部は屈曲しそこに稜を有す。82は口径10.75cm、最大径9.55cm、器高11.45cmを測る須恵器甕である。細い頸部から大きく外反しながら口縁部に至り、端部で段を設ける。体部は肩部に最大径を有し、そこに櫛状工具による列点文を施す。注孔部は突出させて付けられる。83~86は須恵器平瓶である。83は口径6.2cm、最大径17.1cm、器高18.9cmを測る。やや肩が張った体部に、ラッパ状に外反する口頸部が付く。口縁部内面に沈線状の稜が巡る。肩部等に焼成時の表面剝離がみられる。84は口径5.85cm、最大径15.2cm、器高15.65cmを測る。鶏卵状の体部に外反する口頸部が付く。頸部付近に沈線が巡る。体部1/2にヘラ削りが施されるが、口頸部内面のナデとは方向が異なる。85は肩が張った体部に太い口頸部が付くが、口頸部が体部にめり込み変形している。口縁部を肥厚させその下に稜を巡らす。86は口径5.0cm、最大径12.4cm、器高12.9cmを測る。



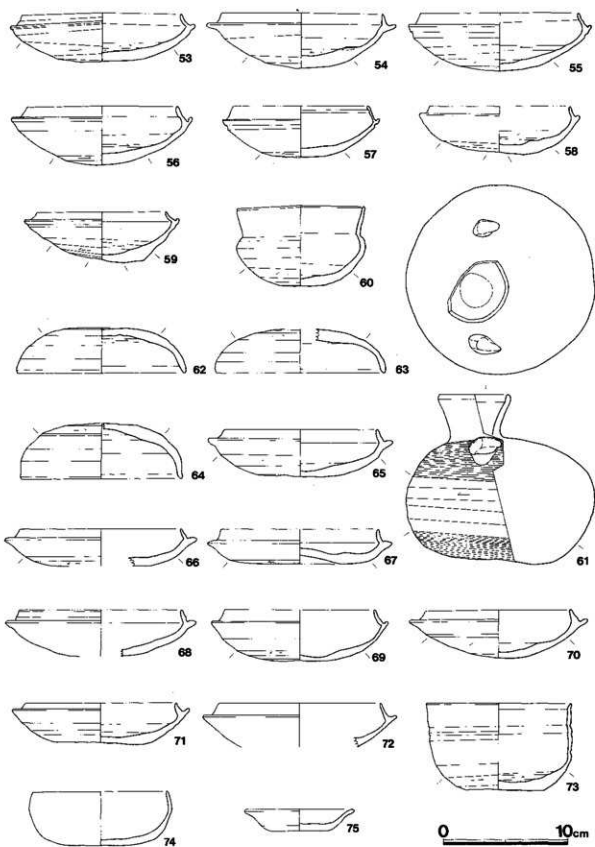
第26图 出土土器实测图(1)



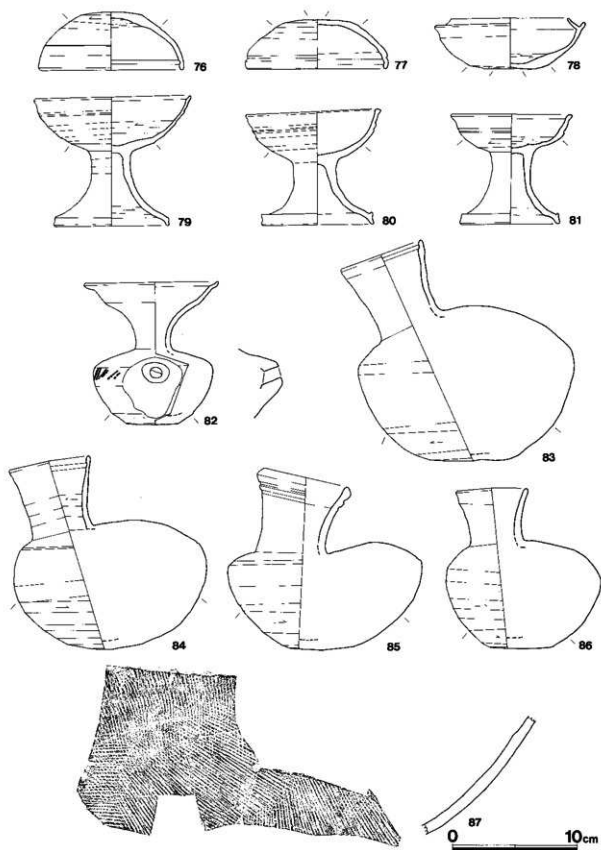
第27图 出土土器实测图(2)



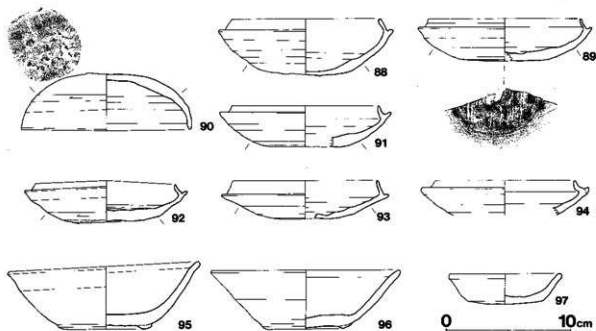
第28图 出土土器实测图(3)



第29图 出土土器实测图(4)



第30图 出土土器实测图(5)



第31図 出土土器実測図(6)

他のものに比べ体部が小さい。口頸部は外反し端部は丸い。体部のノタ目がよく残っている。また、84～86には肩部から体部外面に深緑色の自然釉が付着する。87は須恵器大鉢胴部片で、外面には平行・格子タタキが施され、内面はナデられる。

これら図示したものの他に、フラスコ瓶の体破片と土師器高環の脚部片が出土している。

第9号横穴出土土器(第31図)

88・89は須恵器坏身である。88は口径13.1cm、最大径14.0cm、器高4.65cmを測る。口縁部・受部ともに端部は丸く作られる。底部周辺はヘラ状工具によるナデが施されるが、粘土の巻き上げ痕が認められる。底部内面には指頭痕が認められる。89は口径13.0cm、最大径13.8cm、器高3.4cmを測る。口縁部はシャープだが、受部は小さい。平底の底部には平行板目状の圧痕が認められる。90は口径13.1cm、器高4.65cmを測る須恵器坏蓋である。半球形を呈す。天井部はヘラ状工具によるナデが施されるが、粘土の巻き上げ痕が確認できる。天井部外面には布の圧痕が確認できる。なお、88の坏蓋とは調整技法が同じであることからセットになると考えられる。91～94は須恵器坏身である。91は口径12.6cm、最大径13.8cm、器高3.25cmを測る。体部のノタ目は著しい。92は口径12.1cm、最大径13.05cm、器高3.4cmを測る。口縁部は内傾が強い。歪み・火ぶくれがみられる。93は口径12.7cm、最大径13.4cm、器高3.1cmを測る。口縁部は比較的長くシャープである。内面のノタ目は顕著に残る。底部外面には自然釉が付着することから、口縁部を下にして伏せた状態で焼成されたようである。94は口径12.6cm、最大径13.4cmを測る。口縁部はやや外反気味に内傾し、受部は小さい。95・96は山茶碗である。95は口径15.4cm、器高5.3cmを測る。緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部直下で若干外反する。全体に器厚で高台は低くつぶれている。96は口径15.1cm、器高4.8cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、高台は低くつぶれている。97は口径9.0cm、器高2.5cmを測る山茶碗小皿である。内面中央がやや盛り上がり、口縁端部は丸く作られる。低部には糸切り痕がかすかに残る。

2) 鉄 製 品

第1号横穴出土鉄製品 (第32図)

1は腸扶長三角形形式の平根鐵であるが、その形状は類柳葉式ともいえる。鐵身は両丸造りで、逆刺の両端部を欠損しているが、比較的長いタイプである。筧被は比較的長く、断面形が方形を呈す。茎は両丸方形を呈し木質が認められる。鐵身から筧被にかけて纖維痕が認められる。2も腸扶長三角形形式の平根鐵である。茎以下を欠損。鐵身は、断面三角形を呈す片鑄造りである。鐵身から筧被にかけて纖維痕が認められる。3は刀子で切先と茎尻を欠損する。残存長10.4cm、刀身幅1.4~1.9cm、重ね0.6cm、茎幅1.3cm、重ね0.65cmを測る。刀身は平棟平造り。関は刃側を深く、棟側を浅く切った両関である。4~5は刀子の茎片である。4には鹿角が確認できる。5には木質が確認できる。6は刀子の茎と刀身の破片である。残存長8.4cm、刀身幅1.9cm、重ね0.6cm、茎幅1.4cm、重ね0.5cmを測る。刀身は平棟平造り。片関である。刀子としては、大型のものと考えられる。7も大型の刀子で、残存長22.1cm、刀身幅2.7cm、重ね0.65cm、茎幅1.25~1.6cm、重ね0.45cmを測る。刀身の中心~切先、及び茎尻を欠損。刀身は平棟平造りで木質が残存する。茎には鹿角が残存するため関の形態は明確でないが、両関だと思われる。茎尻には目釘穴が穿たれている。8も大型の刀子で全長36.4cm、刀身長28.3cm、刀身幅2.45cm、重ね0.85cm、茎長8.05cm、重ね0.7cmを測る。ほぼ完存しているが、刀身に歪みがある。刀身は平棟平造りである。関は刃側を浅く、棟側を深く切った両関である。木質と鹿角が残存しており、その残存状況より、木柄を巻いた後その上に鹿角を装着している。

第3号横穴出土鉄製品 (第32図)

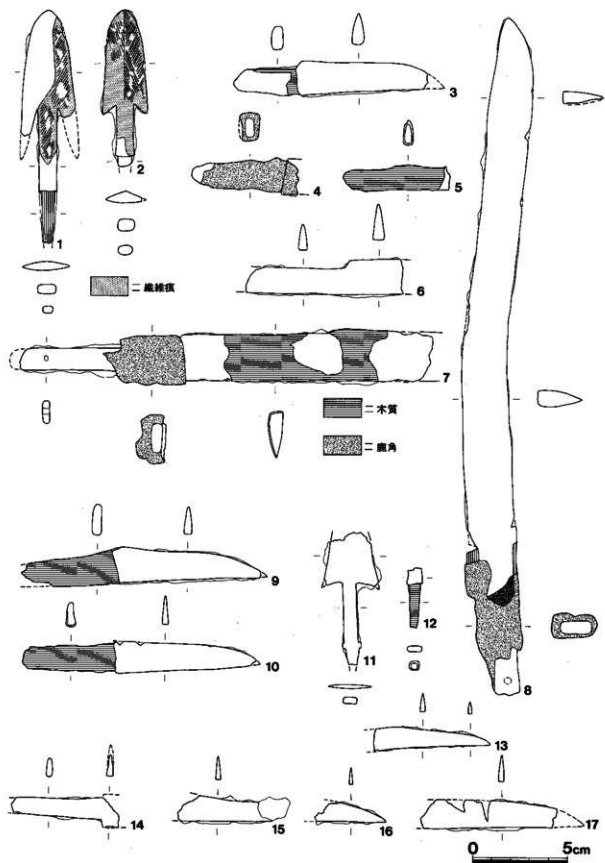
9・10は刀子である。9は残存長12.75cm、刀身幅1.25~1.9cm、重ね0.4cm、茎幅1.4~1.9cm、重ね0.4cmを測る。切先と茎尻を欠損。刀身は平棟平造りで、茎は茎尻に向かって刃側の方に造り出されており関は明確でない。10は残存長12.5cm、刀身幅1.8cm、重ね0.3cm、茎全長5.0cm、茎幅1.25cm、重ね0.4cmを測る。切先を若干欠損するが、ほぼ完存している。刀身は平棟平造り、両関である。茎には木質が残存する。

第4号横穴出土鉄製品 (第32図)

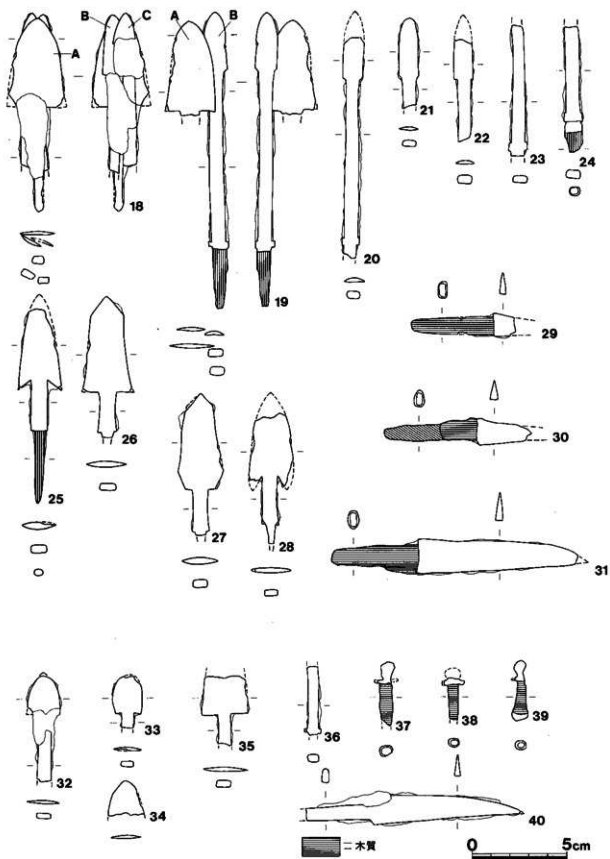
11は(広鋒)長三角形形式の平根鐵である。鋒先、逆刺端部、及び茎を欠損。平造りで、鐵身関部は浅い逆刺状に斜めに切れ込む。関には棘が付く。12は鐵の筧被から茎片で、茎には木質が残存する。13は刀子の刀身の破片である。14は刀子の茎片で、刀身は両関と考えられる。15は刀子の刀身片である。16は刀子の切先片である。17は刀子の刀身片である。

第5号横穴出土鉄製品 (第33・35図)

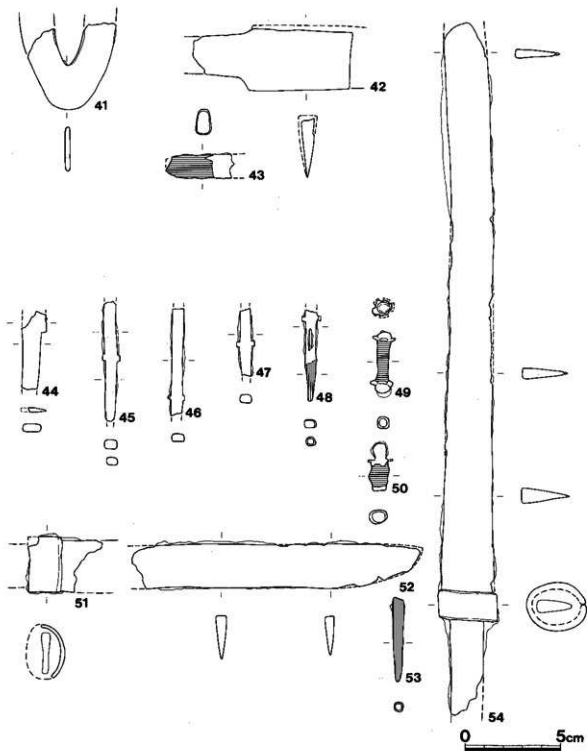
18は平根鐵1本と尖根鐵2本が鑄付いたものである。18-Aは(広鋒)長三角形形式の平根鐵である。端部を欠損。鐵身は平造りである。筧被は錆が著しい。18-Bは長三角形形式の尖根鐵である。茎を欠損しており、筧被は錆が著しい。鐵身は平造りである。18-Cは長三角形形式の尖根鐵である。茎を欠損する。鐵身は片丸造りである。19は平根鐵と尖根鐵が鑄付いたものである。19-Aは(広鋒)長三角形形式の平根鐵である。筧被以下を欠損。鐵身は平造りである。19-Bは長三角形形式の尖根鐵である。ほぼ完存する。鐵身は片丸造りで、関には棘が付く。茎には木質が残存する。20は長三角形形式の尖根鐵である。鋒先と茎以下を欠損。鐵身は片丸造りで、関には棘が付く。21・22は長三角形形式の尖根鐵の鐵身片である。どちらも片丸造りである。23・24は鐵の筧被片で、関には棘が付く。24の茎には木質が残存する。25は腸扶長三角形形式の平根鐵である。鋒先と逆刺端部を欠損。鐵身は両丸造りで、関は直状関である。茎には木質が残存する。26は鋒先に屈曲がみられる五角形式の平根鐵である。茎を



第32図 出土鉄製品実測図(1)



第33图 出土鉄製品実測图(2)



第34図 出土鉄製品実測図(3)

欠損。鎌身は平造りで、筥被の断面形は偏平な方形を呈す。関は台形を呈す。27は26同様鋒先に屈曲がみられるが、端部も屈曲する変形の五角形式の平根鎌である。茎を欠損。鎌身は平造りで、筥被の断面形は偏平な方形を呈す。28は腸扶柳葉式の平根鎌である。鋒先と逆刺端部を欠損。鎌身は平造りで、関は台形を呈す。29・30は刀子で、刀身のほとんどを欠損する。29は関が刃側のみ片関で、茎には木質が残存する。30は両関で、茎には木質が残存する。31は切先を若干欠いた刀子である。残存

長13.2cm、刀身幅1.2~1.8cm、重ね0.45cm、茎幅0.85~1.3cm、重ね0.45cmを測る。刀身は平棟平造り、両関である。茎には木質が残存する。55は大刀である。茎尻を若干欠損するほかはほぼ完存しており、遺存長107.6cmを測る。刀身は長さ88.2cm、幅3.1~4.3cm、重ね0.9cmを測る。平棟平造りで、関は刃側のみの片関である。茎は長さ19cm程で幅1.9~2.5cm、重ね0.75cmを測り、茎尻より4cm程の部分に目釘穴が穿たれている。部分的に木質が認められる。56は大刀の鐔である。完存するもので、長径8.9cmを測る倒卵形を呈す。厚さは縁辺部で0.6cm、内側で0.3cmを測る。なお、大刀(55)は鐔(56)が装着された状態で出土した。

第6号横穴出土鉄製品(第32図)

32は三角形形式の尖根鐵である。茎以下を欠損。鐵身は片丸造りで、篋被は偏平である。33はやや丸みを帯びた三角形形式の尖根鐵である。篋被以下を欠損。鐵身は片丸造りである。34は(広鋒)長三角形形式の平根鐵の鋒先部分である。35も(広鋒)長三角形形式の平根鐵で、34と同一個体の可能性がある。36は鐵の篋被片で、関には棘がある。37~39は両頭金具である。端部の瘤状突起・花卉状座板を欠損しているものが多い。筒部には木質が残存する。40は刀子である。切先と茎尻を欠損しており、残存長11.45cmを測る。刀身は平棟平造り、両関で斜めに切れ込む。

第7号横穴出土鉄製品(第33図)

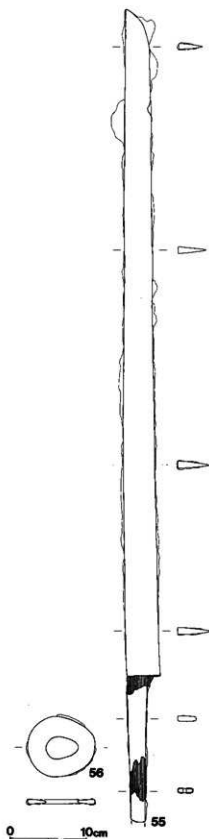
53は鐵の茎片で木質が残存する。54は大刀である。切先と茎尻を欠損するが、篋が装着された状態で遺存した。残存長37.0cm、刀身幅2.3~2.7cm、重ね0.45~0.8cm、茎幅1.75cm、重ね0.6cmを測る。刀身は平棟平造りで、やや先細りである。関は付着する筈のため確認し得ないが、両関と思われる。筈は長径3.1cm、高さ1.55cm、板金の厚さ0.4cm前後を測る。断面形は楕円形を呈す。

第8号横穴出土鉄製品(第33図)

41は大刀の鐔である。半分以上を欠損しているが、長径8cm前後の倒卵形を呈すものと思われる。厚さ0.35cmを測る。42は大刀破片である。刀身は棟を欠損しているが、平棟平造りと考えられる。関は両関である。刀身幅からみて大型の大刀であったと想定される。43は刀子の茎片で木質が残存する。

第9号横穴出土鉄製品(第33図)

44は刀子の茎片である。関の形態は不明。45~48は鐵の篋被から茎片である。いずれも関には棘が付く。48の茎に



第35図 出土鉄製品実測図(4)

は木質が残存する。49・50は両頭金具である。49はほぼ完存しており全長3.4cmを測る。花弁状座板の遺存状態より本来は5枚あったと考えられる。筒部には木質が残存する。51は小刀の細片で刀身の一部も残存する。差は長径3.9cm、高さ1.6cm、板金の厚さ0.2cmを測る。52は小刀の刀身片である。残存長15.3cm、刀身幅2.35cm、重ね0.5cmを測る。平棟平造りである。

3) 装身具 (第36・37図)

第1表 第3号横穴出土装身具計測表 (第36図)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
1	管玉	1.1	2.9	0.3	碧玉	濃緑色	片側穿孔。丁寧に整形・研磨されている。
2	切子玉	1.55	2.45	0.45	水晶	白色透明	片側穿孔。孔の中には、朱の付着が認められる。
3	切子玉	1.25	1.65	0.4	水晶	白色透明	
4	切子玉	1.85	1.5	0.6	水晶	白色透明	
5	切子玉	1.25	1.75	0.45	水晶	白色透明	
6	小玉	1.1	0.85	0.3	ガラス	濃紺色	
7	小玉	0.85	0.65	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
8	小玉	0.9	0.75	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
9	小玉	0.9	0.75	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
10	小玉	0.9	0.7	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
11	小玉	0.9	0.7	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
12	小玉	0.85	0.6	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
13	小玉	0.85	0.6	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。

3号横穴では、この他にもガラス製の粟玉10個が出土している。法量は最大径0.32~0.4cm、厚さ0.21~0.27cmを測り、いずれも紺色を呈す。

第2表 第4号横穴出土装身具計測表 (第37図)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
82	土玉	1.3	2.05	0.15	土	暗褐色	切子玉を模したように中央に膨らみを有し、面取りされるが、作りは粗雑である。手こねで整形し、焼成前の両側穿孔である。焼成は非常にうまく実態には10個検出されたが、その内の5個は水洗の際に崩壊してしまった。
83	土玉	1.4	1.95	0.2	土	暗褐色	
84	土玉	1.5	1.9	0.2	土	暗褐色	
85	土玉	1.2	2.25	0.2	土	暗褐色	
86	土玉	1.3	1.3	0.25	土	暗褐色	

第3表 第5号横穴出土磁石計測表 (第37図)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
87	磁石	2.3×2.9	1.9		浮石凝灰岩	乳白色	6面とも入念に使い込まれている。

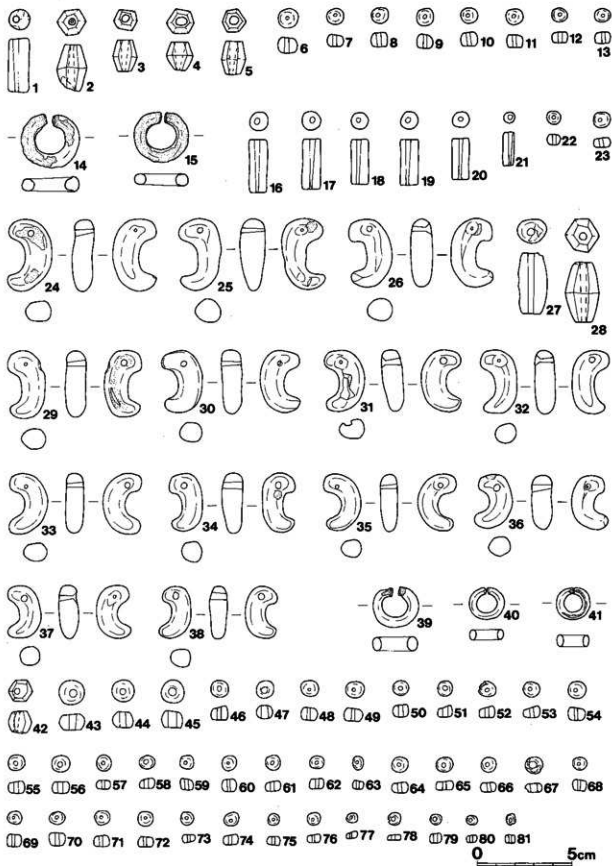
第4表 第7号横穴出土装身具計測表 (第36図)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
14	銀環	3.1	0.8		銅芯銀貼環		銀箔はほとんど剝離、腐蝕。腐蝕は銅芯にまで及ぶ。
15	銀環	2.59	0.6		銅芯銀貼環		

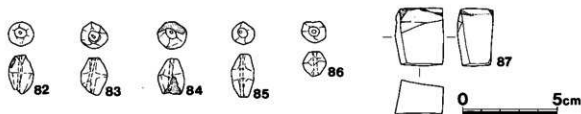
番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
16	管玉	1.0	2.8	0.3	碧玉	濃緑色	すべて片側穿孔。丁寧に整形・研磨されている。17・20には、貫通面に挟りがある。
17	管玉	1.0	2.6	0.3	碧玉	濃緑色	
18	管玉	0.9	2.4	0.25	碧玉	濃緑色	
19	管玉	1.0	2.4	0.3	碧玉	濃緑色	
20	管玉	0.9	2.2	0.25	碧玉	濃緑色	
21	管玉	0.6	1.8	0.3	碧玉	淡緑色	片側穿孔。
22	小玉	0.75	0.6	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
23	小玉	0.9	0.5	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。

第5表 第8号横穴出土器具計測表 (第36図)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考	
24	勾玉	3.8	1.45	0.3	瑪瑙	乳褐色	片側穿孔。丁寧に研磨されているが、表面が剥離している部分がある。25・26には、貫通面に挟りがある。	
25	勾玉	3.8	1.35	0.3	瑪瑙	乳褐色		
26	勾玉	3.6	1.3	0.3	瑪瑙	乳褐色	丸みもった楕円形。細かい亀裂がはしる。片側穿孔。	
27	環玉	1.5	2.2	0.35	琥珀	赤褐色		
28	切子玉	1.75	3.15	0.4	水晶	白色透明		片側穿孔。孔の中には、朱の付着が認められる。
29	勾玉	3.6	1.3	0.35	瑪瑙	乳褐色		片側穿孔。丁寧に研磨されているが、表面が剥離・亀裂が目立つ。29は、片面に権威がみられる。31・32には貫通面に挟りがある。
30	勾玉	3.25	1.15	0.3	瑪瑙	乳褐色		
31	勾玉	3.25	1.3	0.4	瑪瑙	乳褐色		
32	勾玉	3.5	1.1	0.3	瑪瑙	赤茶色		
33	勾玉	3.2	1.25	0.3	瑪瑙	赤茶色		片側穿孔。
34	勾玉	3.15	1.05	0.4	滑石	黒緑色		
35	勾玉	3.0	0.95	0.25	瑪瑙	赤茶色		非常に丁寧に整形・研磨されており、剥離・摩滅はほとんど認められない。
36	勾玉	2.9	1.25	0.4	瑪瑙	乳褐色	片側穿孔。丁寧に研磨されているが、表面がやや摩滅している。37は挟りあり。	
37	勾玉	2.75	1.05	0.35	瑪瑙	乳褐色		
38	勾玉	2.8	1.05	0.35	滑石	灰褐色	片側穿孔。丁寧に研磨。	
39	金環	2.4	0.85		銅芯金貼環		銅芯は腐蝕が著しいが、39・40は、金箔の遺存状況は良好。41はやや剥離している。	
40	金環	1.8	0.55		銅芯金貼環			
41	金環	1.7	0.55		銅芯金貼環			
42	切子玉	1.15	1.15	0.3	水晶	白色透明	片側穿孔。孔の中には、朱の付着が認められる。	
43	丸玉	1.3	0.9	0.4	ガラス	黄緑色	片側穿孔。	
44	丸玉	1.2	0.8	0.45	埋木	乳灰褐色	片側穿孔。	
45	丸玉	1.15	0.8	0.35	埋木	乳灰褐色	片側穿孔。	
46	小玉	0.9	0.75	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。	
47	小玉	0.9	0.7	0.35	ガラス	濃紺色	片側穿孔。	
48	小玉	0.9	0.65	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。	
49	小玉	1.05	0.65	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。	
50	小玉	0.95	0.65	0.25	ガラス	紺色	片側穿孔。	
51	小玉	0.8	0.6	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。	



第36图 出土装身具实测图(1)



第37図 出土装身具実測図(2)

番号	名称	長さ・外径	厚さ	穿孔径	材質	色調	備考
5 2	小玉	0.85	0.7	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。一部破損。
5 3	小玉	0.9	0.65	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
5 4	小玉	0.85	0.65	0.15	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
5 5	小玉	0.9	0.65	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
5 6	小玉	0.9	0.6	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
5 7	小玉	0.75	0.45	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
5 8	小玉	0.85	0.55	0.25	ガラス	紺色	片側穿孔。
5 9	小玉	0.7	0.6	0.2	ガラス	紺色	片側穿孔。
6 0	小玉	0.8	0.65	0.15	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 1	小玉	0.8	0.55	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 2	小玉	0.75	0.55	0.15	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 3	小玉	0.75	0.45	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 4	小玉	0.9	0.55	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 5	小玉	0.95	0.45	0.25	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 6	小玉	0.8	0.5	0.25	ガラス	淡緑色	片側穿孔。
6 7	小玉	0.9	0.45	0.4	ガラス	乳白色	片側穿孔。一部腐蝕。
6 8	小玉	0.75	0.6	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
6 9	小玉	0.75	0.65	0.15	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
7 0	小玉	0.85	0.65	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
7 1	小玉	0.85	0.6	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
7 2	小玉	0.8	0.55	0.2	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
7 3	小玉	0.7	0.4	0.15	ガラス	濃紺色	片側穿孔。
7 4	小玉	0.8	0.55	0.2	ガラス	緑色	片側穿孔。
7 5	小玉	0.65	0.45	0.15	ガラス	紺色	片側穿孔。
7 6	小玉	0.7	0.45	0.15	ガラス	紺色	片側穿孔。
7 7	小玉	0.6	0.35	0.1	ガラス	淡緑色	片側穿孔。
7 8	小玉	0.7	0.3	0.2	ガラス	紺色	片側穿孔。一部破損。
7 9	小玉	0.6	0.5	0.2	ガラス	青色	片側穿孔。
8 0	小玉	0.55	0.4	0.15	ガラス	紺色	片側穿孔。
8 1	小玉	0.55	0.4	0.15	ガラス	淡緑色	片側穿孔。

8号横穴では、この他にもガラス製丸玉の破損品2個体分と、琥珀製粟玉の破損品1個体分が出土している。

III 長沢遺跡の調査

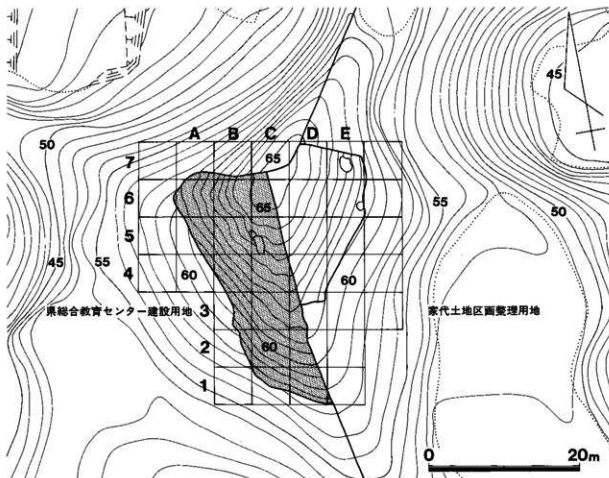
長沢遺跡は、当初長沢古墳群に属する一古墳と考えられていた。今回の県総合教育センター建設予定地内の東端に位置するが、厳密には遺跡の西半分が今回の調査対象地で、東半分は隣接する家代土地区画整理用地内に属している。遺跡範囲を東西に分断される形で開発が進められることになったわけであるが、当然のことながら異なる事業のため調査も分けて行われた。東半分は、家代土地区画整理用地内埋蔵文化財発掘調査事業として、今回の調査の4ヶ月前に行われた。調査の結果、当初の予測とは裏腹に古墳ではないことが判明したが、時期不明の集石遺構2基を検出した。

先の調査結果を踏まえ古墳以外の遺構が検出される可能性もあることから、今回の調査では調査可能な範囲はすべて精査するものとした。その結果、弥生時代中期前葉に属する土壌が1基検出された。遺物もその土壌に伴う該期の壘形土器片が、30片程検出された。

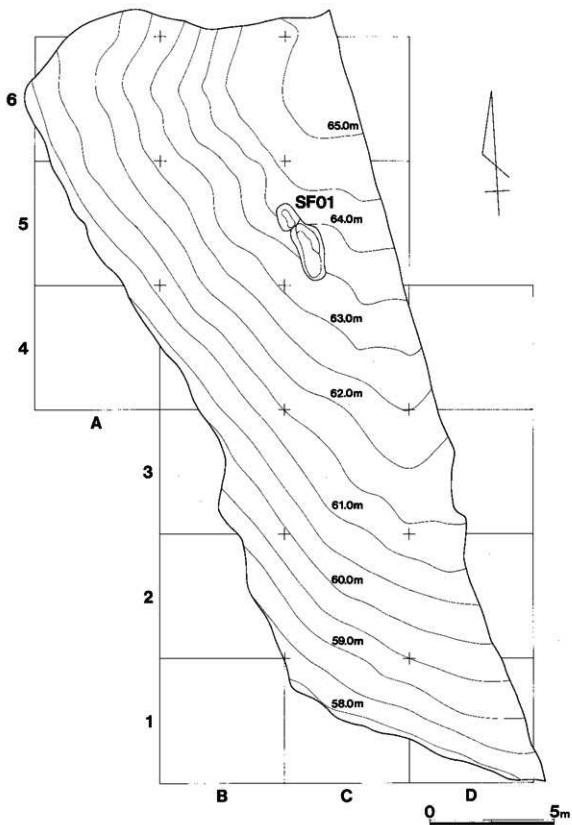
以下、調査におけるこれらの成果を遺構、遺物の順に項目に分けて説明していく。

1. 遺 構

長沢遺跡の位置及び地理的環境は、前記のように原野谷川の東岸に迫る奥深い山並の尾根上に位置する。長沢遺跡の占地する尾根は、東西を開析された北から南へ延びる瘦せ尾根で、その丘陵頂上部



第38図 長沢遺跡グリッド配置図



第39図 長沢遺跡全体図

にはほとんど平坦がない急峻な地形である。標高は66mで、眼下にはさらに尾根が延びているが、視界を妨げるほどの高さではないため、原野谷川流域の沖積平野がかなりの範囲まで見渡せる。

SF01 (第39・40図)

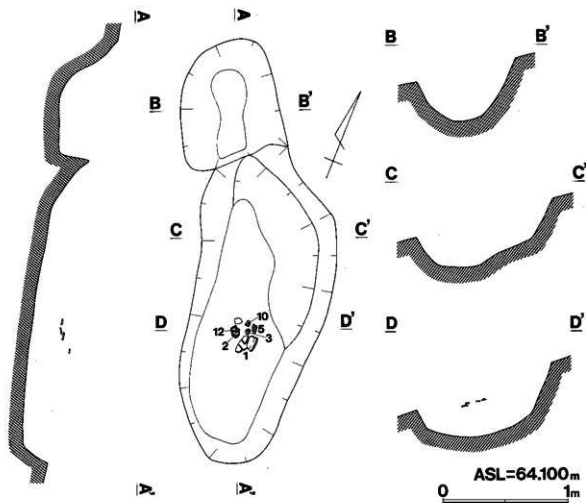
SF01は、丘陵南東斜面の頂上付近(C-5グリッド)で検出された。

主軸方位は、 $N-3^{\circ}-W$ を測る。平面形は、いびつな方形を呈す。北東コーナーは、ピット状の遺構と接している。確認面での規模は、長さ2.54m、幅1.13m、深さは東壁で0.41m、西壁で0.15mを測る。北壁から東壁の一部にかけて、幅0.35m程の段傾斜が認められるが、他の壁面は緩やかに立ち上がる。底面は、北から南へ傾斜しており、断面形は平坦ではなく船底形を呈す。

覆土は、単層で長径2～5cm程の円礫を多量に含んだ暗褐色土である。

出土遺物は、覆土中より甕形土器片が30片程検出されたが、特に中央部南寄りの上層に集中して見られた。いずれも弥生時代中期前葉(丸子式)に比定できる甕形土器片で、その色調・胎土・施文などから少なくとも4個体の甕型土器が確認できる。

この丘陵を中心とした周辺域には、該期を含めた弥生時代の遺跡は確認されていないことから、出



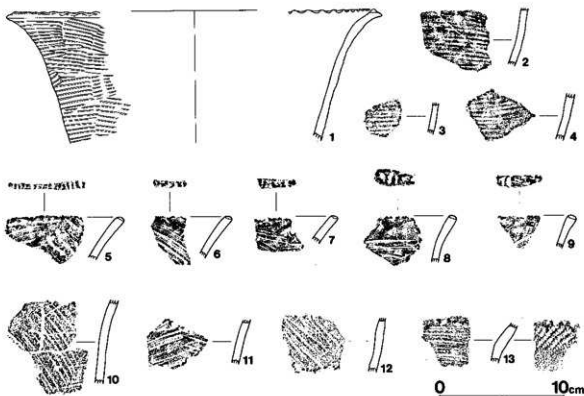
第40図 SF01実測図

土遺物は流れ込みによるものではなく、土壌内にあったものが攪乱されたものとも考えられる。さらに土壌の立地を勘案すれば、これらの甕形土器片は該期にみられる土器棺と考えられる。

2. 遺物 (第41図)

遺物は、SF 01内より出土した土器片である。土器片の量は30片あまりで、大半が小破片であった。色調・胎土・施文などの観察によれば、少なくとも4個体の甕形土器が含まれているが、接合・復元はほとんどできなかった。以下、番号順に土器の説明をしていく。

1は甕形土器の口縁部から胴上半部片である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に面取りをしている。口唇部の外面には横位の条痕を施し、内面には指頭による押圧紋を施す。胴部には二枚貝による横・斜位の条痕が施される。2～4は1と同一個体になる甕形土器の胴部片である。いずれも横・斜位の条痕が施される。5～7は同一個体の甕形土器の口縁部片である。口唇部は面取りされ二枚貝による押し引き紋が比較的密に施される。外面には半截竹管もしくは半截竹管状工具による横・縦位の羽状(5)の条痕が施される。8・9は同一個体の甕形土器の口縁部片である。5～7に比べ器壁が厚い。口唇部は面取りされ二枚貝による押し引き紋が施されるが、5～7に比べその間隔が広い。外面には半截竹管もしくは半截竹管状工具による横・斜位の条痕が施される。10～12はいずれも8・9と同一個体になる甕形土器の胴部片である。横位、縦の羽状(11)の条痕が施される。13は甕形土器の口縁部片で頸部に屈曲がみられる。外面には斜位の櫛による条痕が、内面には単筋LRの斜縄文が施される。



第41図 出土土器実測図

IV ま と め

1. 土橋横穴群について

1) 横穴の年代について

今回の調査では、8基すべての横穴から遺物が出土している。特に、土器については、図化したものの総数は97点を数える。横穴の天井部崩落、平安・鎌倉期の再利用等による攪乱は確認されたものの、遺物への被害は幸いにも少ないものであった。

各横穴の年代（構築年代・追葬年代）を推定するにあたっては、出土土器の須恵器が最も基本的な依り所となるわけであるが、その編年的研究は各地で精力的に進められており、本県においても遠考研編年（1）、川江編年（2）が提示されている。県内においては、この2編年が最も普及していると言える。近年では、遠考研編年、川江編年をベースに、三方原台地の半田山古墳群・瓦屋西古墳群・四ッ池古墳群等の新知見を加えた編年案（3・4他）や、湖西地区の窯跡出土の資料を軸にした編年案（5）も提示されている。

さて、本報告書でも、遠考研編年、川江編年に準拠して、本横穴群における須恵器の蓋環の編年を推考してみたい。

分類と年代

形態と法量差による分類を行うと下記の4つに分類できる。法量差については、先学の編年でいう長脚一段透高環の出現以降の蓋環にみる大型化、その後時代を降るにしたがって小型化するという傾向から、特に坏身の最大径と坏蓋の口径を分類の第一指標とした。形態については、口縁部立ち上がりに着目し、その分類指標とした。

I類

坏身は、最大径15cmを上回り、体部も深い。口縁部の立ち上がりはやや内傾するが、長さは比較的長い。坏蓋も大型で、口径15cmを測る。肩部の稜は不明瞭で沈線にちかい。1号横穴の1・2が唯一その典型と言える。

II類

坏身は、最大径が14～15cm大で、口縁部の立ち上がりはI類に比べ内傾が強く、長さも短い。口縁部の作り、体部形については、同じII類とした中でも形態差が認められる。口縁部立ち上がりの長さは、すべて1cm程であるが、やや外反気味に内傾するもの（3号横穴-8～10、4号横穴-28、6号横穴-53、7号横穴-69等）、肥厚して断面形が三角形を呈すものがある（3号横穴-11、6号横穴-54、7号横穴-70等）。体部の形態については、深く丸みの強い丸底を呈すもの（3号横穴-8～10、6号横穴-55・56、7号横穴-69）、やや扁平気味で平底を呈すものなどがある（3号横穴-11・12、4号横穴-28、6号横穴-53、7号横穴-65・71）。その他にも器高が、3cmを割るかなり扁平なものも少数ではあるが認められる。

坏蓋は、口径13.5cm前後を測り、体部はやや扁平な半球形を呈す。肩部の稜、及び沈線の施されるものは認められない。

III類

坏身は、最大径が13.5cm前後で、II類同様口縁部立ち上がりの内傾は強く短い（9号横穴-92・93）。坏蓋は、口径12～13cm大で総体に体部は扁平（4号横穴-30、5号横穴-36、6号横穴-50）である

が、器高が比較的深いものがある（5号横穴-37・7号横穴-64）。

IV類

坏身は、最大径が12cm前後で、体部の丸みが強い半球形を呈すものと、底部に向かってすぼまるものがある。丸みの強いものは、口縁部の立ち上がりがⅢ類よりも長く、端部内面には沈線状の稜を巡らせ、体部にも沈線を施すという特徴を有すものがある（3号横穴-14、6号横穴-57）。

坏蓋は、口径11.5cm前後で、肩部に沈線状の稜を有し、口縁部が直立するもの（6号横穴-51・52）、半球形を呈し沈線を巡らすもの（8号横穴-77）、沈線をもたずに半球形を呈すもの（3号横穴-7、8号横穴-78）の3つに細分できる。

上記の4分類した土器群の年代について触れてみたい。なお、年代を推定するにあたっては、川江編年の年代観に比定した。

最大径・口径にみられる縮小化と坏身口縁部の退化的変化から、Ⅰ-Ⅱ-Ⅲ-Ⅳ類とする型式変化が推定できる。

Ⅰ類は、本横穴群では最も古く位置づけられ、Ⅲ期前葉（6世紀中葉）に比定し得るが、蓋にみられる肩部稜線の形態化は後出的要素と考えられる。Ⅲ期前葉でも新しいものと考えたい。

Ⅱ類は、Ⅲ期中葉（6世紀後葉）に比定し得るものと考えられる。Ⅱ類では、前記のように形態差を時期差とは考えずに、同時期内での形態差とした。その供伴関係については、出土状況が問題となるが、6号横穴では追葬時の一括整理と想定され、有効な傍証とはなり得なかった。しかし、体部形において、丸みの強い丸底を呈すものと偏平なものとは、法量（器高）においても著しい差が認められ、これが同時期とした中の小時期差であるか、同時期内での形態差（生産地の違い）であるかについては、今後検討を要す問題である。

Ⅲ類は、Ⅲ期後葉（6世紀末葉）に、Ⅳ類は、Ⅲ期末葉（7世紀初頭）に比定し得るものと考えられる。

横穴群の変遷

次に、出土須恵器から得られた相対編年及び年代観より横穴の築造年代・追葬年代を推定し、本横穴群の変遷を整理してみたい。

本横穴群の築造は、6世紀中葉、1号横穴の掘削をもって始まる。土器型式についてみる限り、当地域での初現とされる山麓横穴（9）には遅れるものの、それに続く宇洞ヶ谷横穴や群構成を成す横穴としての本村横穴A群1号横穴（8・9）などと同時期かと思われる。土器型式、この場合Ⅲ期前葉の認識については、当該地域での横穴導入とも関わるだけに慎重な検討が必要であろう。しかし、少なくとも原野谷川中流域に展開する横穴群の中では、最古式の一つと考えて差し支えないと思う。

前段階の横穴は、1号横穴の1基のみであったが、6世紀後半になると早くもピークを向かえる。8号横穴を除くすべてがこの時期に築造される。これは、本横穴群のみならず、原野谷川流域の楢ヶ谷横穴群、垂木川流域の岩谷横穴群、逆川流域の大谷代横穴群などの大規模な横穴群が形成され、市内全域に築造が拡大するという当該地域の拡大・展開期にあたる。

7世紀初頭、土器型式でいうⅣ類の時期には、新たに築造されたものは8号横穴1基のみで、前段階までに築造されたものに若干の追葬がみられる程度になり本横穴群は衰退する。追葬について言及しておく、Ⅲ類（6世紀末葉）が出土している横穴は4～7・9号横穴であるが、各々の横穴からの出土点数をみると、4～7号横穴では蓋が1点ずつ、9号横穴では身が3点であった。前段階（Ⅱ類）のものとの出土点数を比較すると極端に少ない。4～6号横穴については、閉塞の遺存状況より盗掘の可能性はほとんど考えられないことから、追葬時にこれらを副葬したと考えるより築造時に

Ⅲ類と一緒に副葬されたとするほうが蓋然性であろう。つまり、この混在は4～6号横穴の築造時にはⅡ類が主形式ではあったが、Ⅲ類も少数ではあるが使われ始めていた結果によると考えられる。したがって、Ⅲ類の時期（6世紀末葉）の追葬は全くないとは断言できないが、追葬の可能性は極めて少ないと考えられる（9号横穴はこの時期の追葬が考えられるが、後世の攪乱が認められるため除外した）。4・5号横穴がⅡ・Ⅲ類の時期（6世紀後葉～末葉）の単次葬横穴で、同じ時期に築造された6号横穴はその出土土器より7世紀初頭に追葬が行われたものと考えられる。

Ⅳ類（7世紀初頭）の土器と築造期のⅡ類との出土比率は、Ⅱ類5：Ⅳ類1の割合で、追葬時に副葬される土器は減少する。築造数の激減と土器に代表される副葬品の減少は、この期に至って本横穴の築造集団の急激な衰退を意味するものと考えられる。同じ原野谷川流域に分布する楠ヶ谷横穴群・宮坂横穴群はこの時期には衰退することなく造営が続くことから対照的であり、相互の関係が注目される。

2) 群構成について

横穴の年代についてみてきたが、つぎにこれらの年代を踏まえ、本横穴群の群構成について検討してみた。各横穴の立地と、主軸方位、標高の近似値からみた配置などの立地環境の同一的なグループを単位群と認識し、横穴相互の関連性について検討を加えてみたい。

本横穴群は、8基の内7基までが丘陵の南斜面に構築されており、残る1基は西斜面であるが、南斜面の7基とは近接している。北側斜面、東斜面、更に東へ延びる南斜面には、横穴は構築されていないことから、この一支群のみの単一支群であると言える。この一支群は、先に示した単位群分けの緒条件より、5単位群に分けることが可能と考えられるが、単位群を構成しない単独のものが、3基あるため、厳密には2単位群+単独3基と言えよう。

1号横穴は、単位群を構成しない単独横穴の1つで、本横穴群築造の端緒となった横穴である。標高56m程の山頂を背後に控え、その山頂を墳丘に見立てるかのよう、中腹に立地する。本横穴群の中では、沖積地を見通せる谷の奥の中央部、またレベル的にも最高位の立地を示す。横穴と横穴石室墳との差異は、構築方法は当然であろうが、墳丘築造の有無こそが第一義的差異と考えられている。横穴群築造の端緒としてのその占地は、築造に最も適した場所を選定したことによるものであろうが、1号横穴の場合、それに加えてあたかも墳丘を意識したかのような立地を示しているようにも見える。

3号横穴と4号横穴は、主軸方位とレベルが近似値を示すことと、墓前城の共有はないものの、墓道と呼ぶべき同形態の墓前城を有すことから、この2基から成る単位群が想定できる。同じ単位群にあってもこの2横穴は、玄室の形態が異なる。3号横穴は、長方形の平面形を有し、奥壁断面形及び玄室横断面はアーチ形を呈す。4号横穴は、平面形は楕円形で、横断面形はドーム形を呈す。同じ横穴群において、形態の異なる横穴の混在は、岡津横穴群・本村横穴群などでも認められる。ドーム形横穴の分布は小笠郡下に集中し、市内域では南部にその分布がみられる。市内域においては妻入りアーチ形・尖頭形が主体となる地域であり、分布においてはドーム形は客体的な形態と言える。

5号横穴は、本横穴群の西斜面に位置し、単位群を構成することなく単独で存在する。

6・7・9号横穴の3基は、いずれも南斜面の西寄りに位置する一群である。主軸方位はほぼ近似値を示し、等間隔に配置されている。しかし、レベル、玄室の形態においては、相異が認められる。7・9号横穴には、玄室に形態・規模ともに類似した棺台を設けているが、6号横穴の棺台は7・9号横穴のものとは異なる。6号横穴は、7・9号横穴とは区別しても考えられるが、単位群の認定においては、平面的配置、この場合には主軸方位・間隔が第一義的要素と考えられ、棺台の相異はむしろ

ろ付帯要素と言えよう。したがって、この3基から成る単位群を想定して差し支えないであろう。この3基は、墓道（墓前城）が検出されておらず、立地する南斜面の状況から流失してしまった可能性が強い。形態としては、同時期の築造である3～5号横穴と同形態の墓道状の墓前城であったと考えられる。しかし、流失の規模を考慮しても墓道の規模、特に長さは3～5号横穴に比べ短いものであったと思われる。

南斜面の裾に位置する8号横穴も、単位群を構成することなく単独で存在する。単独立地であるが、墓前城の形態は他の横穴のそれとは異なり、広い前庭をもつものである。

2. 長沢遺跡について

遺構については、その形状・規模にはやや疑問が残るものの、その出土土器、丘陵上という立地より弥生時代中期の土器墓と考えた。

長沢遺跡の土器棺は、壺形土器を使ったものであるが、それらはいずれも小破片であり土壌同様、出土状態には攪乱の可能性もある。そのため、出土土器から土器棺の形態を推定するには、攪乱の可能性を考慮する必要がある。土器棺の形態については、甕（深鉢）の合わせ口棺、壺を身とするもの、甕を身とするもの、破片を組み合わせたもの、の4つに大きく分類されている（12・13）。その形態変化は、縄文時代晩期（樞王～水神平式）では深鉢・甕が主流で、弥生中期前葉（丸子式）以降は壺が主流となっていく傾向がみられ、破片の組合せ棺は中期中葉（瀬田式）まで続くと考えられている。中期中葉（丸子式）の原川遺跡（11）では6基の土器棺が確認されている。甕と甕の合わせ口棺1、甕破片の組合せ棺3、壺破片の組合せ棺1、壺破片と甕破片の組合せ棺1であり、土器棺に壺が使われてはいるが、その主流は甕である。甕から壺への変化、特に棺身としての変化は、地域によっても様々で漸移的なものと言える。本遺跡の場合、壺は含まれおらず、いずれも甕の破片であった。破片の組合せ棺が、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉を通じて普遍的にみられることから、甕の破片を使った組合せ棺と考えられる。

出土した条痕系土器については、いずれも壺形土器の小破片であるが、口唇部にその特徴がみられる。1の指頭による押圧と横位の条痕の組合せは、原川遺跡などにみられる丸子式の特徴である。5～8の押し引き紋は、先行する水神平式の特徴である。出土状態より一括と考えられるものの小破片で個体数も少ないことから、丸子式段階での残存要素と考えていいものか疑問が残る。原川遺跡との時間差も考えられるが、その点については原川遺跡のみならず当然該期の他の遺跡を含めた検討が必要であろう。ここでは弥生時代中期中葉の丸子式に比定しておきたい。

3. ま と め

最後に上記内容を整理し、若干の課題を提起することでまとめたい。

土橋横穴群は、その出土土器より6世紀中葉に築造が開始されたものと考えられるが、この年代が妥当なものとするれば、当地域においては最古式の横穴の一つと言える。しかし、6世紀中葉とした土器については、前記のように、この年代が当地域の横穴導入に関わるだけに慎重な検討を要すと考えられる。

3号横穴と4号横穴にみられる同単位群における玄室異形態の混在は、何に基づくものなのかという問題を考えたとき、それぞれの分布形態より本横穴群にあっては4号横穴（ドーム形）の客体性が

看取される。つまり、アーチ形・尖頭形横穴を主体とする本横穴群にあっては、ドーム形横穴は外部からの移入と考えられる。大胆な言及をすれば、他集団との対外的な交渉、例えばこの場合にはドーム形横穴を造る集団とアーチ・尖頭形横穴を造る集団の姻族関係のような交渉によってもたらされたもの、付言すれば同じ横穴群内での形態差は出自の違いの表出と考えられないだろうか。しかし、これは現象面での一考であり、仮にこの形態差を出自の違いと考えた場合、形態差として具現化する必要性といった内因の検証にはならないし、また別問題であろう。他の横穴群の事例を含めて検討する必要がある。

本横穴群の場合、6世紀末葉～7世紀初頭には早くも築造・追葬は終る。その終末期の築造数の激減より、築造集団の衰退を想定した。同じ原野谷川流域の楢ヶ谷横穴群・宮坂横穴群の隆盛が該期にあたり、両者の動態は対照的である。この急激な変動と、これとは対照的な隆盛は個別なものではなく、常に有機的なつながりをもったものと考えられる。横穴群個々の分析がなされておらずやや恣意的になるきらいがあるため言及は避けたい。該期の集落遺跡の調査例は近年増加しつつあるが、集落動態や横穴群との関連などの検証には未だ情報量として乏しい現段階においては、横穴群相互のあり方は、示唆に富んだ情報を内包していると言えるし、今後更に注目すべき点でもある。

長沢遺跡については、土器型式からすればほぼ同時期とも考えられる原川遺跡との関連が注目されよう。原川遺跡では集落内に営まれた土器棺墓群であるが、居住域とは分けて墓域を形成している。長沢遺跡では集落とは離れた丘陵上に立地するという立地に違いがみられる。従前ではあるが立地相違の要因の解明は大きな課題の一つと言える。

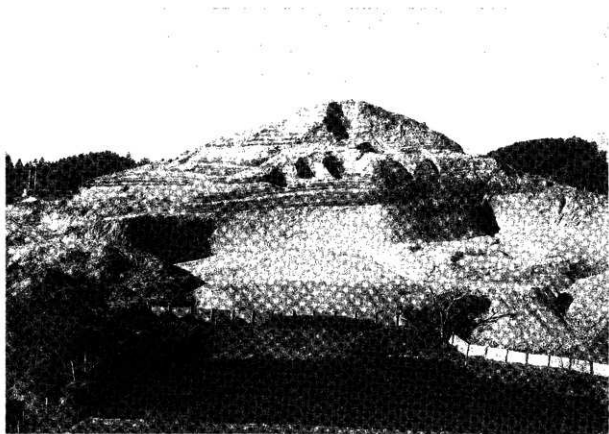
〔引用・参考文献〕

- (1) 山村 宏 他 『大沢・川尻古窯調査報告書』 湖西市教育委員会 1966
- (2) 川江秀孝 『静岡県下の須恵器について』 『静岡県考古学会シンポジウム2』 静岡県考古学会 1976
- (3) 鈴木敏則 他 『半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡』 浜松市遺跡調査会 1984
- (4) 鈴木敏則 他 『四ツ池古墳群』 浜松市文化協会 1986
- (5) 後藤建一 『6世紀を中心とした湖西古窯跡群の諸様相』 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 湖西市教育委員会 1987
- (6) 向坂綱二 他 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』 静岡県教育委員会 1971
- (7) 平野和男 他 『掛川市阿津横穴群(A・B)発掘調査概報』 静岡県教育委員会 1966
- (8) 向坂綱二 他 『掛川市本村横穴墳・本村古墳(1号・2号)発掘調査概報』 静岡県教育委員会 1966
- (9) 平野吾郎 他 『遠江の横穴群』 本文編 静岡県教育委員会 1983
- (10) 平野吾郎 『原野谷川流域の古墳群』 『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版会 1980
- (11) 平野吾郎 他 『原川遺跡Ⅰ』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988
- (12) 向坂綱二 『静岡県下の土器棺』 『静岡県博物館協会研究紀要』 第13号 静岡県博物館協会 1990
- (13) 佐藤由紀男 『中期弥生土器—東遠江から西と東をみる—』 『遠江の集落と墓』 『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』 東海埋蔵文化財研究会 1990
- (14) 佐藤由紀男 『静岡市丸子セイソウ山・佐渡遺跡出土土器の再検討』 『静岡県博物館協会研究紀要』 第10号 静岡県博物館協会 1987

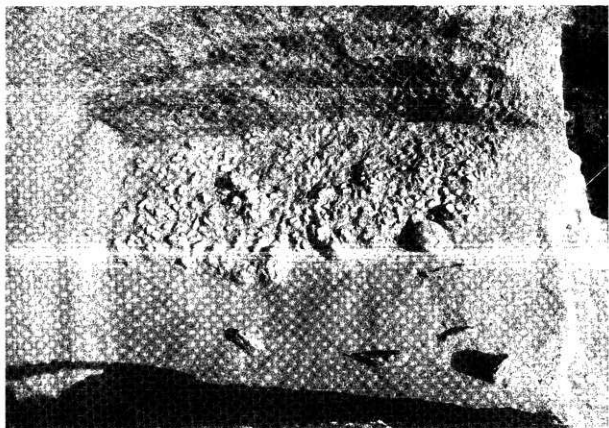
圖 版



調査前全景



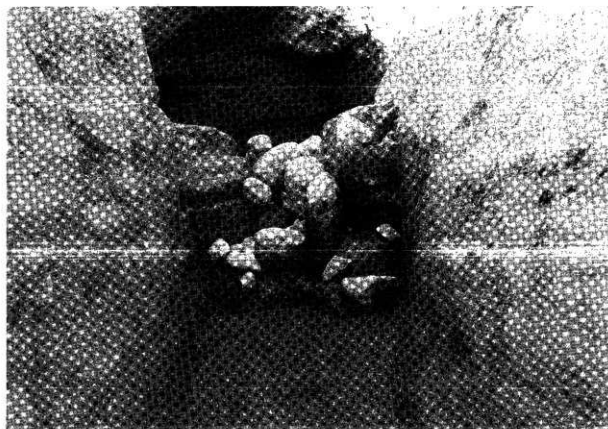
土橋横穴群全景



第1号横穴竈床・遺物出土状況（西より）



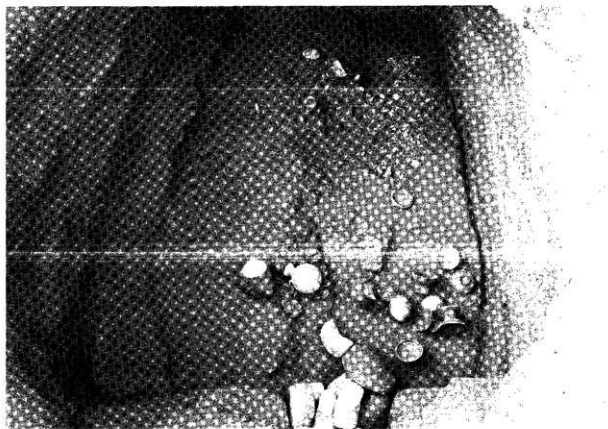
第3号横穴全景



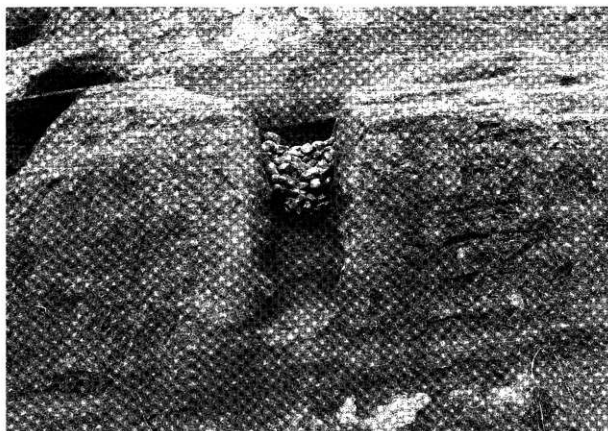
第3号横穴閉塞状況（墓道より）



第3号横穴閉塞・遺物出土状況（玄室より）



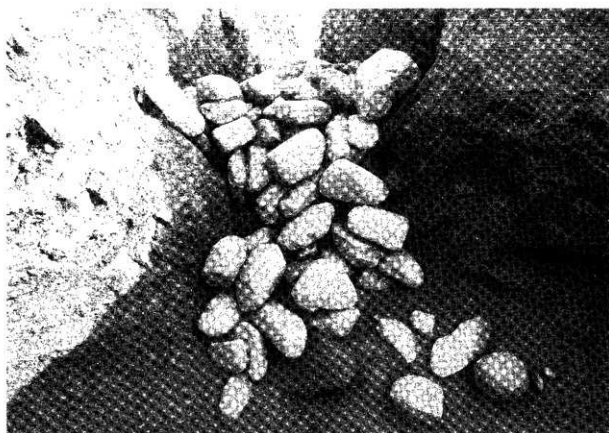
第3号横穴遺物出土状況



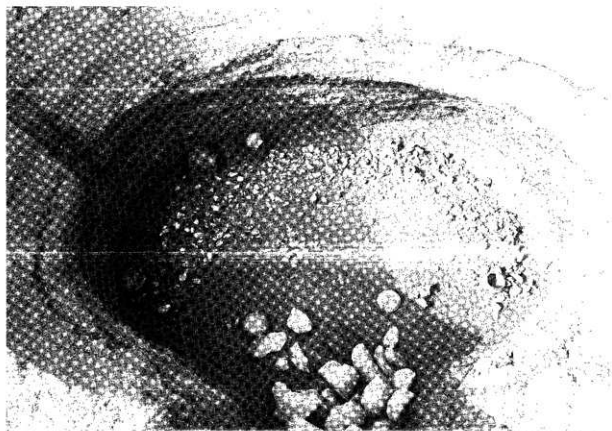
第4号横穴全景



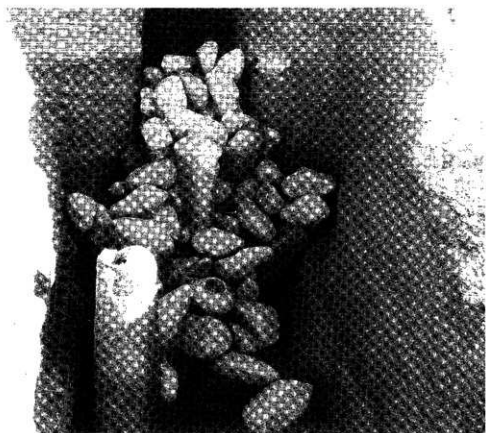
第4号横穴閉塞状況（墓道より）



第4号横穴閉塞状況（玄室より）



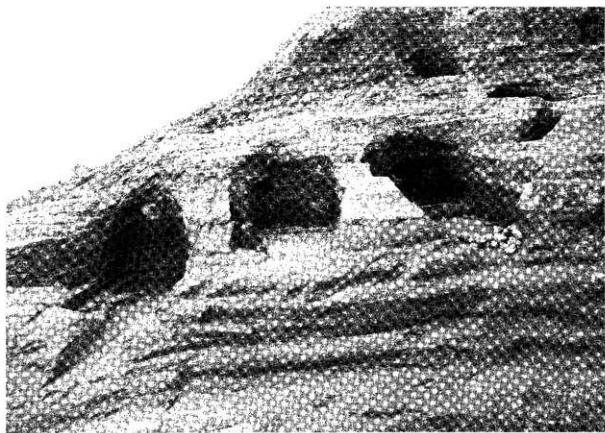
第4号横穴遺物出土状況



第5号横穴閉塞状況（墓道より）



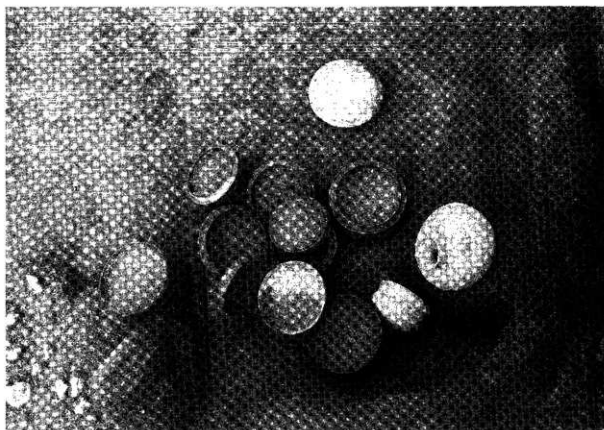
第5号横穴全景



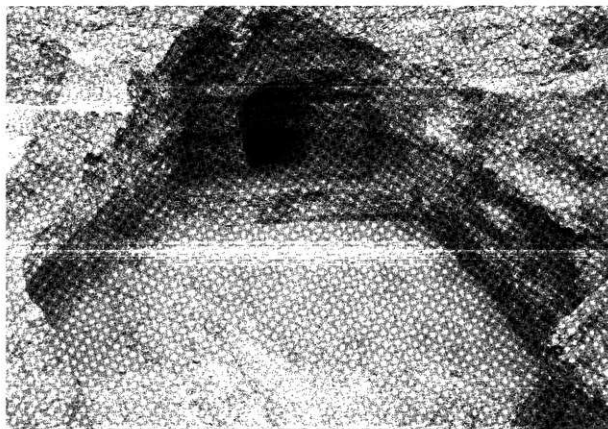
第6·9·7号横穴全景



第 6 号横穴遺物出土状況



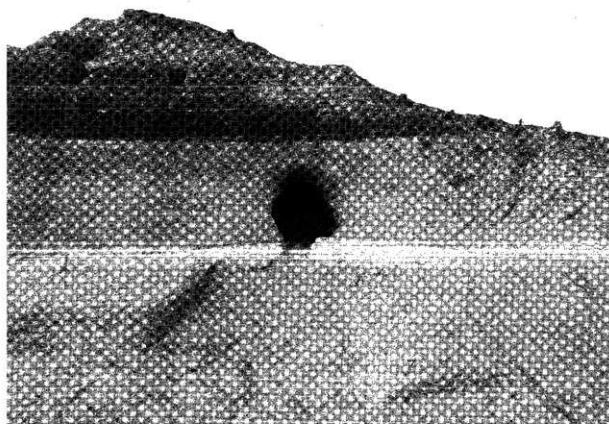
第 6 号横穴遺物出土状況



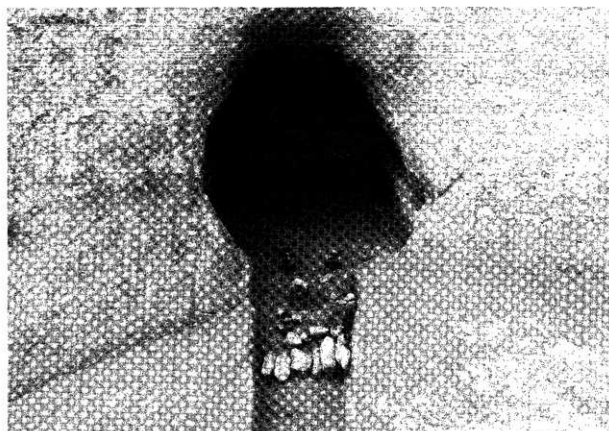
第7号横穴槽台・奥横穴全景



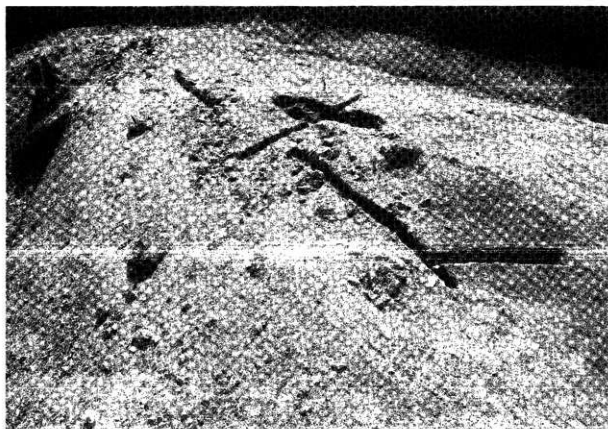
第9号横穴槽床・遺物出土状況



第8号横穴全景



第8号横穴遺物出土状況



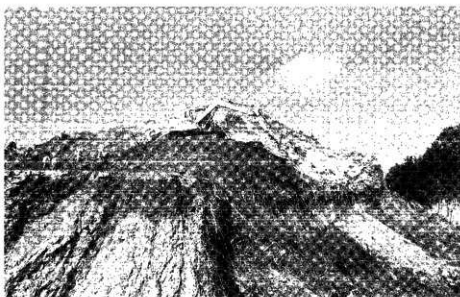
長沢遺跡全景（北より）



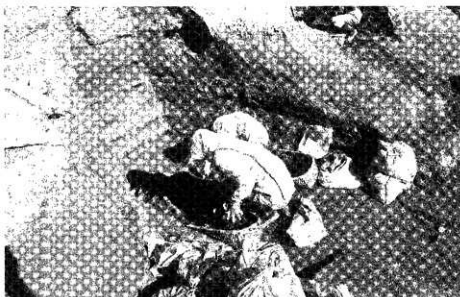
SF01全景（東より）



伐採風景



重機作業風景



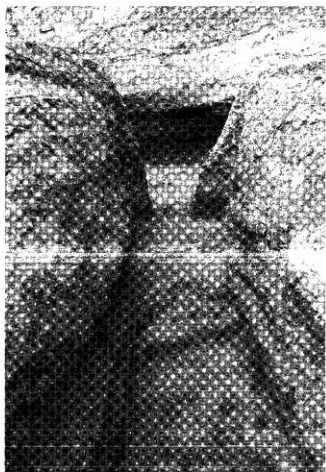
作業風景



第3号横穴墓道



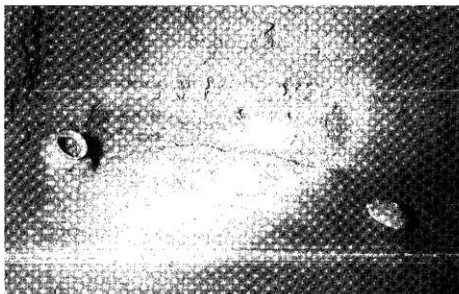
第3号横穴支門～
墓道（支室より）



第4号横穴墓道



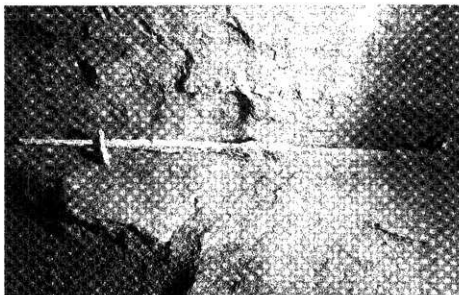
第4号横穴玄門～
墓道（玄室より）



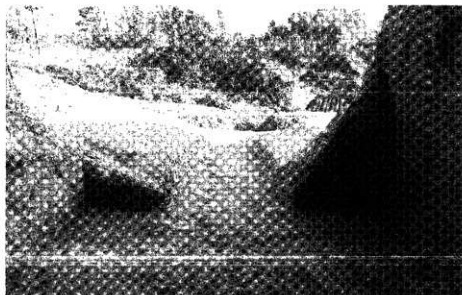
第5号横穴槽室内
遺物出土狀況



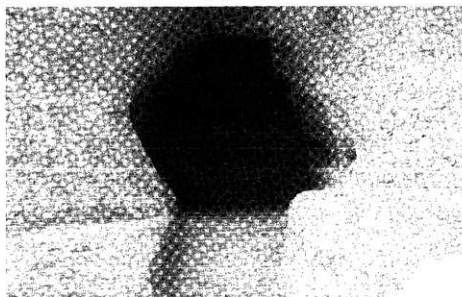
第5号横穴玄室内
遺物出土狀況



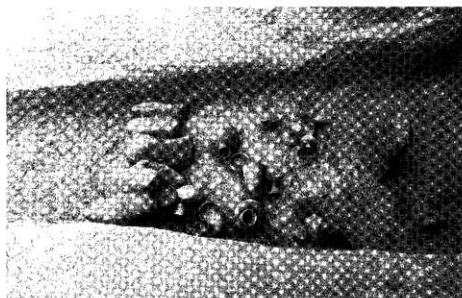
第5号横穴大刀
出土狀況



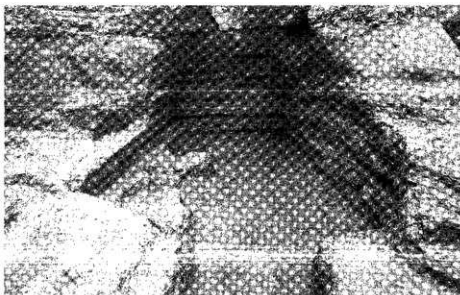
第8号横穴主門一差道
(玄室より)



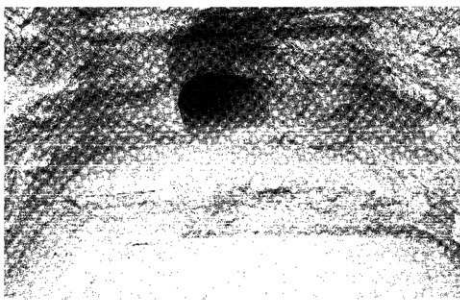
第8号横穴全景



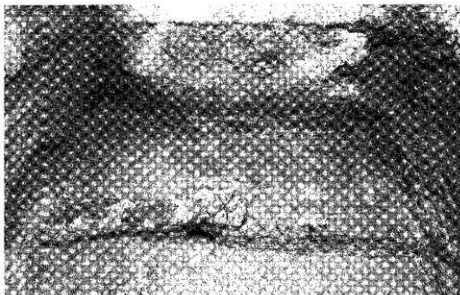
第8号横穴遺物出土状況
(東より)



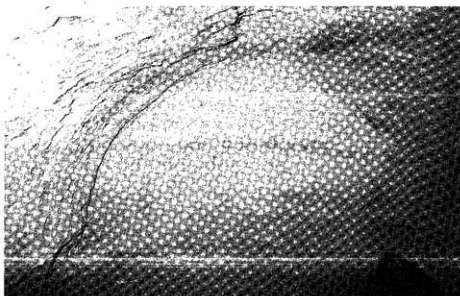
第6号横穴支室全景



第7号横穴奥壁部横穴



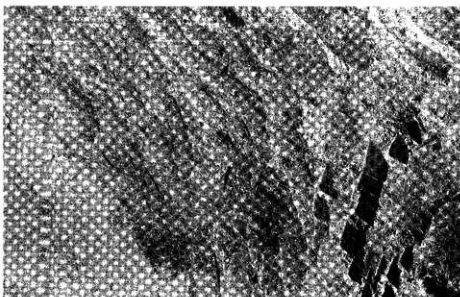
第9号横穴棺台



第5号横穴顶部



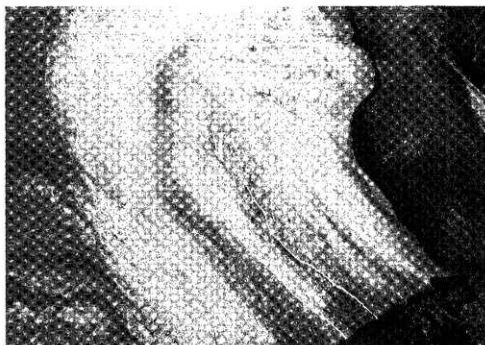
第5号横穴左侧壁工具痕



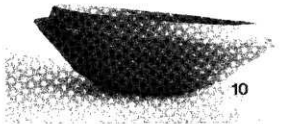
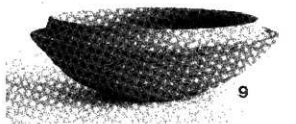
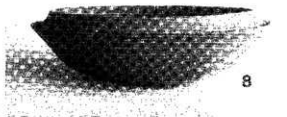
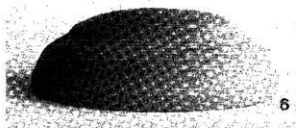
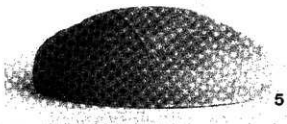
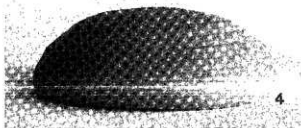
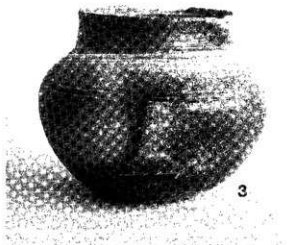
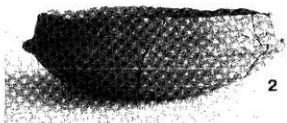
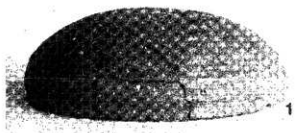
第5号横穴右侧壁工具痕



SR01・SD01全景 (東より)



SR01・SD01全景
(西より)



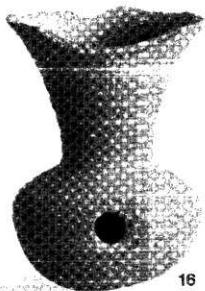
出土土器 (1)



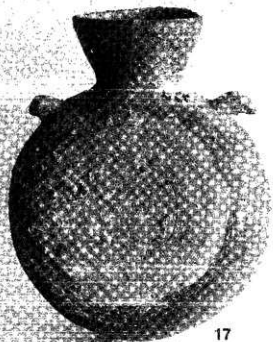
13



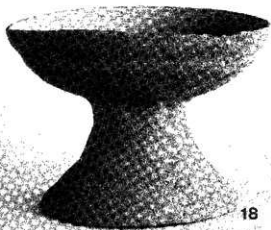
14



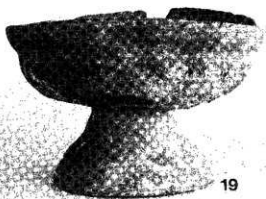
16



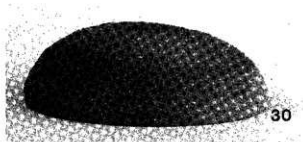
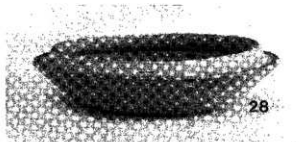
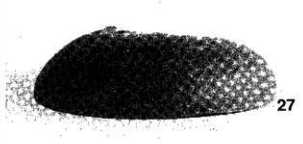
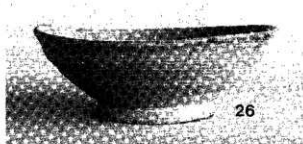
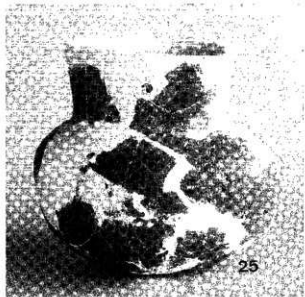
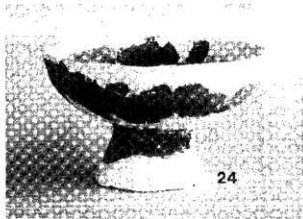
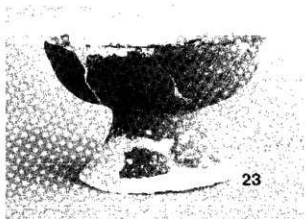
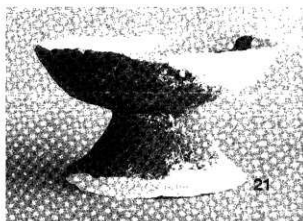
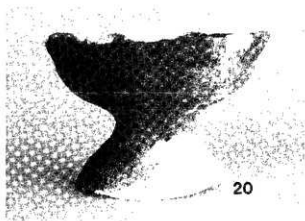
17



18



19





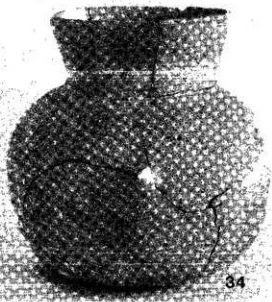
31



32



33



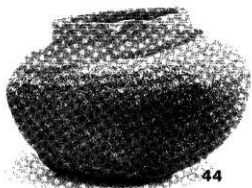
34



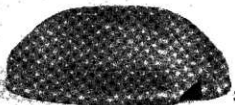
35



36



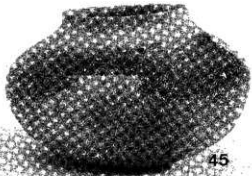
37



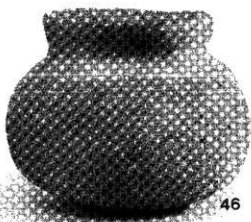
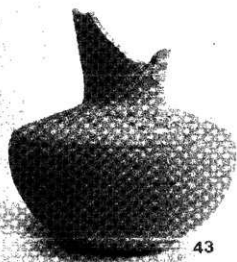
38



39



40





54



55



56



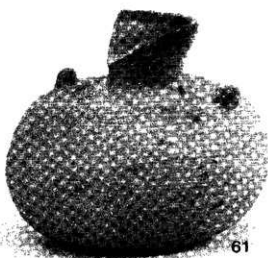
57



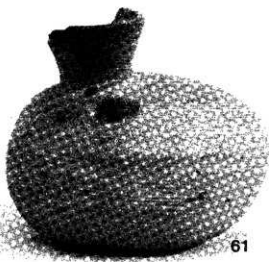
58



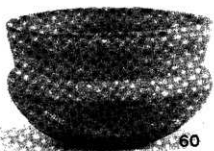
59



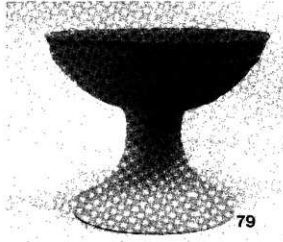
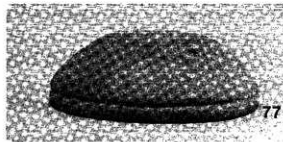
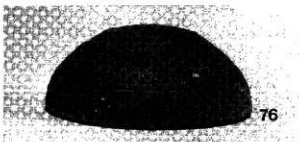
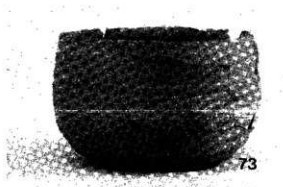
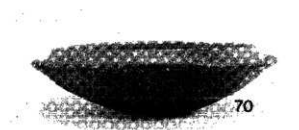
60

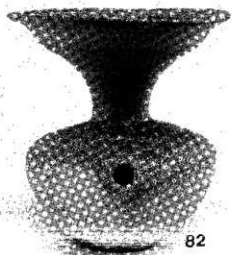
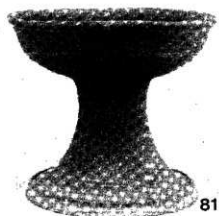


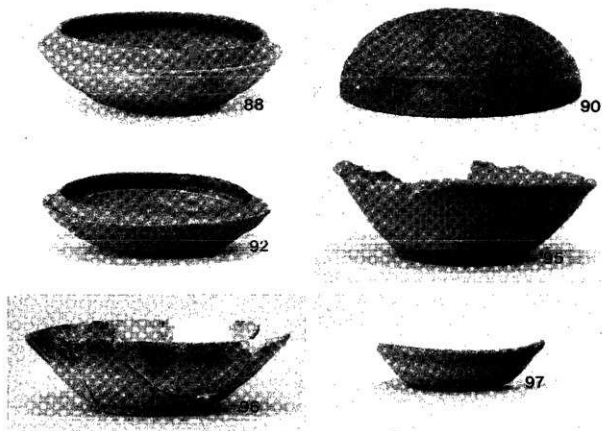
61



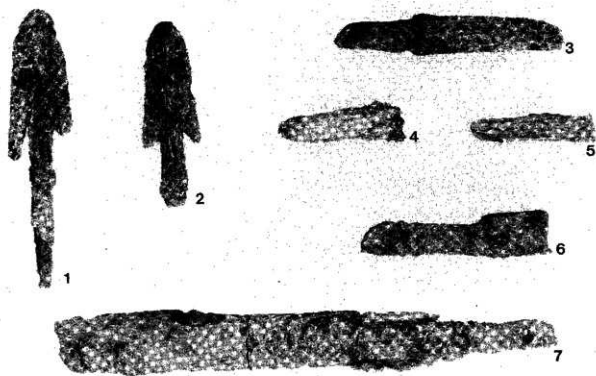
60



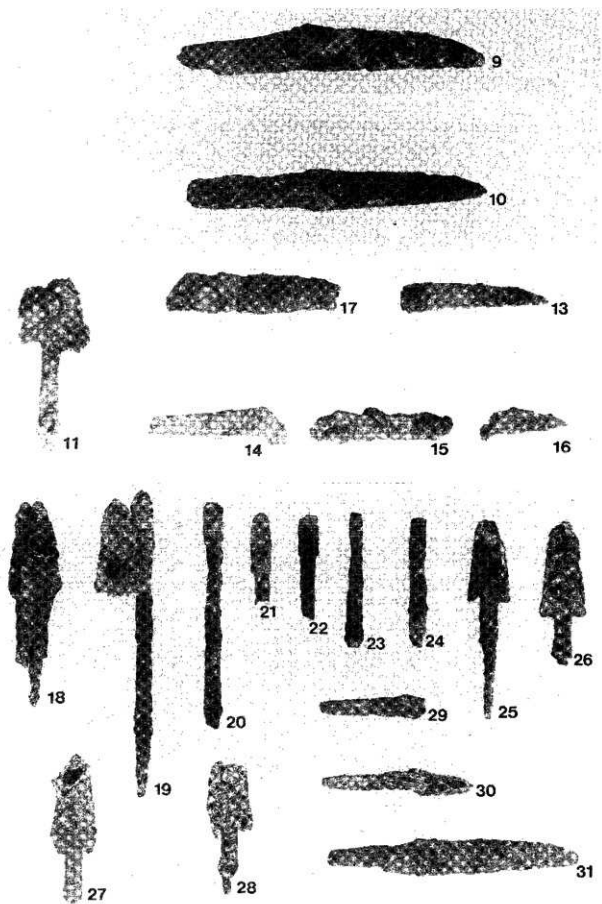




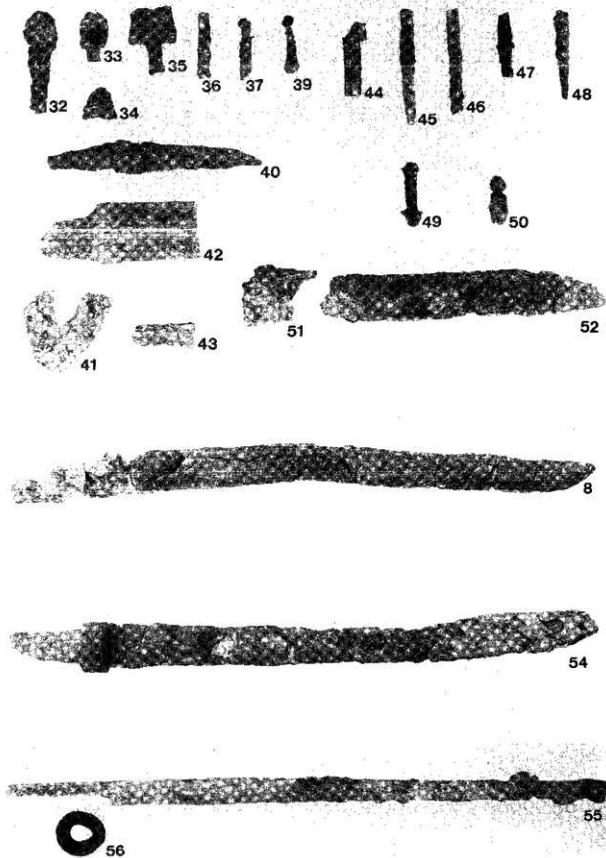
出土土器 (9)



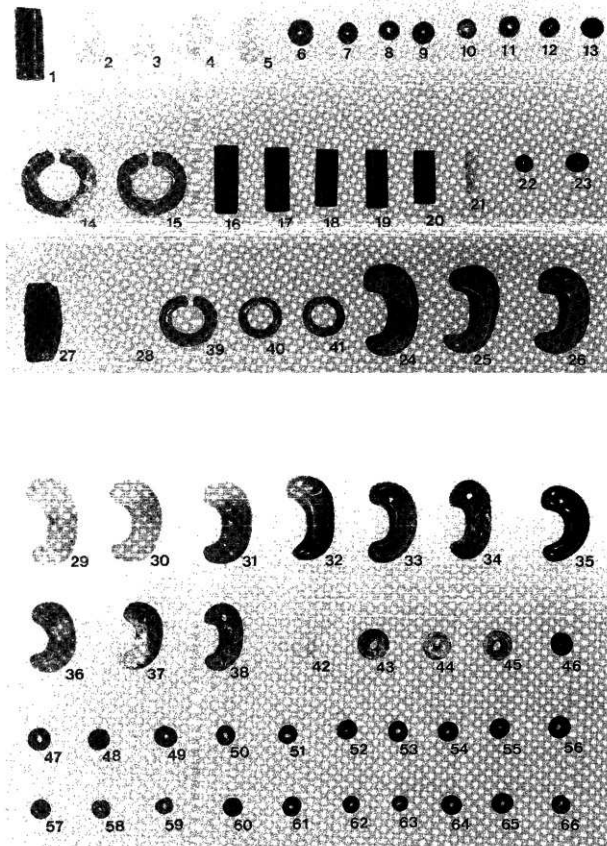
出土鉄製品 (1)



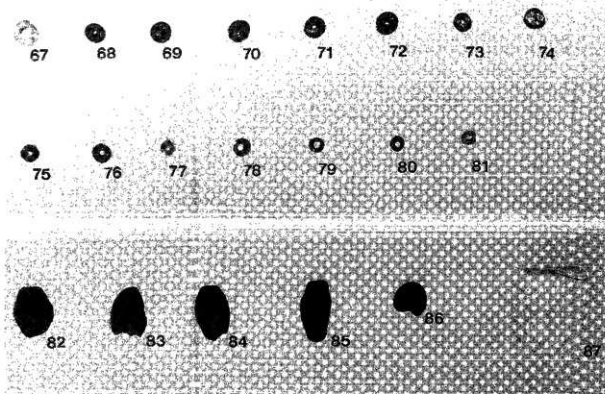
出土鉄製品(2)



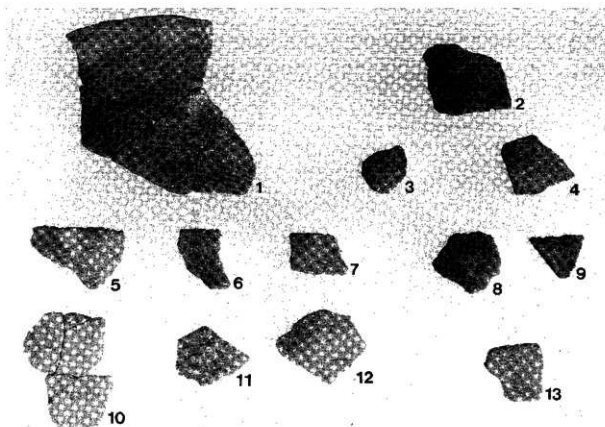
出土鉄製品(3)



出土随身具 (1)



出土装身具(2)



長沢遺跡出土土器

土橋横穴群・長沢遺跡

発掘調査報告書

平成3年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

印刷 株式会社 三創
静岡市中村町166-1
TEL (054) 282-4031



